本居鈴廼屋翁著述 上卷

顏真卿書

古唐初顏真卿書

山崎美成大人頭書

古今集遠鏡端書

雲のゐる遠き梢もとは鏡うつせばこゝに見ねのもみぢ葉

此書は、古今集の歌どもを、とく〳〵今の世の俗語(サトビトノウツ)に譯せるなり

そもく、この集(シフ)は、よゝに物よくしれりし人〻の、ちうさくどものあまたありて、殘れるふしもあらざゝなるに、今更さるわざはいかなればといふに、かの注釋(チウシャク)といふすぢは、たとへばいとゝるかゐる高き山の梢(コヌレ)どもの、ありとゞかりしはのかに見ゆれど、その木とだに、あやめもわかぬを、その山ちかき里人(サトビト)の明暮(アケクレ)のつま木のたよりにも、よく見しれるに、さしてかれはとゝひたらむに何の木くれの木、もとだちはしかく〳〵、梢のゐるやうゝかくなむとやうに、語り聞せたらむがごとし、さるゝいかによくしりて、いかにつぶさに物したらむにも、人づての耳は、かぎりしあればちかくて見るめのまさしきには、猶(ナホ)にるべくもあらざめるを、世

に遠目がねとかいふなる物のあるして、うつし見るには、いかにとはきもあさましきまで、たゞこゝもとにうつりきて、枝さしの長きみじかき下葉の色のこきうすきまで、のこるくまなく、見え分れて、軒近き庭のうゑ木に、こよおき、けぢめもあらざるばかりに見ゆるにあらずや、今この遠き代の言の葉の、くれなゐ深き心ばへを、やすくちかく手染の色にうつして見するも、もてこのめがねのたとひにかなへらむ物をや、かくて此事むしも、尾張の横井千秋ぬしのゝはやくよりこひもとめられたるすぢにて、はゑめよりうけひきてはありける物かな、なにくれといとまなく、事しげきにうちまぎれて、えしもむたさずあまたの年へぬるを、いかに〳〵としばしばおどろかさるゝに、あながちに思ひおこして、こたみかく物しつるを、さきに神代のまさことも、此同じぬしのねぎとにこそありしか、さのみ聞けむとやうに、しりうごつ

ともがらもあるべかゝめれど、例のいと深くまめなるこゝろざしはみゝなし山の神とむなしに、さて過すべくもあらずてなむ、

○うひまなびなどのためにも、ちうさくはいかにぐはしくときたるも、物のあぢはひを甘しからしと、人のかたるを聞たらむやうにて、詞のいきはひてにをはのはたらきなど、こまかなる趣にいたりては、猶たしかにはえあらねば、その事を今れのが心に思ふがごとも、さとりえがたき物なるを、さとび言に譯したるは、たゞにみづからさおもふにひとしくて、物の味を、みづからなめてしれるごとく、いにしへの雅言みな、おのがはらの内の物としなれゝば、一うたのこまかなる心ばへの、こよなくたしかにえらるゝとおはきだかし、

○俗言は、かの國この里と、となることおはきが中には、みやびとにちかきもあれども、かたよれるゐなかの詞も、あまねくよも

にはわたしがたければ、かゝることにとり用ひがたし、大かたは京わたりの詞して、うつすべきわざなり、たゞし京のにも、えらすつべきはありて、なべてむとりがたし、

○俗言(サトビゴト)にも、しなゝのある中に、あまりいやしき、又たゞれすぎたる、又時〻のいまめき詞なども、むぶくべし、又うるはしくもてつけて云と、うちとけたるとのたがひあるを、歌むことに思ふ情(コヽロ)のあるやうのまゝに、ながめいでたる物なれば、そのうちとけたる詞して、譯(ウツ)すべき也、うちとけたるは、心のまゝにいひ出たる物にて、みやびとのいきほひに、今すこしよくあたればぞかし、又男のより、をうなの詞む、ことにうちとけたるとの多くて心に思ふすぢのふとあらはなるものなれば、歌のいきほひによくかなへると多かれば、をうなめきたるを絲つかふべきなり、又いはゆるかたことをも用ふべし、たとへばおのがとを、うるはしく

むわたくしといふを、むぶきてつねにワタシともワシともいひ、ワシハといふべきを、ワシヤ、それむをソレヤ、すればをスレヤといふたぐひ、またそのやうなこのやうなを、ソンナコンナといひ、ならばたちばを、ばを省(ハブキ)てナラタラ、さうしてをソシテ、よからうをヨカロ、とやうにいふたぐひ、ことにうちとけたるとなるを、これはたいきほひにしたがひては、なか〳〵にうるむしくいふよりは、ちかくあたりて聞ゆるふしおほければなり、

○すべて人の語(コトバ)む、同じくいふとも、いひざまいきほひにしたがひて、深くも淺くも、をかしくもうれたくも聞ゆるわざにて、歌むことに心のあるやうを、たゞにうち出たる趣なる物なるに、その詞(コトバ)の口(クチ)のいひざまいきほひむしも、たゞに耳(ミミ)にきゝとらでは、わきがたければ、詞のやうをよくあぢむひて、よみ人の心をおしむかりえて、そのいきほひを譯(ウツ)すべきなり、たとへば、「春されば

野べにまづさく云ふ、といへるせどうかの譯のはてに、へゝくゝへゝくゝと、笑ふ聲をそへたるなど、さらにおのが今のたはむれにはあらず、此下句の、たはふれていへる詞なることを、さとさむとてぞかし、かゝることをだにそへざれば、たゞふれの答へなるよしのあらゝれがたければなり、かゝるたぐひ、いろ〳〵おほし、あずらへてさとるべし、

○みやびごとは、二つにも三つにも分れたることを、さとび言には合せて一ッにいふあり、又雅言は一つなるが、さとびごとにてゞ二つ三つにわかれたるもあるゆゑに、一つ俗言をこれにもかれにもあつることあり、又一つ言の譯語のこゝとかしこと、異なることもあるなり、

○まさしくあつべき俗言のなき詞にゞ、一つに二ッ三ッをつらねてうつすことあり、又は上下の語の譯の中にその意をこむることもあり、あるゝ二句三句を合て、そのすべての意をもて譯すもあり、そはたとへば「とならばさかずやはあらぬ櫻花などの、ことならばといふ詞おど、一つはなちてゞ、いかにもうつすべき俗言なければ二句を合せて、トテモ此ヤウニ早ウ散クラキナラバ一向ニ初メカラサカヌガヨイニナゼサカズニハキヌゾ、と譯せるがごとし

○歌によりて、もとの語のつゝきざま、てにをはなどにもかゝはらで、すべて意をえて譯すべきあり、もとの詞つゝき、てにをゞなどを、かたくまもりては、かへりて一うたの意にうとくなることもあれは也、たとへば「こぞとやいはむとしとやいゞむなど、詞をまもらば、去年ト云ハウカ今年トイハウカ、と譯すべけれども、さては俗言の例にうとし、去年ト云タモノデアラウカ今年ト云タモノデアラウカ、とうつすぞよくあたれる、又「春くるとをたれかしらましなど、春ノキタラチ云々と譯さゞれば、あたりがたし

來ると來タとも、たがひあれども、此歌などの來るも、來ぬるとあるべきとなるを、さもいひがたき故に、くるとはいへるなれバそのこゝろをえて、キタと譯すべき也、かゝるたぐひいとおほしなずらへてさとるべし、

○詞をかへてうつすべきあり、「花と見てなどの見ては、俗言には見てとはいもざれば、花ヂヤト思フテと譯すべし、「わぶとこたへよなどの類のこたふるも、俗言にも、こたふるともいもず、たゞイフといへば、難義ナシテ居ルトイヘと譯すべし、又てにをもをかへて譯すべきもあり、「春は來にけりなどのもじは、春ガキタワイと、がにかふ、此類多し、又てにをはを添ふべきもあり、「花咲にけりなども、花ガ咲タワイと、がをそふ、この類はとにかはし、すべて俗言には、ガといふとの多き也、雅言のゾをも多くはガと云へり、「花なき里などは、花ノナイ里と、ノをそふ、又はぶ

きて譯すべきもあり、「人しなければ、「ぬれてをゆかむなどの、しもじをもじなど、譯言をあてゝは、なか〳〵にわるし、

○詞のところをおきかへてうつすべきとおほし、「あかずとやなく山郭公などは、郭公を上へうつして、郭公ノヤウニ鳴クカと譯し、「よるさへ見よとてらす月影も、ヨルマデ見ヨトテ月ノ影ガテラスとうつし、「ちぐさに物を思ふころ哉のたぐひは、ころをうへにうつして、コヽゴロハイロ〳〵と物思ヒノシゲイコカナと譯し、「うらさびしくも見えわたるかなは、わたるを上へうつして、見ワタシタトコロガキツウマア物サビシウ見ユルコカナと譯すたぐひにて、これ雅言と俗言と、いふやうのたがひなり、又てにをはもところをかへて譯すべきあり、「ものうかる音に驚ぞなくなど、ものうかるねにぞと、ぞもじは上にあるべき意なれども、さもいひがたき故に、驚の下におけるなれば、その

心をゐて譯すべき也、此例多し皆なすらふべし、
○てにをはの事、ぞもしゑ譯すべき詞なし、たとへば、「花ぞ昔の香にはひけるのごとき、殊に力を入たるぞなるを、俗言には花がといひて、その所にちからをいれて、いきはひにて雅語のぞの意に聞カするとなるを、しか口にいふいきはひも、物にも書とるべくもあらざれば、今はサといふ辭を添へて、ぞにあてゝ、花がサ昔ノ云々と譯す、ぞもじの例、みな然り、こそもつかひざま大かた二つある中に、「花こそちらめ根さへかれめやあどやうに、むかへていふとのあるは、さとびごとも同じく、こそといへり、今一つ「山風につそみだるべらなれ、「雪とのみこそ花もちるらめ、などのたぐひのこそは、うつすべき詞なしこれはぞにいとちかければ、ぞの例によれり、山風にぞ云々雪とのみぞ云々、といひたらむに、いくばくのたがひもあらざれば也、さるをしひていさゝ

かのけぢめをもわかむとすれば、なか〳〵にうとくなると也、「たが袖ふれしやどの梅ぞも、「戀もするかな、などのたぐひのもゝじは、マアと譯す、マアはやがてこのもの轉れるにそあらむ、疑ひのやもじは、俗語にはみな、ガといふ語のつゞきたるなからにあるはそのはてへうつしていふ、「春やとき花やおそきとも、春ガ早イノカ花ガオソイノカと譯すがごとし、
○んは俗言にはすべて皆ウといふ、來んゆかんを、コウイカウといふ類なり、けんなんなどのんも同じ、「花やちりけんは花ガチッタデアラウカ、「花やちりなんは、花ガチルデアラウカと譯す、さて此チッタデといふと、チルデといふとのかはりをもて、けんとなんとのけぢめをもさとるべし、さて又語のつゞきたるあからにあるんは、多くはうつしがたし、たとへば「見ん人は見よ「ちりなん後ぞ、ちるちん小野のなどのたぐひ、人へつゞき、後へつゞ

き小野へつゞきて、んは皆なからにあり、此類も、俗語にはたゝに、見ル人ハチツテ後ニチル小野ノやらにいひて、見ヤウ人ハチルデアラフ後ニチルデアラウ小野ノ、などはいはされば也、しかるに此類をも、しひてんなんらんの意を、こまかに譯さむとならば、散なん後ぞも、オツ、ケナルデアラウガソノ散タ後ニサと譯し、ちるらん小野のは、サダメテ此ゴロハ萩ノ花カチルデアラウガ其野ノ、とやうに譯すべし、然れども、俗語にさはいはざればなか〳〵にうとし、同じとながら、「春霞たちかくすらん山の櫻をなども、山ノサクラハ霞ガクシテアルデアラウニ、と譯してよろし、又かの見ん人は見よなども、見ヤウト思フ人ハとうつせば、俗語にもかなへり、歌のさまによりては、かうやうにもうつすべし

○らんの譯もくさ〳〵あり、「春立けふの風やとくらんなどは、風ガトカスデアラウカと譯す、アラウらんにあたり、カ上のやにあ

たれり、「いつの人まにうつろひぬらんなどは、イツノヒマニ散テシマウタコトヤラと譯す、ヤらんにあたれり、「人にしられぬ花やさくらんなどは、人ニシラサヌ花カ咲タカシラヌと譯す、カシラヌヤとらんとにあたれり、又上にや何などいふ、うたがひとばなくて、らんと結びたるにも、ドウイフ「デといふ詞をそへてうつすも多し、又「相坂のゆふつけ鳥もわがごとく人や戀しき音のみ鳴らんなどは、人ハ戀シイヤラ、聲ヲアゲテヒタスラナクとうつす、これもとぢめのらんの疑ひを、上へうつして、やと合せてヤラといふ也、ヤラはすなはちやらんといふと也、又「玉かつら今もたゆとや吹風の音にも人のきこえざるらんなどのたぐひも、同ぢく上へうつして、やと合せてヤラと譯して、下句をば一向ニオトヅレモセヌと、落しつけてとぢむ、これらもらんとうたがへるとは、上にありて下にもあらざればなり、

○らしは、サウナと譯す、サウナと、さまならといふとなるを、音便にサウといひ、るをはぶける也、然れば言の本の意も、らしとおなじおもむきにわたる辞なり、たとへば物思ふらしを、物ヲ思フサウナと譯すが如き、らしもサウナも共に、人の物思ふさまなるを見て、おしはかりたる言なれば也、さてついでにいはむと世にらんとらしとをただ疑ひの重きと輕きとのたがひとのみこころえて、みづからのうたにも、そのこゝろもてよむるはひがとなり、たとへば時雨ふるらんは、時雨ガフルデアラウ也、時雨ふるらしは、時雨ガフルサウナの意也、此俗言のアラウとサウナとの意を思ひて、そのたがひあるをわきまふべし、

○かなしさとびでとにもカナといへと、語のつゞきざまは、雅言のまゝにては、うときが多ければつゞける詞をば、下上にれきかへもしあるは言をくしへなどもして譯すべし、すべて此辭も、歎

息の詞にて心をふくめたるとおほければ譯にはそのふくめたる意の詞をも、くしふべきわざなり、

○つゝの譯は、くさ〳〵あり、又雪しふりつゝなど、いひすて、とぢめて、上へかへらざるは、テと譯して下にふくめたる意の詞をくしふ、いひすてたるつゝは、必下にふくめたる意あれば也そのふくめたる意は、一首の趣にてしらる、

○けりけるけれし、ワイと譯す、「春は來たけりを、春ガキタワイといへるがごとし、またこその結びにも、ワイをそへてうつすことあり、語のきれざるあからにあるけるけれは、とに譯さす

○なりあるなれは、ヂヤと譯す、ヂヤハ、デアルのつゞまりて、ルのしぶかりたる也、故に東の國々にては、ダといへり、なりももとにありのつゞまりたるなれば、俗言のヂヤダと、もと一つ言なり、又一つ「春くれば雁かへるなり、「人まつ虫の聲すなりなど

の類のなりは、あなたなることをこなたより見聞ていふ詞なれば、これはアレ鴈ガカヘルワアレ松虫ノ聲ガスルワなど譯すべし、此ありはヂヤと譯すなりとば別にて、語のつゞけざまもかはれり、ヂヤとうつす方は、つゞく詞よりうけ、此なりも、切るゝ詞よりうくるさだまりあり、

○ぬぬる、つつる、たりたる、きしなど、既に然るうへをいふ辞

も俗言には、皆おしなべてタといふ、なりぬるをば、ナッタ來つ來つるをば、キタ、見たり見たるをば、見タ、ありきありしをばアッタといふが如し、タは、タルのルをはぶける也、

○あれを、ア、ハレと譯せる所多し、たとへば、「われにけりあはれいくよのやどなれやを、何年ニナル家ヂヤゾヤ、ア、ハレキッウ荒タワイと譯せる類なり、かく譯す故も、あはれともと歎息ころにてすなはち今世の人の歎息てアハヨイ月ヂヤア、ッライフ

ヂヤ、又ハレ見事ナ花ヂヤ、ハレヨイ子ヂヤなどいふ、このア、とハレとをつらねていふ辞なればなり、「あはれふてことをあまたにやらじとや云ふは、花を見る人の、ア、ハレ見事ナといふその詞をあまたの櫻へやらじと也、「あはれてふことこそうたて世の中を云ふも、ア、ハレオイトシヤト人ノ云テクレル詞コソ云ふなり、

扨かたこれらにて心得べし、さてそれより轉りては、何事にもれア、ハレと歎息かるゝとの名ともなりて、あはれなりとも、あはれをしるしらぬなども、さまゞゝひろくつかふ、そのたぐひのあはれも、ア、ハレと思てるゝことをさしていへるなれば、俗言にはたゞにア、ハレとはいへず、そは又その思へるすぢにしたがひて別に譯言あるなり、

○すべて何事にまれ、あなたなることにも、アレ、或ハアノヤウニ又ソノヤウニなどいひ、こなたなることには、コレ、或は此ヤウニ

などいふ詞を添て譯せるとおはきは、その事のおもむきをさだかにせんとてなり、

○物によせて、その詞をふしたる、又物の緣の詞のよしなど、すべて詞のうへによれる趣も、雅言と俗言とは、ことごとなれば、たゞにも譯しがたし、さる類は、俗語のうへにてもことわり聞ゆべきさまに、言をくもへて譯せんとす、

○枕詞序などは、歌の意にあづかれるとなきは、すて〳〵譯さずこれを譯しても、事の入まじりて、なか〳〵にまぎらしければなり、そも歌の趣にか〳〵れるすぢあるをば、その趣にしたがひて譯す

○此文の書るやう、譯語のかぎりは、片假字をもちふ、假字づかひをも正さず、便よきにまかせたり、譯のかたもらに、をり〳〵平假字して、ちいさく書るとあるは、その歌の中の詞なるをこゝは此詞にあたれりといふことを、猶たしかにしめせる也、數のもじは、その句としめしたる也、又かたへに長くも短くも筋を引たるは、歌にはなき詞なるを、そへていへる所のしるしなり、そも〳〵さしも多く詞をそへたるゆゑは、すべて歌も、五もじ、七もじ、みそひともじと、かぎりのあれば、今も昔も思ふにはまかせず、いふべき詞の、心にのこれるもおほければ、そをさぐりえて、おきなふべく、又さらにそへて、たすけもすべく、又うひまなびのともがらなどのために、そのおもむきをたしかにもせむとて也、

〔一〕〔二〕〔三〕、あるも〔上〕などしるせるは、枕詞序など、譯をもふけるところをしめせるなり、但しひさかたあしひきなど、人のよく枕詞と知りたるは、此しるしをもふけり、一二三は句のついで、上はかみの句也、

○うつし語のしりにつきて、ひらがなして書るとあるも、譯の及

びがたくてたらはざるを、たすけていへると、又さらでも、いと
まほしきとども、いさゝかづゝいへるなり、
○大かたいにしへの歌を、今の世の俗語にうつすすぢにつきては
猶いはまほしきとども、いと多かれど、さのみはうるさければ、
なずらへてもしりねと、みなもらして、今とたゞこれかれいさゝ
かいへるのみなり、又今さだめたる、すべての譯ともの中にも、
おほよく考へなば、いますこしよくわたれるとども、いでくへかゝ
めれど、いとまいりて、此事にのみも、ゐさしもかゝづらはで、
たゞ一わたり思ひよれるまにまに〳〵物しつる也、歌よく見しれ
ちん人、なほまされるを思ひゐたらむふしもあらば、くはへもは
ぶきもあらためもしてよかし、

本居宣長

○やまとゝは本と大和國の名也代々久しく皇都となしませし皇國ゆゑにやまとゝ云てすべて日本のこととなりぬよりてこゝは日本の歌てふ意なり

○歌は古かならずうたひしもの故に人のみならず鳥けだ物も虫も音たてゝ鳴さへづるゝ皆かれ

頭書

古今和歌集遠鏡之上

やまとうたは人の心をたねとしてよろづのことのはとぞなれりける

○歌ト云物ハ人ノ心ガタネニナツテ。イロ〳〵ノ詞ニナツタモノヂヤワイ

世の中にある人ことわざしげきものなれば心におもふことを見るものきく物につけていひいだせるなり

○世ノ中ニカウシテ居ル人ト云フモノハ。イロ〳〵ト事ノ多イモノヂヤニヨツテ。ソノナニヤカヤノ事ニツケテ。心ニ思フコトヲ。ソノ時見ル物ヤ聞クモノニツケテ。云ヒダシタノヂヤ。

花になくうぐひす水にすむかはづのこゑをきけばいきとしいけるものいづれか歌をよまざりける

○花ノ枝ヘキテ鳴ク鶯ヤ水ニスンデアル蛙ヤナドノ聲ヲキケバ。ソレ〳〵ニ面白イトコロハミナ歌ヂヤ。スレヤ生テアルホドノ物ハ何カ歌ヲヨマヌ

ら心よりうたひ出すなれバ人の歌にかはらぬと云也さるは人としてふべきものぞ

○此事はむかしも今も常あること也雄略天皇の御てゝろたけ〳〵しくませるに歌もて和し奉りしこと日本紀に見えし類ひ也たれらは歌の德をいへるなり

○おもふに此注は凡天慶の末間諸花山の御頃なるに古のこと善も意得ぬ人のしわざなりよりて注ごとに雜あり こゝも女神男神となり給へると云夫婦の契始たまへるこゝはしらるれども右のごとくにいひてはしめて女神男神と成たまへると云に聞なされて文のつたなきなり女體男體もとよりわかちませるをや

○えびす歌と は日本紀に此歌を夷曲と書ひなぶりと訓むそれしらぬ人の夷はえびすともよむもて思ひあやまるなり

ゾ。鳥類畜類マデ皆メン〳〵ニソレ〳〵ノ歌ヲヨムゲヤワイノ。

ちからをもいれずしてあめつちをうごかしめに見えぬおに神をあれと思せ男女のなかをもやはらげたけきものゝふのこゝろをもあぐさむるは歌なり

○チカラモ入レズニ天地ヲウゴカシタリ。目ニ見エヌ鬼ヤ神ヲ感ジサシタリ。男ト女トノアヒダヲ。ムツマシウナルヤウニシタリ。アラクマシイ武士ノ心ヲヤハラゲタリナドスルモノハ哥ゲヤ。

この歌あめつちのひらけしじまりける時よりいできにけり

○サテ此哥ト云モノハ。天地ノハジマツタ時カラデケタワイ。

あまのうきはしのしたにてめ神を神となり給へることをいへる歌なり

○ソレハ男ノ伊弉諾伊弉冊ノ尊カ天浮橋ノ下デ。御夫婦ノ神ニオナリナサレタフヂオヨミナサレタ哥ノフヂヤ。

しかあれども世につたはることゝしひさかたのあめにしてはしたてるひめにはじまり

○サウヂヤケレ共。シッカリト哥ト云テ世ノ中ニツタハツテキタノハ天デハ下照姫ト云フ神カラハジマリ。

したてるひめとはあめわかみこのめなり也うとの神のかたちをか谷にうつりてかゞやくをよめるひびすうたなるべしこれらいもしのかまもさだまらず歌のやうにもわらぬとなり

○下照姫ト云神ハ天若彦ト云タ神ノ御内シヤウデアツタ。ソノ歌ト云ハ下照姫ノ兄ゴガ。殊ノ外ウツクシイ神デ。ソノ身ノ光リガ。ソコラノ岡ヤ谷ヘウツリテ照リカゞイタフチョンダエビス歌ト云ガアルガ。其事デアラツ。コレラハ文字ノ數ナドモ定マツタフモナウテ。歌ノヤウデモナイコトヽモヂヤ。

あらかねのつちにてしすさのをの尊よりぞおこりける

○此ノ國土デハ素盞嗚尊カラサハジマツタワイ。

まれるなり

○五七五の定めもなく心のゆくまゝにつらねたるを事がたの心辨まへがたしとやてはいふかしき書ざまなりいにしへまなぶ人は大かたにわきらむるをいかでわきがたきとはいふ

濁

ちはやぶる神代には歌のもじもさだまらずすなほにしてことのこゝろわきがたかりけらし

○ちはやぶる神代ノ時分ニハ歌ノ文字ノ數モマダ定マツタ一モナシ。コトノホカ古風ナ一デ。ドウ云ヲチヨンダモノヤラノ歌ノ心ガ今見テハワカリニクイ一デアツタサワナ。

人の代となりてすさのをのみことよりぞみそもじあまりひともじはよみける

○サテ人ノ代ニナツテカラ。カノ素盞嗚尊カラ始マツタ歌ノトホリニ。卅一字ニサヨム一ニハナツタワイ。

すさのをのみことはあまてるおほん神のこのかみなり女とすみ給はむとていづもの國に宮づくりし給ふ時にそのことろにやいろの雲のたつを見てよみ給へるなり

○スサノヲノ尊ハ天照大神ノ御兄ゴ様ヂヤ。シテソノ御歌ト云ハ。女トイフ一所ニ御住ナサレワドテ。出雲國ヘ御殿ヲオタテナサル。時ニソノアタ

けるは文の一體なりうたもこの體を隔句とて專らよむなり

○八色の雲と云は八の字假りてかけるよりて思ひわやまりて云ものゝやくもは雲のいやつ立つをいふ也八重がきもいやへ瀰重めぐらす垣なりさで稻田ひめをこめまゐらするとて作りませる宮なり

○めではほめいだすと云詞

八雲たついづも八重垣つまこめに八重垣つくるその八重がきを

○アレイクヘモ雲ガタツタ。アノ出ル雲ノ八重垣ワイノ。吾妻ヲ入レル宮ノタメニ。アレ雲ガ八重垣ヲ作ツタ。アノ八重垣ワイノ。いづもは。いでくもなり。でくつゝまりて。づとなる。こゝは國の名にはあらず。

かくてぞ花をめで鳥をうらやみ霞をあれひ露をかなしふこゝろとばおほくさまゝになりにける

○サウシテサ。花ヲ賞翫シタリ。鳥ヲウラヤンダリ。霞ヲ感ジタリ。露ヲ愛シタリスルヤウナ心詞ガオホウサマザマニナツタモノヂヤワイ。

とはさとところもいでたつあしもとよりはじまりて年月をわたり高き山もふもとのちりひぢよりなりてあま雲たなびきておひのぼれるごとくにこの歌もかくのごとくなる

也わかれびはわとなげくに言をそへて稱るにも愁ふるにもいへるかなしびは身にしむことに云

○千里の道も一歩に出で山も微塵よりなると云漢文によりてかゝれたりよろづのことその始は少なるが後には高くも廣くもなり行なり

○みかどとはいにしへ朝の字にあてゝ何天皇の朝をなにのすめらみことのみかどといへり

○この注もわやまれりすでに御父天皇宇治のみこを皇太子に立おかせ玉へは東宮を互いに譲給ふとは云ましきことなり天皇の御位をそゆづりあひたまへれまたわに王仁がいぶかべし

○キツウ遠イ所デモ。タツタ一足フミダス。足モトカラ始マツテ。イク月モ何年モカヽルホドノ所マデモユキ。又キツウ高イ山デモフモトノチリホコリホドノ土カラ段々ツモツテ。雲ノタナビクホド高ウナルヤウナ物デ。此歌モソノトホリナ物デアラウ。

難波津のうたとみかどのおほんはじめなり

○サテ難波津ノ歌ハ天子ノ御事チヨンダ歌ノハジメデヤ。

大さゝきのみかどのなにはづにてみこと聞えける時東宮をたがひに
ゆづりてくらゐにつき給はで三年になりにければ王仁といふ人の い
ぶかり思ひてよみてたてまつりける歌なりこの花は梅の花をいふな
るべし

しめることと國史に見えず此歌はすでに御位につかせ給ひて後にいはゝ意なりこの花を梅なりとのよいふも後の説なりは木のいにしへは諸木の花をいへり

○難波津ノ歌ト云ハ。仁德天皇ノ難波津ニ御座ナサレテ。皇子ト申シタ時ニ東宮宇治ノ若郎子ト御タガヒニユヅリアフテ。御位ニ御ツキナサレイデ三年ニナツタニヨツテ。王仁ト云タ人ガマチカヲテンキニ思フテ仁德天皇ヘヨンデ上タ哥ヂヤ。其歌ニコノ花トヨンダハ。梅ノ花ヲ云タデアラフ。

わがをしへ子。須賀直見がいひけるは。東宮をは東宮とを。寫しあやまれるなり。○とを。とを似たり。

あさか山のとのはゝうねへのたとふれよりよみて

○アサカ山ノ歌ハ奥州采女ノタハムレカラヨンタ歌デ

かづらきのおはきみをみちのおくへつかはしたりける時に國のつかさとおろそかなりとてまうけなどしたりけれとすさましがりければうねへなりける女のかはらけとりてよめるなりこれにぞおはきみの心とけにける

○コレハ葛城王ト云フ。御用デ奥州ヘツカハサレタ時ニ國ノ守ナドガ御馳

にしへはたゞいなおさふる
意なり葛城王は班田使を作らせ給ひて二歌で世にめ功あるに故なしらふ書はしめつて書なまづかつらのはへ詩へ六義をいへよそもの
田使とて任のくのだんなるがそのとしなりの手習ノ始メニモマヅ是ヲナラウロトヂヤワイ。
わかむしらにひけとんたるはいぬ筆
漢六げたこと

走申シタケレ共。アシラヒガ鹿末トナリテ葛城王ガ。キツウフケウニ思ハレタ時ニ。其國ノ采女デアッタ女ガ。盃ヲ持テ出デヨンダ歌ヂヤ。トコロガ此歌デ葛城王ノキゲンガナホッタワイ。

此ふた歌は歌の父母のやうにてゞ手ならふ人のもじめにもしける

○此ナニハヅトアサカ山ト二首ノ歌ハ歌ノテヽ親ハヽ親ノヤウデサ。子供ノ手習ノ始メニモマヅ是ヲナラウロトヂヤワイ。

そもそも歌のさまむつなりからのうたにもかくぞあるべき

○サテマヅ歌ニ六ツノワケガアルヂヤ。唐ノ詩ニモ大カタ此六ツノワケガサアルデアラウ。

そのむくさのひとつにはそへうたおほさゝきのみかどをそへ奉れる歌

○ソノ六イロト云ヒ一ツニハソヘ歌。カノ仁德天皇ヲオヨソヘ申シタ歌。

義と意義異なるゞ
○おはさゝきのみかどといふてのの歌まで人の注なるべ一これ又雖ゞ
人その注なるべ一
本文に書まぎれを後に書はわろしもの字大字
よらはせしもの字
に書はわろし
○字萬伎みなの歌はゞ
にはのかみ只今
そのかみ只今
波來たるから
人のはやくて
の詞を借てかく
くまでうるい
しびたる歌を
よみ出んとき
なのいぶかしき
いはゞ日本紀
宴の歌にて
大きゝの天
皇の御うへを

なにはづに咲やこの花冬ごもり今をさかりとさくやこのはな

○難波津ニサクコノ花ガ(三)サアモウハ春サキヂヤト云テサクコノ花ガ。

といへるなるべし

○ト云ヤウナガサウデアラウ。

ふたつにてかぞへうたに咲花に思ひつく身のあぢきなさ身にいたつきのいるもしらずて

○咲テアル花ニ。ウツカリト思ヒ入テ居ル者ノサテモイラザルワイノ。身ニ心勞ナコトノ。デケテクルモシラズニサ。

といへるなるべし

これはたゞにいひて物にたとへなどもせぬものなり此の歌いかにいへるにかあらむそのでゝろえがたくいつつにたゞと歌といへるなりこれにはかなふべき一

題にさぐり得たる人のよみけるにやあらん

○霜になすらへておきてといふなり

○物にもなすらへてと云は詩の比の體を云にてこゝに

○此カゾヘ歌ト云ハ。ソノ事ヲタヤコトニ云テ。物ニタトヘナドモセヌモノヂヤ。ソレニ此ノ咲花ニト云歌ヲカゾヘ歌ニ出シタハドウ云心ヂヤヤラ。カテンガイカヌ。五番メノタヤコトウタト云所ヘ出シタ歌ガサ。此ノカゾヘ歌ニ叶フデアラウ。

みつにはなすらへうた

君にけさあしたの霜のれきていなば戀しさごとにさわや

わたらむ

○オマヘガ。別レテ(二)起テイナシヤツタナラ。ヨシハ今カラ。戀シウ思フタビゴトニ。消ルヤウニ思フテタテルデガナアラウ。君には。一本君がとあるよろし。

といへるなるべし

これは物にもなすらへてそれがやうになむあるとやうにいふなりて

の歌よくかなへりとも見えず

○此ナスラヘ歌ト云ハ。物ニナゾラヘテ。ソノ物ノヤウナド云ヤウニヨン

なすらへ歌とあるには右の歌かなふべしなすらへ歌と云を物にも准らへてと云ふはひがごとなり

○たちちめといふは後のあやまりなり萬葉集垂乳根之母我養蚕とかけり萬葉によるに譬喩歌の下に入へくて○にはは叶はず○ありそ海い荒磯海をつゞめていふよむは疑ふるなり○繼ぎもふてとのかずもし

ダチ云ヂヤカ。此君ニケサト云歌ハ。ヨウ叶ウタトモ見エヌ。

たらちめのおやのかふこのまゆごもりいぶせくも

あるか妹にあはずて

○養蚕ノマユニコモツテアルヤウニ(一)親ノヒザモトニ居テ外ヘ出ヌ娘ナレバ。ドウモエアハイデ。サテモ〳〵モシンキナコカナ。

かやうなるやこれにはかなふべからむ

○此ヤウナ歌ガ。此ナスラヘ歌ト云ニハ叶ウデアラウカ。

よつにしたとへうた

わが戀しよむともつきじありそ海の濱のまさごはよみつ

くすとも

○タトヒ海ノ濱ノ砂ノ數ハヨミツクスト云テモ。オノレガ戀ノシケイ數ハヨミツクサレマイ。

これはよろづの草木鳥けだものにつけて心を見するなり此の歌いかくれたるところなむなきされどはじめのそへ歌とおなじやうなれ

られずさまざまに思ひみだるゝをいはんとて濱のまさごにたとへていへり

○かくれたるなきは詩の理の體もていふにてあるかし須摩の蜑の歌はよくかなへり

ばすてしさまをかへたるなるべし

○此タトヘ歌ト云ハ。イロ〳〵ノ草木ヤ鳥ケダモノナドニヨセテ思フ心ヲ見セタモノヂヤ。ソレニ此ワガ戀ハト云歌ハ。カクレタ所ガナイ。タトヘ歌ハ物ニタトヘテ云テ。アラハニハ云ハヌヂヤニヨツテ。カクレタ所ガナウテハスマヌ。ヂヤケレド始メノソヘ歌ト同ジヤウナ一ナレバ。スコシモヤウノカハツタ歌ヲ出シタモノデアラウ。

すまのわのま塩やく煙風をいたみ思はぬかたにたなびきけり

○スマノ浦ノ海士ガ塩ヲヤク烟ガ風ノハゲシサニ。思ヒモヲラヌ方ヘナビイテイタワイ。

この歌などやかなふべからむ

○此ノ歌ナトガ。タトヘ歌ニハ叶ウデモアラウカ。

いつゝにはたゝとうたいつとりのあきよなりせばいかばかり人の言のはうれし

○この歌ハ少シかざりなく直にいひつゞけしなり

○この注も詩の雅の體を云ふにてゝの言語にかなはず正の字をたゞしはそめともよめともあらず直の字をたゞとよむなどの義なり

○山ざくらの歌はかくれたるをもなけれども詞はたゞことにあらでかさりしところあればかなはず

清からまし

○偶リト云フ一ガナイ世ノ中デアラウナラ。ドレホド人ノ云フテクレル詞ガウレシカラウゾ。

といへるあるべし

これはこのとゝのはりたゞしきをいふなり

この哥のこゝろさらにかなはずとめうたとやいふべからむ

○此ノタヾコト歌ト云ハ。コトノトヽノウテ。タヾシイノヲ云ヂヤ。コノイツハリノト云フ歌ノ心ハ子カラ叶ハヌ。此ノ歌ハトメ歌ト云フ物デアラウカ。

山櫻あくまで色を見つるかな花ちるべくも風ふかぬまに

○山櫻ヲ腹一ハイ十分ニ見タサテモアリガタイ一カナ。花ノチルクラ井ノアライ風モフカヌ。ケツカウナ御代デサ此ノ歌ナドガ。タヾコト歌ト云ニハ叶ウデアラウカ。

○いはひはいひを延て云詞なり神につかふるに物ごとをいみつゝしみてする時は非常を忌をもて神をいはひふなども云也それよりうつして祝ひの事にもいはふといへり

○さき艸とはさゆり花ならんこの百合は莖わかく末に三ツ枝にわかれて花咲葉と葉と相むかひたるに似たれどなりされどその始はから國の福草よりしていはひ物にする故によみしと云べけれど此の歌も定めてさきくさの三ツといはん冠りにおきたるなるべし

○世をはめて神に告るといふは漢の頌の義にてこゝの詞にかなはずてゝには世をはめて神につくるといひでもいはふとのみにも足れるなり

むつにいはひうた

此とのゝうべもとみけりさきくさのみつばよつばに殿づ清

くりせり

○此ノ御屋形ハゲニモ御繁昌ナ事ヂャワイ。御殿〳〵ノツマ〴〵ガ段々ト(三)三ツモ四ツモツヾイテサテ〳〵ケツカウナ御普請ヂヤ。

といへるなるべし

これは世をはめて神につぐるなり此の哥いはひうたとは見にずなむある

○此ノイハヒ哥ト云ハ。御代チホメテ。其ノ事ヲ神ヘ申スノヂヤ。ソレニ此コノ殿ハト云哥ハドウモ。イハヒ哥トハサ見エヌテイヂヤ。

十四

○春日野の歌はいはひ歌なれど注にいふ意はこもらず凡そ六くさにわかれんことはわるまじと云はよろし

○今の世の中とは今の京となりて延喜のころまでを云○これは歌の德をしひてかざれるものなり御國のいにしへ人ハこゝろにうらうへおかずよつの心のまことて

春日野にわかなつみつゝ萬代をいはふ心と神ぞしるらん

これやすこしかなふべからむおはよそひくさにわかれむとはえわるまじきことになむ

○コレラナドノ哥ガ。イハヒ哥ト云ニハ。スコシ叶ウデモアラウカ。マアタイテイ。歌ノシナイ。六イロニ分レウ丁ハドウモサウハワケラレヌドデサゴザル。

今のよのなかいろにつき人の心花になりにけるよりあだなる歌はかなきことのみいでくれば

○サテ今ノ世ノ中ハ人ノ心ガ花〳〵シイ丁ニツイテ。ウハキニナツタカラシテ。アダナキツトゼヌ歌バツカリデケルニヨツテ。

いろこのみの家にうもれ木の人しれぬとゝなりてまめなるところにゝ花すゝきはにいだすべきこともあらずなりにたり

みを打ひづれは戯の歌多きなりこゝもかゝらんのこゝろもてかけり

○むかしは御身近くつかふまつる人々に歌をよませて御わそびありしなり

○御國のいにしへの朝に歌をもて人の賢愚をこゝろみ給ひ及第の例國史に見えたるとなし下に僧正遍昭の歌はまことすくなしといひ業平は情わまり

○大切ナ歌ガ。色事シノ家ノロヘハ花すゝきアラハシテダサレヌヤウニナツテシマウタ。

そのはじめをおもへばかゝるべくなむあらぬ

○ホンタイノトコロヲ思フテ見レバカウアラウコトデハサナイ

古のよゝのみかどの春の花のあした秋の月の夜ごとにさふらふ人々をめしてとにつけつゝ歌をたてまつらしめ給ふ

○昔ハ御代々ノ天子樣ガ。春ノ花ノ時分ヤ。秋ノ月夜ナド云ヒニハ。イツデモ。ツメテ居サッシヤル衆ヲ御前ヘメシテ。ナンゾレカゾレノ事ニツケテハ。歌ヲ上ルヤウニ御付ラレタ

あるは花をこふとてたよりなきところにまどひあるは月を思ふとてしるべなきやみにたどれる心を見給ひてさかしおろかなりとしろしめしけむ

○サウシテ。或ハ花ヲ見タウ思テ。ヨリツキモナイ所ナドマデ。尋子マハツテアルイタリ。或ハ月ニ執心シテ見ニ行テハ。マダ出ヌサキヤ入テシマツタアトナド闇イノニ。案内モシラヌ所ヲアチラヘコチラヘトシテアルイタリ。スルヤウナ風流ナ心々ヲ。ソノヨンダ歌デ考テ御覽ナサレテソノ歌ニヨツテ。アレハカシコイモノヂヤ。アレハオロカナ者ヂヤト云フヲ。御存知ナサレタモヤウヂヤ昔ハサ

花をこふといふより。やみにたどれるといふまでもすべて。風流たる人々のさまをいへるなり。しかるに諸說。これを愚なる方にとれるは。ひがごとなり。さかしおろかなるをしろしめすはさてよめる歌のさまをもてこそ考へ給へるなれ。もしこれらおろかなるかたのしわざとせば。今ひとつかしてき方をもいはでは。ことゝのはず。たゞ愚なる方のみをいひてやむべきにはあらざるをや。

前にも云御國に詩歌もて科場を立られしこと是よりいにしへたしかなる書籍となり

しかあるのみにあらずさゞれ石にたとへつくば山にかけて君をねがひ

苔のむすまで
○つくばねの
このもかのもに
かげはあれど
君がみかげも
にまさりけり
○かくしつゝ
世をやつくさん
高砂のをの
へにたてるまつ
ならずとも
○墨の江の
しの姫松人なら
ばいく代かへ
しもとはまし
○われをとて
久しくなりぬる
住よしハきし
ひよ松いく
代へぬらん
○今もむかしは
男山さかゆく
時もありてし

○サテ又サウバカリデナシニ。サヤレ石ニタトヘタリ。筑波山ニツケタリシテ君ヲ御祈リ申シ。

よろこび身にすぎたのしみこゝろにあまり

○又ハ身ニ過タヨロコビノアル片ヤ。心ニアマルホドオモシロイコトノアル片ヤナド。

ふじのけぶりによそへて人をこひ松虫の音に友をしのび

○アルヒハ又富士ノケムリニヨソヘテ。人ヲ戀シウ思フ事ヲ云タリ。松虫ノ聲ヲキイテ友ダチヲナツカシウ思タリ。

高砂住の江の松もわひおひのやうにて

○キツウ年ガヨツテハ。高砂ヤ住ノ江ノアノ久シイ相追ノヤウニ思ハレタリ。スル片ニモヨミ。

わひおひは。今の俗語にもいふことにて。相追なり。そはもとたがひに追み追れみする意より出たる言にて。いくどくの前後もなく。大かた同じほどになるとにいへり。

十八

○秋の野になまめきたてるをみなへしがましなかしがましと花もひとゝきものを

○殘りなくちるぞめでたきさくら花あるよの中はてのうければ

○秋風にあへすちりぬるもみぢばの行へさだめぬわれぞかなしき

○あら玉の年の終りになるにのとに雪もわが身もふりまさりつゝ

○行年のをしへもわるる哉まするかゞみ見る

をとこ山のむかしを思ひいでをみなへしの一ときをくねるにも歌をいひてぞなぐさめける

○又年ヨツテハ。男ハチトコザカリデアツタ昔シノ事ヲ思ヒダシ。女ハワカザカリノ早ウスギタコトヲ愚痴ニクヨ〳〵ト思ウヤウナ時モミナ歌チヨンデサ心ヲハラシタ」ヂヤワイ。

又春のわしたに花のちるをみ秋の夕くれにこの葉の落るをきゝ

○又春ノコロ朝花ノチルノヲ見タリ。秋ノユフガタ木ノ葉ノオチル音ヲキイタリ。

あるはとしごとにかゞみの影に見ゆる雪と涙とをなけき

○或ハ鏡ノ影ニ見エルワガ白髮ヤ面ノシワノ毎年多ソナルノヲ見テ歎イタリ。

草の露水のあわを見てわが身をおどろき

○草ノツユヤ水ノ沫ノキエルヲ見テ。我身モアノトホリデヤト云フヲ知テ

かげさへにくれぬとおもへば

○長歌に難波のうらに立なみのしはにやおぼれなん

○露をなどあだなるものと思ひけんわが身も草におかぬばかりぞ

○水の泡のきねてうき身といひながらながれてもなほたのまるゝ哉

○いにしへの賤のをだ巻いやしきれよきもさかりはあり

○わくらはにとふ人あらば

驚イタリ。

あるひはきのふはさかゆおごりて時をうしなひよにわびしたしかりしもうとくなり

○アルヒハ昨日マデハ繁昌シテ。何ノ思ヒゴトモナカツタ者ガ。ニハカニ不仕合セニナツテナンギチシタリ。又モトシタシカツタ中ガ。ソエンニナツタリシタトキ。

あるは松山の涙をかけ野中の水をくみ秋萩の下葉をながめわかつきのしぎのはねがきをかぞへ

○或ハ末ノ松山ノ波ヤ野中ノ清水チタトヘニシタリ。萩ノ下葉チナガメタリ。暁ノ鴫ノ羽根ガキスル數チカゾヘタリ。

あるはくれ竹のうきふしを人にいひよしの川をひきて世の中をうらみきつるに

○或ハ竹の身ノウイ事チ人ニハナシ。吉野川チタトヘニ引チ世ノ中チ恨ンダリ。

須磨のうらにもしほたれつゝわぶとこたへよ

○君をおきてあだし心をわれもたゞ末の松山なみもこえなん

○いにしへの野中の清水ぬるけれどもの心をしる人ぞくむ

○秋萩の下葉色つく今よりやひとりある人のいねかてにする

○暁の鴫の羽かきもゝはがき君がこぬよはわれぞ數かく

○よにふればことのはしげきくれ竹のうきふしごとにうぐひすぞ啼

○ながれてはいもせの山の中におつるよしのゝ川のよしやよの中

○上に富士のけふりによそへて人を戀といひてゝにはその烟も立ずなりにたるといへりこれは延暦十九年にての山大にやげそのゝ役も貞觀のころ又大にやけしがその後はけふりの絶たるなり

○いにしへ今の歌よむ人をいへり

いにしへよりかくつたへるうちにもならの御時よりぞひきつるといへる詞次の文とあひかなはず。いかゞ。

今はふじの山もけふりたゝずなりながらの橋も造るなり

ときく人と歌にのみぞ心をなぐさめける、

○又今デハモウ富士山モ烟ノタヽヌヤウニナリ。長柄ノ橋モ又アタラシウ出來タト聞ク人ナドハ。別シテ歌ヨムバカリデ心チハラシタツモリデヤワイ。

つくるを。盡るなりと見たる說は。ひがゝなり。もし盡なれば。つきぬなりとこそいへ。つくるなりとはいはず。これ雅言の必ず定れる格也。

○ならの御時よりといふよりみつのくらゐといふまでは後人の書そへたるものとみゆ

○この章も後に書そへたるものぞまづ右に云ごとへ奈良の宮にいたり歌に君臣合體と云べきを君をしまさずまして人丸の時代もたがへ云にたらぬれば云にたらぬとなり

ろまりにけるかのれはんよや歌の心をしろしめしけむ

○ズット昔カラ右ノ通リ。傳ハッテキタウチニモ奈良ノ御時カラサ別シテヒロマソタワイ。其ノ御時代ニハ定ノテ歌ノワケチ。ヨウ御存知デアッタモノデガナアラウ。

かのおほん時におほきみつのくらゐかきのもとの人まろなん歌のひじりなりける

○其御世ニ正三位柿ノ本ノ人麿ハ歌ノ聖人デサアッタワイ。

これは君も人も身をあむせたりといふなるべし

○コレハマコトニ君臣合体ト云モノデアラウ。

秋のゆふべ立田川にながるゝ紅葉をばみがをの御目に錦と見給ひ春のあした吉野山の櫻は人まろが心にも雲かとのみなんおぼえける

○秋ノタグレニ立田川ニ流レル紅葉チバソノ奈良ノ帝ノ御目ニハ錦ノヤウニ御覧ナサレ。春ノ朝吉野山ノ櫻チバ。人麿ノ心ニハ雲カトバカリ思ハレタワイ。

○ある人これは世説新語補とい書に陳元方季方といふ人わ元方が子の長文季方が子の孝先とおの〳〵其父の太丘に太ばかたへ丘がとひしたば兄元方はなに弟季方がたくなをしたとしかたをもてのぞとのいきしもりの奈良の帝のいへるに右ハ御歌ハ梅の花とくなるとり又梅の花は

レタワイ。

又山のべのわか人といふ人ありけり歌にあやしくたへなりけり

○又山ノベノ赤人ト云人ガアッタワイ。コレモ歌ニ妙チ名人デアッタワイ。

人まろとあか人がかみにたゝむとかたくあか人と人まろがしもにたゝむとかたくなむありける

○人マロハ赤人ノ上ニタッコハナリニクカラウシ。赤人ハ人マロノ下ヘオキニクイクラ非ナコトデサアッタワイ。

ならのみかどの御うた

立田川もみちみだれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ

人まろ

梅の花それとも見えずひさかたのあまぎる雪のなべてふれゝば

ほの〳〵とあかしの浦の朝ぎりに島かくれゆく船をしぞ思ふ

赤人

春の野にすみれつみにとこし我ぞ野をなつかしみ一よねにける

○春ノ野ヘスミレチツマウト思ウテ。カレハ來タガ。アマリノドカデ面白サニ。此ノ野デサ一夜寢タワイ。

わかの浦にしほみちくればかたをなみあしべをさしてたづ鳴わたる

○若ノ浦ヘシホガミチテクレバ。干潟ガ無サニ。蘆原ノ方ヲ指テ鶴ガ鳴テワタルアレ。

この人々をおきて。又すぐれたる人もくれ竹のよゝにきこえかたいとのよりゝにたえずぞありける

○このくだりは注なり是こゝに云べきにあらず文のつゞかぬもて後のしわざなるをしらる

○年八百余歳世は十代になれるとは平城天皇より延喜の御時までをかぞふるなり

○此ノ二人ノ外ニモ又スグレタ人ハツタワイ。

これよりさきの歌をあつめてなん萬葉しうとなづけられたりける

○サテ此ノ奈良ノ御時代マデノ歌トモヲ集メテ萬葉トサ題號ヲツケラレタワイ。

こゝにいにしへのことをも歌のこゝろをしれる人わづかにひとりふたりなりきしかあれどこれかれえたるところえぬところたがひになんある

かの御時よりこのかた年ともゝとせあまり世はとつぎになむなりにける

○其ノ御時代カラコチヘ年ハ百年アマリ。御代ハ十代ニサナルワイ。

こゝにいにしへの事をも歌のこゝろをもしれる人よむ人

おはからずわづかにひとりふたりなりきしかどあれどこれかれえたるところえぬところたがひになむある

○其ノ間ニ昔ノ一モ歌ノワケモ。ヨウ知ツタ人ヨンダ人ハ。タクサンニハナイ。ワヅカ二人カ二人ト云ホドノ一デアツタ。ヂヤガンレモタガヒニ得タトコロト得ヌトコロガサアツテ。カノ人麿ヤ赤人ホドニ十分難ノナイ名人トハイハレヌ。

○かれこれ得ぬと得るとをいはんも官位高き人々を申し出んとはヤかりあれバのぞきていばぬなり

今此の事をいふにつかさくらゐ高き人をばたやすきやうなればいれず

○サテ今其ノ人々ノ事デ云ウヂヤガ。其ノ内ニ官位ノ高イ人ノ事ハ云ノハ感外ナヤウナ物ヂヤニヨツテ。ソレヤノケオイテ。

そのはかにちかきよにその名きこえたる人は

○ソノ官位ノ高イ衆デハナシニ。其ノ外ニ近イ代ニ歌ノ名ノ聞エタ衆ハ。

○歌のさまを得たるとは體のよろしきと

すなはち僧正遍昭ゑ歌のさまえたれどもまことすくなしたとへばゑにかけるをうなを見ていたづらに心をこがす

云なりまことすくなしとは此僧正は口がろくをかしきさまによまれたれば深くしづまりたる歌なきを云なり

○こゝに注せる歌どもは下にしらみ出たれバそのに所にいふべし下みなれにならふぞ

がごとし

○マヅ僧正遍昭ハ歌ノテイハ。得デアツタケレドモ。マコトガスクナイ物ニタトヘテイハウナラ。絵ニカイテアルオヤマヲ見テ。センノナイ一ニ心チウゴカスヤウナモノヂヤ。

○いたりて心深くよまれたれば詞はかすかにめぐらせたかて聞ゐさせたる詞のたらぬとり云にあらず

浅みどり糸よりかけて白露を玉にもぬけるしらるのやなきか

はちす葉のにごりにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく

嵯峨野にて馬よりおちてよめる

名にめでゝおれるバかりぞ女郎花われおちにきと人にかたるな

ありはらのなりひらはそのこゝろあまりてことばたらずしぼめる花の色なくてにはひのこれるがごとし

○在原ノ業平ノ歌ハコトロガアツテ。詞タラズ。テウドシボンダ花ノ色ハナ

且つしばめる花にたとへたるはいかにぞや業平の歌は幽にして心にはなやきたることかぎりなきをや

○ことばの巧なりといふは下の歌ともに見ねて貫にしかりそのさま身におはずの巧のうるはしきに歌の風體はいやしといへり

ウナッテ。ニホヒノ殘ッテアルヤウナ。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわがみひとつはもとの身にして

大かたは月をもめでしこれぞこのつもれば人のわいとなるもの

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやとかなにもなりまさる哉

清ふんやのやすひではとばたくみにてそのさまみにおはず

いとゞあき人のよきゝぬきたらんがごとし

○文室康秀ハ詞ハタクミデ。歌ノ體ガソノ詞ト相應ゼヌ。イハヾアキンドノエイキル物ヲ着タヤウナモノヂヤ。

吹からに野への草木のしをるればうべ山風をあらしといふらむ

○詞のかすかなるとは後に幽玄體とてはなやかならずをくらき言なり

○始終たしかならずとはそのてゝろを始終たしかに云にてぬなうてれも詞幽にてはなるなりたしかならぬは得ぬ所を云たとへの意あきらかなり

○宮撰の歌多く見ゆずよりてかく書るものと思へと此

深草のみかどの御國忌に

草ふかき霞の谷にかげかくしてる日のくれしけふにやあらぬ

宇治山の僧きせんはとばかすかにしてはじめをはりたしかあらずいはゞ秋の月を見るに曉の雲よあへるがごとし

○宇治山ノ僧宮撰ハ。詞カオクフカウテ。ンシテ。始メトハテトノツリアヒガシツカリトセヌ。イハヾ秋ノ月ヲ見ルノニ曉ノ雲ノデヽキタヤウナモノヂヤ。

わが庵はみやこのたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり

よめるうたはく聞えねゞかれこれをかよはしてよくしらず

○此ノ人ハヨンダ歌ガ多ウハ傳ハラヌニヨッテ。アレヤコレヤヲ見合スコトガナラヲヂヤ。トヾトハシレヌ。

六人の詞ども各對の詞もてかきたるをこれらのことありてハ文のつゞきみだれてきこゆ是をも注とし除きみれどよくつゞきてゆきめでたし

○あはれなるやうにてとはむる詞つよからぬはすてし得ぬところを云ふ歌はもとよりつよきをよしとすればかく云あはれの詞てゝはうるはしきに用ひたり

○このをのゝてまちの評にしへの衣通姫の流なりといへるも後のしわざなり

をの〳〵てまちもいにしへのそとほりひめの流なりわはれなるやうにてつよからずいとゞよき女のなやめるところあるに似たりつよからぬはおうなの歌なれバなるべし

○小野小町ハ昔シノ衣通姫ノ流ナ歌ヂヤ。アハレナヤウデ。ツヨウナイ。イハヾエイ女ノヤム所ノアルニ似タ物ヂヤ。ツヨウナイノハ女ノ歌ニエデアラウ。

思ひつゝぬればや人の見えつらん夢としりせばさめざらましを

色見ゑでうつろふ物とよの中の人の心の花にぞありける

わびぬれは身をうき草の根を絶てさそふ水あらばいなむとぞ思ふ

○其さまいやしの上に何とかはめたる詞の落たるなるんとある人いへりしからざれば此の六人おの〳〵得ると得ぬとを云にかなはずすべて文は對にかくとゝろはかの對のかたちなくてはあらぬものなり

そとほり姫の歌

わがせこがくべきよひなりさゝがにのくものふるまひかねてしるしも

大とものくろぬしは（コトバオチタリ）そのさまいやしいとゝたき木おへる山人の花のかげにやすめるがごとし

○大友黒主ハオモシロイ所ガアツテ。歌ノ體ガイヤシイ。イハヾ薪ヲ負テ井ルヤマガオヤヂカ。花ノ木ノ下デ休ンデ居ルヤウナテイヂヤ。

（千秋云譯に。オモシロイトコロガアツテ。とあるは。眞字序に頗有二逸興一とあるによりて。補はれたるなるべし。此序には。これにあたる詞の有しが。落たるなり）

思ひいで〳〵戀しき時はむつかりの鳴てわたると人のしらずや

鏡山いざ立よりて見てゆかんとしへぬる身はおいやしぬると

○今は歌よむ人のおはきをはひひろでられる葛としげきの木葉にたとへたりされど歌なりとのみおもはしてそのよしあるまでしをの評するくまなしといへりすべてのことはかたにてはよかしあしをきはらがたくいたれる上にていたれる人のきはめたるべきもの

○うつくしみはやしにより

○なみのとい御國をふせて云八州と大代紀にこと

このほかの人々その名きこゆる野べにおふるかづらのはひひろごりはやしにしげきこの葉のごとくにおはかれど歌とのみおもひてそのさましらぬなるべし

○此ノ外ニモ名ノアル人々ハ野ニハヒヒロガツテ。葛ヤ林ニシゲウハエテアル木ノ葉ヤナドノゴトクニ。タントアルケレドモ。ミナ自分ニ歌ヂヤト思ウテ居ルバカリデ。實ニ歌ト云モノヽ。クハシイヤウスヲバ知ラヌモノヂヤト見エル。

かゝるにいますべらきのあめのしたしろしめすとよつのときこゝのかへりになむなりぬる

○サテ右ノ通リデアツタトコロニ。御當代上樣ノ天下ヲ治メサセラルヽノモ今年デ九年ニサナルカ。

あまねきおほんうつくしみの涙やしまのほかまでながれ

ひろきおほんめぐみのかげつくは山のふもとよりもしげくおはしまして

○ドコカラドコマデモモレタ所ノナイ御慈悲ガ。日本ノ外マデイキワタツテ。イヅクノウラマデモ。ミナソノ御蔭ヲカウムラヌ者ハナイ。雖有イ特能デ。

よろづのまつりごとをきこしめすいとまもろ〳〵の事をすてたまへぬあまりに

○イロ〳〵ノ御政事ヲトリ行ハセラル、御ヒマ〳〵ニ其ノ外ノ一切ノ事マデヲ。御ステアソバサレヌアマリニ。

いにしへのことをもわすれじふりにしことをもおこし給ふとて今も見そなはし後の世にもつたはれとて

○古ヘアツタ事ヲモ御忘レアソバサルマイ。年久シウナツタコトヲモ御取立アソバサウト云フ思召シデ。今モ御覽アソバサレ。又後々ヘモ傳ハレト思召テ。

延喜五年四月十八日に大内記きのとものり御書のところのあづかりきのつらゆきさきのかひのさうくわんおふし

中に友則のみ五位にてその外は賤官なるがおふせかうふれるは時にすぐれたればなり

かふちのみつねは右衛門府生みぶのたゞみねらにおほせられて

○當年延喜五年四月十八日ニワレラ四人ノ者ヘ仰付ラレテ。

まんえうしうにいらぬふるさとたみづからのをもたてまつらしめ給ひてなむ

○萬葉集ニ入ヌフルイ歌并ニ自分〳〵ノ歌ヲモ集メテ差上マスルヤウニト仰セ付ラレテサ。

それがあかにも梅をかざすよりはじめてほと〳〵ぎすをきゝもみぢを〳〵り雪を見るにいたるまで

○ソノ中ニモ春梅ノ花ヲカザス歌カラウツタツテ。郭公ヲキク歌。紅葉ヲ折ル歌。雪ヲ見ル歌マテ四季ノ部。

又つるかめにつけて君をおもひ人をもいはひ

○又鶴龜ニツケテ君ノ御壽命ヲ長カレト思フテ御祝ヒ申シタリ。其ノ外ノ人ヲモ祝フタ歌。

もくさ入らぬくさぐのは雑體より大歌所までの歌をかねたり

○此集に千二百余の歌をえらばれしかど文のさまにて千歌といふなり

○此集一度えらば末永くつたはらんずるいはひとをいへり山下水は

秋萩夏くさを見てつまをこひ逢坂山にいたり手向をいのり

○又秋ノ萩ノ花ヤ。夏ノ草ヲ見テハ妻ヲ戀シク思フタ戀ノ歌。逢坂山マデ旅立テ行テ手向ノ神ヲ祈ル歌ナド。

あるは春夏秋冬にもいらぬくさ〴〵の歌をなむ和らばせ給ひける

○アルヒハ四季戀ナドノ部ニモイラヌイロ〳〵ノ雜ノ歌マデナサ。撰ミマセイト仰付ラレテ其通リ撰テ集メタ。

すべてちうたはたまきなづけて古今和歌集といふ

○其歌數都合千首卷ノ數ハ廿卷。題號ハ古今和歌集ト名ケタ。

かくこのたびわつめえらばれて山下水のたえず濱のまさごのかずつもりぬれば

○カヤウニ此ノ度此ノ集ガ出來テ山下水ノ昔シノ撰集ノ跡モ斷絶セズ濱ノ眞砂ヨイ歌ガ數多クアツマツタ事ナレバ。

絶ぬ譬へは濱の眞砂は數多きたとへあすか河はながらぬを云さゝれ石は萬代經ておひさらんと云なり

○にはひすくなくとはうるはしき餘情もなくてむなしき名のみながきてとゝ云てゝろなるを秋の夜春の花い文のあやなり

いまもあすか川の瀬になるうらみも聞えずさゝれ石のいとほとなるよろこびのみぞあるべき

○モサコレカラハ歌ノ風ノワルウ變ルキザカヒモナウテ。次第ニコノ道ノ末長ウ繁昌スルメデタイコトバカリカサアラカ。

それまくら詞は春の花にはひすくなくしてむなしき名のみ秋の夜のながきをかこてれば

○サテ我々ドモガ歌ハヨミ歌ハ春のはなオモシロイトコロモナイノニ。實デモナイ名バカリ秋のよの上手ナヤウニ云ヒハヤサレルコトナレバ。

おのがをしへ子なる。三井高陸がいはく。まくらは。われらを寫しあやまれるなるべし。われとまれと似たり。同じ貫之の大井川の序にもわれ、らみじかき心の云ゝ。後遺集序にも。仰せをうけ給はれるわれら云ゝ伊勢が長歌にも。涙の色のくれなゐはわれらが中の時雨にて云ゝ。とありといへり。横井千秋がわれらなるべしといへり。又ある人はいはく。それまくらは。それがしらの誤なるべし。おのがとをそれがしといへる

○人の聞をおそれまた歌の心にはぢ思へるとなりかく歌を生あるものゝやうにいへるは色の巧みなり年のおもはんことぞやさしきとよめるたぐひなりかつはその事をするうちに又他の事をもなすの詞なり

○たなびく雲とは立居といはんため鳴鹿はおきふしといはん料なり

○こゝの詞は論語に文王すでも。中むかしの文に例ありといへり。今思ふに此ふたつのうちなるべし。まろうの誤とするはわろし。まろといふは。無禮しき語に用ひたる例なれば。此の序などにいふべきにあらず。

かつは人のみゝにおそりかつは歌の心にも思へど

○世間ノ人ノ聞クトコロモナントアラウカト。思ハレ又一ツニハ歌ノ思フ心モ恥カシケレドモ。

たなびく雲のたちゐ鹿のおきふしもつらゆきらがこの世をおなじくうまれて此事の時にあへるをなむよろこびぬる

○拙者ドモガ此ノ世ニ同ジヤウニ生レアハセテ。カヤウナ仰付ラレノアル時節ニ逢フタコトチサ。たなびくくものタツテモ居テモなくしかの寐テモサメテモ悅ビマス。

ひとまろなくありにたれど歌の事といまれる哉

○カノ人麿ハトウ無クナツテシマウタケレドモ。歌ノ道ハノコツテアル。

で文に沒したれを王にわらずやと云ふをうつして書きたるなるんかれは孔子のみなりそのを意にて貫之はてゝからをのみに聞きまがひて上にへりくだりて云ふことのすしたがへるやうなり

○これよりてのの集の末ひさしく傳ハらんことをいふさて世のたえずうしなはず傳はりて世にとゞまらば末の世に歌の風體（さまこと）、（うは）、意旨をも知た

サテ〳〵難有イカナ。

たとひとさうつりとさりたのしひかなしひもきかふとも

○コレカラ後タトヒ時代ガ段々カハツテ。ドノヤウニナリユクト云テモ。

このうたのもし（あるをや）あをやぎの糸たれず松の葉

のちうせずしてまさきのかづら長くつたへり鳥のあと

久しくとゞまれらば

○此ノ集ガモシ世間ニ。（宵柳のいと）（松のはの）タエウセズニ（まさきのかづら）末ヱ長ウ（鳥のあと）久シウ傳ハツテサヘアツタナラバ。

あるをやの四字は。次のあをやぎよりまぎれたる誤なるべし。もしは。

若にて。久しくとゞまらばといふへかゝれる詞なり。

歌のさまをもしりことのこゝろをえたらむ人は

○末代ニ至テ歌ノヤウスヲモヨク知リ。物モ心得テアラウ人ハ。

大ぞらの月を見るごとくにいにしへをあふぎて今をこひ

ざらめかも

らん人かの奈良の京の都のはじめより今てころのことをあるひはたふとびあるひはたふとぶねがはざらめかもといふなり松の葉あをやぎの糸正本のかづらなどは冠辞のやうにいへり鳥のあとはかの國のいにしへに鳥の足あとを見て字をつくりたるをいふことより文字をしかいへりかものは助たる詞にてもとはかの一言のみなり別にふかきてとわりあるにあらず

○此集（いにしへを）（さつあう）ヲ。サテ〳〵結構ナ集ヂヤト云テ。天ノ月ヲ見ルゴトク仰ギタツトンデ。今マ此ノ當代ヲシタハヌト云ヿハアルマイワサテ。

（千秋云。いにしへとは。後世よりいふ古へにて。すなち此延喜の御代をさせり）

○ことしの春の歌なれば假りに去年をふるとしといへるなり

○此の歌えらびとりては置くべきところなくまづ天の巻にしたがひてこゝにのせたるなり

○或人此歌はくわんどう巻頭のめいぼく比類なきよしに云は心を得ぬひがことなり

○この歌は時いのうつり行てとをいへり二句は夏あるは冬その間に秋を省けりさ

春歌の上

ふるとしに春たける日よめる　在原元方

年の内に春は來にけり一とせをこぞやいとせとしとやいはむ

○年内ニ春ガキタワイ。コレデハ。同ジ一年ノ内ヲ。去年ト云タモノデアラウカ。ヤツハリ。ゴトシト云タモノデアラウカ。

春たちける日よめる　紀貫之

袖ひぢてすむびし水の氷るを春立けふの風やとくらむ

濁

○袖ヲヌラシテスクウタ水ノコホツテアルノヲ。春ノキタ今日ノ風カ。フイテトカスデアラウカ。

題しらず　よみ人しらず

春霞立るやいづこみよし野のよしの〳〵山に雪はふりつゝ

○春ガキテ。霞ノ立タハドレドコヂヤゾ。見レバ吉野山ニハマダ雪ガソツテその氷をばはる立けふの風はとくらんとよめり

○奈良の都のころの人のよめるなるべし此歌のすなはちたけ高きを見て上の袖ひぢてのこまかなるを思ひくらべよ

○春かけては冬より春懸ていまだ雪のふりつぐと云てとなり此詞前へよりけることにも又後よりかくるにもいへり是をはやくより思ひあやまれる歌多し

テ。ナカ〳〵春ソケシキハミエヌカ。

二條后の春のはじめの御歌

雪の内に春は來にけり鶯の氷る涙いまやとくらむ

○マダ雪ノツモツテアル處ヘ春ガキタヲイ。コレデハ鶯ノ氷ツタ涙モモウトケルデアラウカ。

題しらず　よみ人しらず

梅がえにきゐる鶯春かけて鳴どもいまだ雪はふりつゝ

○梅ノ枝ヘキテ居ル鶯ハハヤ鳴ケレドモ。マダ此ヤウニ春マデカケテ雪ガフツテ春ノヤウニモナイ。鶯なけども。春かけて。いまだ雪はとつゞく意なり。

雪の木にふりかゝれるをよめる　素性法師

春立ば花とや見らむ白雪のかゝれる枝に鶯のなく

○春ニナツタレバ。花ヂヤト思フテヤラ。雪ノフリカヽツテアル木ノ枝デ鶯ガナク。

○ある人のいはくさきのおほいまうちぎみの歌とて注しわれけるは後人のかむなれどもたらずてるの君のよみ給へるなるなどかお此集にもてにかゝざらん是れは忠仁公の御事なり後に昭宣公を太政大臣になし給へは

題しらず

心ざし深くそめてしをりければ消わへぬ雪の花とみゆらん

よみ人しらず

○トウカラ花ノ事ヲ深ウ思ヒコンテ。居ルガソレユエデヤラシテ。春ニナツタレバ。ソノマヽ。雪サヘマダロクニ消ヌノニ。ソノ殘ツテアル。木ノ枝ノ雪ガ。ハヤ花ニミエル。

此歌古く聞ゆれば。三の句。をりけれかなるべし。をりければにやの意なり。この格萬葉に多し。然るを此集のころにいたりては。けれかといふ詞は。耳なれぬ故に。ければとなへ來つるか。はた後の人の。かはの誤と心得て。さかしらに改めたるにもあるべし。然れども。ければにてい結びのらむとかけあひわろし。されば結を一本に。見ゆるかとあるも。後にかけあひを思ひて。改めたるにやあらん。

ある人のいはくさきのおほきおほいまうちぎみの歌なり。

二條后のとう宮のみやすむ所とさえける時正月三

とあるべきいはれなし

○春のひかりとは即ち東宮の御事にてそのの御恵みをかうふる我なれをわびしく思ふとなり

日おほへにしておほせごとあるあひだに日くれてりながら雪のかしらにふりかゝりけるをよませ給ひける

康秀ヲ

オヨマセアソバサレタ

清

春の日の光りにあたる我なれど頭の雪となるぞわびしき

ふんやのやすひで

○此節ノ春ノ日ノ光ノヤウナ難有イ御惠ミヲ蒙リマスル私デゴザリマスレドモ。年ヨリマシテカヤウニ頭ガ雪ニナリマスルハサ難儀ニ存ジマスル。コマリマシタ物デゴザリマス。

雪のふりけるを

きのつらゆき

霞たちこのめもえるの雪ふれば花なき里に花ぞ散ける

○霞ガタツテ。ホドモノコノメモ張リ出ル春ノコロ此ヤウニ雪ガフレバ花ノナイ里ニモサ。花ガチルワイ。トント花トミエル

春のはじめによめる

藤原となは

春やとき花や遲きと聞わかん鶯だにも鳴ずもあるかな

○ハヤ春ニナツタナレバ。モウ花ガ咲サウナ物デヤニ。マダサカヌハ春

○はるの初のはまをはかなくいひしうたなり

○この歌はひたすらに鶯を思ひ入てよめりかくやうにひたすらによむが歌のめでたきなり

○あらしハ春といへどしかにはあらしとふをはぶきてきかせたり

ノ來タガホドヨリ早ーノカ。花ノサクノガホドヨリオソイカ鶯ナリトモ鳴イタラ。ソレデドチラヂヤト云フコトガシレカニ。サテモマア鶯サヘナカヌコカナ。

春のはじめのうた　みぶのたゞみね

春きぬと人はいへども鶯のなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ

○春ガキタト人ハ云ケレドモ。マダ鶯ガナカヌ。ナンデモ鶯ノナカヌウチハ。イツマデモ。オレハ春デハアルマイトサ思フ。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた　源まさすみ

谷風に解る氷のひまごとにうちいづる波や春のはつ花

○春ノ初メニ。谷ノ風ニ。アソココトケル氷ノヒマ〳〵カラウチダス浪ハ。テウド花ノヤウニ見エルガ。コレガ春ノハツ花ト云モノデアラツカ　きのとものり

○さて上にはまたうぐひすの鳴ぬはもの歌をあげて其間に谷風の歌を鶯をあげたる又鶯はこの歌は專ら鳴ころをよめるとすべし

○新撰萬葉には春はくるとまもたれかしらましとあり

○はるにはなはしにて入られしにやあきらかにてめでたき歌なり

○聞く人の心にうきことなどわりけるときもそのでとくきゝなさるゝなるべし

花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる

○風ニ吹テイク幸便ニ花ノ香ヲコトツケテ。ヤツテサ。ソレヲ鶯ヲサソヒダシテクル案内者ニハスルヂヤ。

鶯の谷より出る聲なくは春くるとを誰かしらまし　清　大江ノ千里

○谷カラ鳴テ出テクル鶯ノ聲ガナクバ。春ノキタト云フヲタレガシラウゾ

春立と花もにほはぬ山里にものうかる音に鶯ぞなく　在原棟梁

○春ニナッテモ。花モナイ山中ノ里デハ。ナニモハリアヒガナサニ。鳴キトモナサウナ聲ヲシテサ。鶯ガナク。

（千秋云。下の句。ものうかる音にぞ。鶯のなくといふ意にて。ぞもしはものうかるねへかゝれ過てにをはなりこの類おほし）

題しらず　よみ人しらず

○この歌は古體なり朝なゝ聞をよろべゝ聞マス。

野べ近く家ゐるしせれば鶯の鳴なるこゑは朝なゝ聞く

○ワシハ野邊ノ近イ所ニスマヒチシテ井レバ。鶯ガヨウ鳴テ毎日アサカラ

春日野はけふはあ燒そ若草のつまもこもれり我もこもれり

○此ノ春日野ヲバ今日ハ燒テクレルナヨ(三)妻モ來テアソンデ居ル。我モキテ遊デ居ルホドニ。

かすが野のとぶ火の野守出て見よ今いくかありて若菜摘てん

○若草はつまといはん冠辭なり春のわかゝ艸はめづらしくうつくしまるゝものなれば夫婦にたとへたり

○此ノカスガ野ノ飛火野ノ番人ヨ。出テヤウスヲ見テクレイソチハコノ野ニ付テ居レバ。タイガイ知レルデアラウガ。マツイケカバカリアツテカラ。若菜ヲツミニハ來ウソ。

○いせ物がたりにむさしのはけふはなやきそとあるはこの歌を作り

み山には松の雪だに消なくに都は野べの若菜つみけり

○山ニハアレ雪サヘマダキエズニアツテ。松ナドモ白ウミエル三京ハ。ハ

かへて物語にしたるまで也

○とぶ火野は春日野の内にわ、とぶひ峰のとと軍防令にくはし

○あづさ弓はるとつゞくは冠辭なりこは語をへだてゝはるとつゞきたらん又弓はおして張もの

なれどさはいひ下しつといふもわしからずされど弓におすてふことゝむかしのふみにみねばしらく隔句ならんといふなり

○君とよむて

ヤメツキリト春メイテ。野ヘシヘ人ガデ、。若菜ヲツムワイ。

梓弓おして春雨けふふりぬ明日さへふらばわかなつみてん

○(一)オシナメテドコマカモ春雨ガマヅ今日フツタカ。アスマ一日フツタナラバ。オホカタ若菜ガツマルヽクラ井ニナルデアラウホドニ。野ヘ出テ。若菜ヲツマウソ。

仁和のみかどみこにおまし〳〵ける時に人にわかな給ひける御歌

君がため春の野に出てわかなつむ我ころもでに雪はふりつゝ

○ソコモトヘ。進ゼウト存ジテ。野ヘ出テ此若菜ヲツンダガ殊ノ外寒イコトデ。袖ヘ雪ガフリカヽツテ。サテ〳〵ナンギヲ致シテ。ツンダ若菜デゴザル。

歌奉れとおほせられし時よみてたてまつれる

といにしへは友どちはもとよりにて天皇后の臣下をさしてものたまへる例おりまだ親王の時にてましませ誰人をも指給ふべし

○春日野は奈良のみやこの時宮人たちいで、遊ぶを名高きによりてこの人土佐日記にもけふなれどわかなもつまず春日野のとはるかに思ひてさへよめり

○べらといふ詞萬葉になし此集より後にもよまずべくなど云て

春日野の若なつみにや白妙の袖ふりはへて人の行らむ　つらゆき

○ワザ〳〵春日野ノ若菜ヲツミニヤラ。アレ白妙ノ袖ヲフツテ。ツレダッテ人ガイクワ。

打聞ふりはへの説いかゞ。延とはおあふのはえとは。假字さへ異なるものをや。

題しらず　在原ノ行平ノ朝臣

春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそ亂るべらなれ

○春ノ着ル霞ノ衣ハ横ノ糸ガウスサニ。山風ニサミダレルデアラウサウ見エル。

寛平ノ御時きさいの宮の歌合によめる　源むねゆきの朝臣

ときしなる松の緑も春くれば今一しほのいろまさりけり

○イツモカハラヌ松ノ青イ色モ。春ガキタレバ。一入染ダヤウニ色ガマシ

語の定まれるをべらとてはを少しなだらかに聞ゆるとていふにや

○衣をはるとひかけしよりひ緑のころもてふ色によせてよめるなり

○新撰和歌集に糸よりかくる時しもぞと見たり

タワイ。

歌奉れとれはせられし時よみて奉れる　つらゆき

わがせこが衣はる雨ふるごとに野べのみどりぞ色まさりける

○(一)(衣)ハル雨ノフルタビニ。野ヘンノ草ノ青イ色ガサダン〳〵増ワイ

わがせこがの説打聞よろし。妻が夫の衣をはるといふ詞なり。餘材あやまれり。

青柳のいとよりかくる春しもぞみだれて花の綻にける

○糸ヲコツテハホコロビモヌフ(ヒ)ヂヤニ。青イ柳ノ糸ヲヨリカケル春ノコロハ。ケツクサ花ガ咲ミダレテ。ホコロビルワイ。

はころぶるは。花のひらくをいふ。

西大寺のほとりの柳をよめる　僧正遍昭

浅みどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

○玉にもといふにてさても

かく玉になしてつらぬけるもの故とめでいへるをいたるこの詞づかひをよく心に入れてみぬ人の常わるこなどのみ思ふなり

○百千鳥にさまゝの説あれどみな一にあらずとなしきつくりでとなりゆめ〳〵信ずべからず

○よぶこ鳥は夏の暮よりなくなり鳥かけて此鳥は人をよぶがごとくなりて呼子鳥と云是を秘めもてあそぶにいへり

○アレアノ柳ヲ見レバ。ウスモエギ色ノ糸ヲヨツテカケテ。キレイナ白イ露ヲマア玉ニシテツナイデ。サテモ〳〵見事ナ春ノ柳カナ。餘材わろし。

題しらず　よみ人しらず

もゝ千鳥さへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふりゆく

○鶯ヤナニカヤ。鳥ノガモシロウサヘヅル春ハ物ゴトニナニモカモ改マツテアタラシウナルケレドモ。オレガ此身バカリハサ春ノクルタビニダン〳〵トフルウナツテイク。濁清

をちこちのたづきもしらぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな

○アチモコチモ。案内モシラヌ此ノ山中ニナンデヤカ呼子鳥ガナイテ人ヲヨブガ。ドコデヤヤラサテノ〳〵マアシツガリトシレヌコトカナ。北國

雁の聲をきゝてこしへまかりける人を思ひてよめる　凡河内躬恒

○道行ぶりとは道行ふるゝなり物に觸さはるとなるをもて道行ついでのことにとれり

春くれば雁かへるなり白雲の道行ぶりにとやつてまし

○春ニナツタレバ。アレ雁ガカヘルワ〳〵。雁ハアノヤウニンラチトンデ。北國ヘ方ヘユクデヤヤガコレハヨイトコロデ。ユキアフタ。コトヅケヲシテヤラウカヨ。白くもの道

かへる雁をよめる　伊勢

春霞立を見すてゝ行雁は花なき里に住やならへる

○オツトケ花ガ咲デヤニマア。此ヤウニ春ノ霞ノタツタノヲ。ミステヽイヌルアノ雁ハ。花ト云モノヽ昔カラナイ里ニスミナレタ〻カイソレデ花ノ面白イ〻ヲ。シラヌデガナアラウ。餘材花なき里の説わろし。

題しらず　よみ人しらず

折つれば袖こそにほへ梅の花ありやとこゝに鶯のなく

○梅ノ枝ヲ折タニヨツテ。ソレデ袖ガニホフノデコツアレコヽニ梅ノ花ハアリモセヌノニ。此ノ袖ノニホフノヲ。梅ノ花ガコヽニアルト思フカシ

來なきけんをこゝとはいふなるべし

○意めきらかにてめでたきなり

○雖さでふれしと云にて漢の故事を引ていふはわろし

○何となくふれしか誰そとはいふにてやさしき歌なり

○うゑしは植

○それを約めたる言なり

○かくもかく物でとにふかく立入て云事はいにしへの風流なり

テ鶯ガ來テ鳴ク。打聞わろし。

色よりも香こそあはれとかもほゆれ誰袖ふれし宿の梅ぞ

○梅ノ花ハ色モヨイガ。色ヨリ香ガサナホヨイワイ。アヽハレヨイニホヒ

ヂヤ。此ノヤウニヨイニホヒノスルハ。タレガ袖ヲフレタ此庭ノ梅ノ花ゾイマア。

宿近く梅の花うゑじあちきなく待人の香にあやまたれぬる

○ムヤクナヿヂヤニ。庭ノ近イ所ニ梅ハウエマイゾ。花ガサケバアマリヨウ匂ウデ。待人ハ來モセヌニ。ソノ人ノ袖ノニホヒニトリナガヘラレルワイ。

(千秋云。梅うゑし花のあぢきなくと心得べし)

梅の花立よるばかりわりしより人のとがむる香にぞしみける

○籠馬樂に青柳を片糸によりてうぐひすのぬふてふ笠はうめの花笠これにより梅花をしなべてかざしにせん老たるかくるるにやといふなり

○梅ノ花ノ下ヘチヨツト立ヨツタト云ホドノヿガアツタガ。ソレカラ。人ノフシンチウツヤウニサ衣モノガ香ニソマツタワイ。キツイ匂ヒナモノヂヤ。

梅の花ををりてよめる　東三條左のおほいまうちぎみ

鶯の笠に縫てふ梅の花折てかざゝん老かくるやと

○ソウタイ笠ハツムリヤカホヲカクス物ナレバ。鶯ガ笠ニヌウト云梅ノ花ヲチツテ。吾ガ年ヨツタ形ガカクレルカドウヂヤトツムリヘサシテ見ヤウ。

題しらず　素性法師

よそにのみあはれとぞ見し梅の花あかぬ色香ゝをりてなりけり

○オレハアハウナ今マデハ。梅ノ花ヲタヾヨソニバツカリサアアハレ見ヿナヿカナト思フテ見テ居タガ。梅ノ花ノドウモイヘヌ色ヤ香ハ折テカウ

○意あきらかなりそれが中にによろづのものを大かたの人のをしれりとき云はまだしきなり万葉によき人のよしみてよくみてよしとよしといびしはとよ

○くらぶ山といへるくらきてとハらぶ山とくらぶ山ちかくなりたるごとかたしぎりたるごとかたし

近ウミテノコヂヤワイノ。又々ヨソニ見タヤウナコデハナイ。餘材わろし。

梅の花をゝりて人におくりける　とものり

君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をもしる人ぞしる

○此ノ梅ノ花ヲ貴様デナウテハ誰ニ見セウゾイ。色デモ香デモヨウ知テ居ル人ガサ。ヨシアシハ。ヨウシリマス。ソレデ知ラヌ人ニ見セテハナンノセンモナイコトサ。

くらぶ山にてよめる　つらゆき

梅の花匂ふ春べはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞありける

○梅ノ花ノニホウ春サキノコロハ。暗部山ヲクライ闇ノ夜ニコユル時デモ梅ガサイテアルト云コハ見エイデモ。ソノ匂ヒデサ。ヨウシレルワイ。

月夜に梅の花をゝりてと人のいひけれバをるとて　みつね

あらぬと云詞によりてをさなくくちきかたにいふは歌のあやなり

○あやとは本は絹の文のあかれてみゆるをいひわかちなきを文なしと云よりして何にても分ちなきことをいふとゝなれり

月夜にはそれとも見えず梅の花香を尋てぞしるべかりける

○ハテヨイトコロヲ一枝折テヤラウト思フガ此ヤウナ月夜ニハ月影ノサス所ガミナオンナジャウニ。白ウ見エルニヨツテ。梅ノ花ガソレデヤトドウモ見分ラレヌコレデハ匂ヒヲタヅネテ行テサ。知ラウヨリホカハナイ

春のよ梅の花をよめる

はるの夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やとかくる〻

○春ノ夜ノ闇ト云モノハ。ヅケノタトヘヌ物デヤ。ナゼト云ニ梅ノ花ガ。暗ウテ。色コソ見エテ。香ガカクレルカ。香ハナンボ。クラウテモ隠レハセヌ。色ハカクレテ香ガカクレテハ隠レルデモナシ隠レヌデモナシドチラヒヲケノタトヘヌ闇ヂヤハサテ。

マヘカタ長谷ヘマイル　タビニ　トマツタ

中絶シテトマラズ井テ　ソノノチ久シアリテソノイヘ〻イタワイ

むつせにまうづるごとにやどりける人の家に久しくやとらでほどへて後にいたれり

○あるじの詞はよく門をもたがへ給はでやどらんとは云ひ入り給ふよとわまりにうとゝしきをかすりて聞えしなり

○花こそむかしの如くうるはしくかほれるはとわるしが詞のぐねくねしきにこたへたるなりかたみにとかしき風流なりける

○いせが果に京の歌の端書にこの極院の子のみかとにおはしまして花の宴せさせ給ひまゐれとシタレバソノイヘノテイシュガコノヤドハコレコノトホリニマヘカタノマヽデアヒカハラズシツカリトアルゾヤト口上デ申シテダシマシテゴザレバソコニサイテアルければ かのいへのあるじ かくさだかになむやどりはあるといひ出して侍りければ ろこにたてりける梅の花をゝりてよめる

つらゆき

清

人はいさ心もしらずふるさとは花ぞむかしの香に匂ひける

○人ハドウデヤヤラ。心モカハラヌカ。カハツタカシラヌガ。ナジミノ所ハ梅ノ花ガサワシガ來タレバコレ此ヤウニマヘカタノトホリノ匂ヒニカハラズ。ニホウイノ。

水のほとりに梅の花のさかりけるをよめる

伊勢

春ごとに流るゝ川を花と見てをられぬ水に袖やぬれなむ

○流レテイク川ヘ花ノ影ノウツヽタノチ。アノ水ノ中ニモ花ガアルトミテハ。イツノ春デモダマサレテ。折ラレモセヌニ。ナラウトシテハリノ水デ袖ガヌレルガ。今年モ又ヌレルデカナアラウ

詞書に水とあるは京極院の庭の池なれば。哥にながるゝ川とよめるはその池につゞきたるやう水をいふなるべし。上句二三一と句を次第して心得べし。

年をへて花の鏡となる水とちりかゝるをやくもるといふらん

○年ヲ重子テ。毎年春ハ花ノ影ガウツヽテ。其ノ花ノ鏡ニナル水ハ花ノチリカヽルヲ鏡ノクモルト云ノデアラウカ。花ノチリカヽルト云ト。年ヘテ鏡ヘ塵ガカヽルト云ト詞ガ同ジコトヂヤニヨツテ。カウヨンダノヂヤソヱ。

千秋云。としをへてといふ詞は上の句にハさして用なきを。たゞ鏡の年をへてくもることをいはんためにおけるなり。さてこの歌などは俳諧の部にいるべきさまにあらずや)

家にありける梅の花のちりけるをよめる

おほせらにしにまゐりて池にはなをちりたるを見てとわれば川にはあらぬてとしるされど歌にはは川とよめるを合せ見れはこの池とかけるもいふかしむべし

○この二首かしこくたくみておもしろけれど小町のはかなくなだらかなるにはおろかにおよばれ歌はおこそよけれ女はましてなり

○めかれぬは目をいなたずと云事にて萬葉に離の字をかるゝとよめる意なり

○香をりをわが袖にうつしてとゞめたらばと云をつゞめてとゞめてばとはいへりてのはは濁るべし

くるとあくとめかれぬものを梅花いつのひまにかうつろひぬらん　貫之

○日ガクレルト云テハ見。夜ガアケルト云テハ見イシテ。シバシモ目モハナサズ見テ居ルノニ。此ノ梅ノ花ハイツノヒマニ。此ノヤウニチツテシマウタコヤラ。

打聞。うつろふの説。なか〳〵にわろし。

（千秋云。此初句の二つのとはとての意なり。與にはあらず）

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた

梅が香を袖にうつしてとゞめてば春は過ともかたみならまし　濁　よみ人しらず

梅ノニホヒヲ。袖ヘウツシテ。トメテオイタラバ。春ハ過テシマウタト云テモ。ソレガ春ノ形見デアラウニ。

○うたては古事記に須佐之男命のとてもかくてもあしきわざし給ふうたてありことを轉有と書あはせりきてとに云ふなり

○だにはたゞにの畧なり

散と見てあるべきものを梅花うたて匂ひの袖にのこれる　素性法師

○ハヤチツタワトバカリ見テ。ソノアンデアラフコヂヤニ。ヒヨンナコヤ。匂ガ袖ヘノコツタ。コレデドウモチツタ梅ノ花ノコガ忘レラレメ。

題しらず　よみびとしらず

ちりぬとも香をだにのこせ梅ノ花戀しき時の思ひ出にせむ

○梅ノ花ヨ。チツタリ迄。セメテハ香ヲナリ迄ノコシテオケ。ソレヲ後ニ戀シイトキ〳〵ノ思ヒダシグサニセウ。

人の家にうゑたりける櫻の花さきはじめたりける　つらゆき

を見てよめる

ことしより春しりそむる櫻花ちるといふことはならはざらなん

とのみよめるは端書に櫻とことわれりそれより次にふるさとゝなりにし奈良のみやこにはと云よりひろく百花をよめりよりて歌にも詞にも櫻といはず

○すさめぬは すゝまぬなり心ずさみ手ずさみなど一つ心なりすべてはらずとゝにまかすてとにいへり

○峯は高きとてゝをは山の末をいふをといひをかといふ同意なり

○春ハサク物ヂヤト云フヲ外ノ櫻ニナラウテ。今年カラ始メテ。知テ咲イタ此ノサクラ花ヨ。ドウゾチルト云フヲバ。外ノ櫻ニナラハメガヨイゾヨ。

題しらず　よみ人しらず

山高み人もすさめぬ櫻花いたくなわびそ我見はやさむ

○山ガ高サニコヽヘハ誰モ來テ見テ。賞翫スル人モナイ此ノ櫻花ヨ。人ガシヤウグワンセヌトテ。アマリツラウ思フナイ。オノレ見ハヤシテヤラウホドニ。

又は里とほみ人もすさめぬ山ざくら

山櫻わが見にくれば春がすみ峯にも尾にも立かくしつゝ

○山ノ櫻ヲオレガカウ見ニクレバ。霞ガ一ヲメンニドコモカモ立テカクシテ。花ヲミセヌワイ。サテモイヂノワルイカスミカナ。

染殿ノ后のおまへに花がめにさくらの花をさゝせ給へるを見てよめる

○染殿后ハ文徳天皇の后清和天皇の御母忠仁卿の御女なり染殿は忠仁卿のおはせし家なりてゝに住せ給ひしより染殿とのとゝ申奉りしなり

○御むすめの后を花にたとへてのはなをさへ見れば身の老てもものうきともわするゝよとなり

○業平歌は大かたあるべきてとはいはでそれが上をのみ詠る故に心あまりて詞たらぬと云さだも序にいへ

年ふればよとゝひは老ぬしかはあれど花をしみれば物思ひもなし　前のゐはきおほいまうちぎみ

○年數ヲ經マシタレバ。ワタクシモイカウ年ハヨリマシタガ。サリナガラ。アナタノ御繁昌ナサルヽ。此ノ御殿デ。カヤウニ花ヲ見マスレバ。ナンニモ物思モコザリマセヌ。

なぎさの院にて櫻を見てよめる　在原業平朝臣

世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし　清

○イツソ世ノ中ニトント櫻ト云モノガナイナラバ。ケツク春ノジアンノ心ハ。ノドカニアラウニ。櫻ト云モノガアルデ。此ヤウニイロ〳〵ト心ガサワツイテ。春モノドカニナモハヌ。

題しらず　よみ人しらず

石はしるたきなくもがな櫻花手折てもこむ見ぬ人のため

り

○今の本に石はしるとよめるを石いはとよむべし萬葉に例あり瀧は岩の上を走おつればしか云なり

○つとは今も荷苴などを字をわらづとよむでとく野山などに出てそこなるめづらしきものを何にてもつゝみもて持かへるなり

○ときまさは かきまさに同じ

○伊せものがたりにこけるからともいひ今も稻のはをこきたるといふでとし

○岩ノウヘチハシル此ノ早イ川ガ。ナケレバヨイニ。ソシタラ内ニ居テ。エ見ヌ人ノタメニ。アノ川ノアチラノ櫻ノ枝ヲ折テキテマア。ミヤゲニ持テイナウモノヲ。川ガアルデドウモチリニイカレヌ。

山のさくらを見てよめる　そせい法師

見てのみや人にかたらん櫻花手ごとに折て家づとにせん

○カウシテアノ見事ナ櫻花ヲ見テ。人ニハタヾ咄スバカリデ。オカウヲカイ。ソレデハ見タカヒガナイホドニ。手ンデニ折テ來テ。持テインデ内ヘミヤゲニセウ。

花ざかりに京を見やりてよめる

見渡せば柳さくらをこきまぜて都ぞ春の錦なりける

○此ノ山ノ上カラカウ見渡セバ。柳ノ青イ色ト。櫻ノ花ノ白イ色トヲコキマゼテ。トント錦ト見エル。此ノ見ワタシタトコロノ。京ノケシキガサ、春ノ錦ト云モノヂヤワイ。

さくらの花のもとにて年の老ぬることをなげきてよめる　きのとものり

色もかも同じむかしに咲らめど年ふる人ぞあらたまりける

○櫻ハアノヤウニ色モ香モ。イツノ年モ同シヿデ昔ノトホリニサクケレドモ年ヲ經テ人ハサ。コレ此ノトホリニ。若イキトハ大キニカハツタワイ。此歌三の句さくらめどゝいひては。いさゝかかなひがたきやうなるを。櫻をたちいれむとて。しひたりときこゆ。

（千秋云。さくらめどは。げにさけれどもとか。さくなれどゝか。いではかなひ難きさまなり）

をれるさくらをよめる　つらゆき

誰しかもとめて折つる春がすみ立かくすらん山のさくらを

○此五ノ櫻ノアッタ山ハ。ザダメテ霞ガ立テカクシテ。知レニクカラウニ。

タレガマア。ニタンダベテイテ折テキタコトゾ。

○今の本におなし昔にさくらめどゝあれを六帖に昔ながらにとあるをとるおなしかたはいひたらぬなり

○常にかはらぬがくれなる物にてをさなくよめるはおもしろもかくひろく折たるおもひやりてよめるこそめでたけれ

○あし引は山といはん爲の冠辭なりあしび木のしび木は繁み木の謂なりさて山はさまゝあれど木の繁きをめづれば山の冠辭とはせしなら

○打きゝたるまゝなりされどいにしへの一すぢにしよむをまねびたるなりよしの山の花ざかりを見て雪かとのみぞとはひたるいきはうたにしよみたかやでめでんてそ專らねがふべきことね

歌奉れとおほせられし時によみてたてまつれる

櫻花さきにけらしなあし引の山のかひより見ゆるしら雲

○櫻ノ花モサイタサウナヲイマア。アノ山ノアヒダカラ白イ雲ノ見ユルノハ。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　友のり

みよしの〻山べに咲る櫻花雪かとのみぞあやまたれける

○吉野山ノアタリニ咲テアル櫻花ヲ見レバ。トントサ。雪ヂヤナイカトトリチガヘラレルワイ。

やよひにうるふ月のありけるとしよみける　い せ

さくら花春くはゝれる年だにも人の心にあかれやむせぬ

○櫻花ヨイツモノ年ハ早ウチルトモ。セメテ春ノ一月加ハッテ。長イ今年バカリナリ度。人ノ心ニタンノウスルホド。ユルリト咲テアッタガヨイニ。ナゼニイツモト同ジヤウニ。今年モ早ウチルゾイ。

なれ

○あだとはいにしへ池國をあだし國といひ他人をあだし人と云たゝよそはかのことなりあだし心をわがもたばかはといふもはかの心のことなり

○こゝの二首のせ物がたりにいに戀の歌とし

此結句のてにをは一格なり。例多し。詞の玉の緒に出せるがごとし。打聞いひざまあしくて。いかなる意ともきゝとりがたし。

さくらのさかりに久しくとはざりける人のきたりける時によみける　よみ人しらず

あだなりと名にこそたてれ梅花年にまれなる人も待けり

○櫻花ハアダナ物ヂヤト名ニコソタッテアレ。ナカ〳〵アダナモノデハコザラヌ。一年ノ内ニモタマ〳〵ナラデハ。尋子テクダサレヌ人チサヘキドクニ今日マデチラズニ。待テ居タワイノ。スレヤ久シウ尋子テモ下サレヌ貴樣ノアダナ御心ヨリハ櫻ガハルカマシヂヤ。

かへし　清

けふこずゑ明日は雪とぞふりなまし消ずはありとも花と見ましや

業平ノ朝臣　清

○貴樣ハ。櫻ハアダニハナイ。業平チアダナト云ハシャルガ。ソレヤ大キナチガイジヤ。ワシガ今日參ッタレバコソアノ櫻ヲ花ヂヤトハ見レモシなせり此歌

はただ相おもふ人のうへにてはおぼつかなく返しも懸ならでも人わろく聞ゆるなり

○しるしは垂仁記に何益の二字をばなにのしるとよめるしかあるにあたれりと何のかひかあり云に同じ

○をしげは惜きやうにもあるかなと云なりすべてかやうなる氣と云はしかとそれとはなくさわらんと云はどのことなり

今日參ラズハ。明日ハモウ雪ニナツテ降デシマウデアラウ。タトヒソノ雪ニナツタノガ。消ズニアツタトテモ。雪ヂヤトコソ見ヤウグレドモ。モトノ花トハ見ヤウカヤ。

題しらず　よみ人しらず

ちりぬればこふれどしるしなき物をけふこそ櫻をらばをりてめ

○櫻花ハチツテシマウテカラハ。ナンボ見タウ思フテモ。ソノセンハナイモノヂ。折ルナラ早ウ今日ノ内ニコソ折ウナレ。明日ハモウチルデアラウ。

折とらばをしげにもあるか櫻花いさやどかりて散までも見む

○コノ櫻ガアマリ見事サニ。一枝ヲリテミヤウカト思ヘド。折テ取ルハ。イカニシテモマア惜イヤウナ物カナ。サイ〳〵ナントセウゾ。イヤ〳〵折ルノハ惜イヨヂヤニ。ドレヤ。此木ノ下デ宿ヲカツテ居テ。チルデマハ。ソノマヽデ見ヤウ。

櫻色に衣ぞふかくそめてきむ花のちりなん後のかたみに　きのありとも

○花ハオツヽケ散テシマウデアラウ。ソノ後ノ形見ニ。キル物ヲ櫻イロニコウ染テ着ヤウゾ。

（千秋云。此さくら色といへるはたゞさくらの花のいろにといへるなるべし。さくら色とて定れるぞめ色をいへるにはあらじ）

櫻の花のさかりけるを見にまふできたりける人によみておくりける　みつね

我宿の花見がてらに來る人は散なん後ぞ戀しかるべき

○コチノ花ヲ見ガテラニ尋ネテクル人ハ。花見ガテラノヿナレバ花ガチツタラモウ來ハスマイヂヤニヨツテ散テシマウタ後ニサ其人ガ戀シカラウ

亭子院の歌合のときよめる　伊勢清

見る人もなき山里のさくら花外の散なん後ぞさかまし

○後世の注にさくらかさねの事にて表白裏赤花といへるはたがへり

○がてらは兼ねながらをつゞめたる詞なり

てれを過がてに行がてなどゝ心得るはわろし

○さかましはたゞ咲んといはは過がたくなり

ふ詞ながらかやうに云すてゝはさくべき事ぞと聞なさるるなり

○遠山櫻を見さけよめるなるべしてゝのうつろふこのちるをいふこの歌ちらんとするはどの事なればちるさくらの始におきて次よりちるさくらをよめり

○來テ見ル人モナイ山里ノ櫻花ハ。ヨソホカノ花ガミンナ散テシマウテ後ニサ咲ウコトデヤニ。今ハドコニデモ澤山ニ花ハアルデヤニヨツテソレデ遠イ山里ナドヘハ。誰モ見ニクル人モナイデヤガ。ホカノ所ノ花ガモウ無イジブンニナツテカラ。咲クチイヤトモ遠イ所デモ見ニクルデアラウワサ。

○春歌の下

題しらず　よみ人しらず

春霞たな引山の櫻ばあうつろはんとや色かはりゆく

○霞ガタナビイテ其カスミヘ色ノウツリテ見エルアノ山ノ櫻バナガ。チラウトテヤラ霞ノ色ガカハツテキタ。

まてといふに散でしとまる物ならば何を櫻に思ひまさまし

清。

○チリカヽツタ櫻ニ向フテシバラクチラズニ待テクレト云フノヲ聞入レテソレデシバシデモチラズニ留ルモノナラバ何ヲ櫻ヨリマサツタモノデヤトハ思ハウゾソレデハモウ世ノ中ニ櫻ヨリマサツタモノハアルマイニ惜イノニ早ウチルバツカリガアツタラ櫻ノキヅデヤ。

のこりおく散ぞめでたき櫻はなありてよの中にてのうければ

○ワルウナツテウザ〳〵ト殘ツテアラウヨリサツハリト殘リナシニ早ウ散テシマウノガサアヽケツカウナコトデヤ櫻花ハ。世ノ中ト云モノハソウタイ何ンデモ長ウアレバカナラズシマイクチガワルイ物ナレバサ。

此里にたびねしぬべしさくら花ちりのまがひに家路わすれて

○コヨヒハ此ノ里デトマラウヿデヤ此ヤウニオモシロイ櫻花ノチルマギレニ内ヘイヌルコトハ思ヒダサズニサ。

うつせみの世にも似たるか花さくら咲と見しまにかつ散にけり

○めではは　はめいづるといふ詞なりたまはいたきをはぶきてその上の詞助けて意をつよくする見たき聞たきのるゐみな同じ

○うつせみとは世といふ冠辞なりこは顕しき身の命顕

の身の世とつゞけるなり古今集のころに下りては郎ち蟬のもぬけに譬てはかなき意にもいひなしたり

○この皇子雲林院にまし〳〵ける頃よみ給へるかしからば都をふるさとゝよみ給ひしならん又みやこにてむかしの友なれば何となくふるさと人とよみ給ふべきなり

○雲林院は今の京の北むらさき野に在り

○櫻花ハサ咲イタット思フタウチニハヤカタ一方カラ散テシマウタロイ人間一生ノ間ハ何ノマモナイモノヂヤガソレニモマアヨウ似タ了カナ。

僧正遍昭によみておくりける　これたかのみこ

櫻花散はちりなんちらずてと故郷人の來ても見なくに

○遍昭師ガ大方コノ花ヲ見ニ來テクレラルヽデアラウト思フテ。毎日〳〵マテドモ見エヌ。ケフマデ見エヌカラハ。モウ大方見エヌノデアラウ。スレヤヨイワ櫻花ヨ。チルナラ勝手ニ散テシマウサ。チラズニアツタトテ在所ノ人ガ來テ見モセヌニ。カヤウニヨミ候ユヱ御目ニカケ候已上

雲林院にさくらの花のちりけるを見てよめる　そうく法師承均

櫻ちる花のところは春ながら雪ぞふりつゝ消がてにする

○櫻花ノチル所ヘユキテ見レバ。時節ハ春デアリナガラ。雪ガサチラ〳〵トフツテヂキニハキエニクイ。春ノ雪ハソノマヽ消ルモノヂヤニコレハ正ノ雪デナイ櫻ハナヂヤニヨツテ。

（千秋云。初二句ちるところはといふとなるを。さは云ひがたき故に。はなとちるとを下上にはいへるなり）

櫻の花のちり侍りけるを見てよみける　そせいほうし

花ちらす風のやどりは誰かしる我にをしへよ行てうらみん

○サテモ〳〵モアツタラ花ヲ。此ヤウニチラス風メガ逗留シテ居ルトコロハ。タレゾハ知テ居ルモノガアラソ。誰レガ知テ居ルゾオレニ教ヘテクレイ。ソコヘ行テゾンブンニ恨ミナイハウ。

うりんゐんにて櫻の花をよめる

いざさくら我もちりなん一さかりありあけば人にうきめ見えなん

○此ヤウニ櫻ノ早ウ散テシマウノハ。アトヨイ料簡ヂヤドレヤ櫻ヨオレモ

○この歌はをさなくよめり

○上にありてよの中はてのうければと云をすてしかへたるのみなり法師の歌なれ

ば命の失なはんとを云可れと猶世にましはりてはわらでおく山などにのがればやと云なるべし

○ちらばちらなんはちれとゆるすにはわらでの今ちるさい中なればせんすべおくていふなり

○この歌古本には深養父としるせり

イツシヨニ散テドウナリ左ナツテシマハツ。人ト云フモノモ。一トサカリ。盛リナ時ガアツテ。ソレガ過ギテ。オトロヘタナラバ。老ホレテラツシモナイヤウスチ人ニ見ラルデ、アラウホドニ。

あひしれりける人のまちで來てかへりにける後によみて花にさしてつかはしける

つらゆき

一め見し君もやくると櫻花けふはまちえて散ばちらなん

○此間タチヨツトキテ見テ。イナシヤツタ人ガ。又ゴザルカト今日一日ハマア待テミテ。ソシテゴサラズハ。チルナラチツタガヨイ。櫻花ヨ。大カタ今日ハゴザリサウナモノヂヤ。

山のさくらを見てよめる

春霞なにかくすらん櫻花ちるまをだにも見るべきものを

○霞ハナゼニ此ヤウニ櫻花ヲカクスヤラ。ユルリトヨルヿハナラズ左。セメテハ枝カラチルアヒダナリ左マア。見ヤウモノヲ。ソノ間タサヘ霞デ見ラレヌ。

この下に典侍因秀の朝臣とみゆ典侍ハ四位なれば姓を下に書なり高葉と此集は四位の人は必しかしるせりいにしへは女もかくしるせる例なり

こゝちそこなひてわづらひける時に風にあたらじとておろしこめてのみ侍りけるあひだにをれる櫻のちりがたになりけるを見てよめる

藤原よるかの朝臣

たれこめて春の行へもしらぬまに待し櫻もうつろひにけり

○ワシハアンバイガワルウテ。幄ノ帷ヲオロシテ。ヒツコモツテバカリ居テ。春モイクカヤラ日ノ過テイクモシラヌマニ。咲タラ見ヤウ〳〵ト思フテ。セツカク待タ櫻モ。ハヤコノヤウニ。ウツロウテシマウタワイノ

東宮の雅院にてさくらの花のみかは水にちりてながれけるを見てよめる

すがの〳〵高世

○水沫のごとくながるる花をいふなり

○萬葉に殊離者琴酒者などやうに書しもすみてよむべき證なり

枝よりもあだにちりにし花なれば落ても水の泡とこそなれ

○水ノ上ヘチツテ流レル櫻花ガ。アレトツト沫ノヤウニ見エル枝カラモ。モロウ散タ花ヂヤニヨツテ。下ヘ落テモ。又同グアノヤウニモロイ水ノ沫ニサナルヂヤワ。

櫻の花の散けるをよめる　つらゆき

清

ときならばさかずやはあらぬ櫻花見る我さへにしづ心なし

○トテモ此ノヤウニ早ウチルクラ井ナラバ。一向ニシヨテカラサカヌガヨイニナゼニサカズニハ井ヌゾ櫻花ハ。此ノヤウニ早ウ散テハ見テ居ルコチマデガ。心ガサワ〳〵トシテオチツカヌ。

打聞。ときならばの説。いと物さはし此詞はいづれも右の譯の意を以て見るべきなり。例を考へ合せて味ふべし。

櫻のごとくちるものとなしと人のいひければ。よめる

○吹あへぬは吹合せぬなり

○ひさかたとは天雨月みやこなどいふ冠辭也天のかたちはまろくてうつろなるを匏の内のまろくむなしきにたとへて匏形の天といふなをおぼゆらんと○久かたのひかりのどけき春の日にてふかりのはは空のひかりといはんがごとし

○成案ずるにひさかたのとは久老が萬葉考の日刺方の

櫻花とくちりぬとも思はへず人の心ぞ風も吹あへぬ

○オレハ櫻ノ花ハ早ウチルモノヂヤト思ハレヌ。ソレヨリハ。人ノ心ガサアダナモノヂヤ。ナゼト云ニ。櫻ハマダ風ガフカヌバメツタニチリモセヌガ。人ノ心ハ風ノフクマデモマタズニ早ウウツル物ヂヤワサテ。餘材。下句の注あろし。

さくら花のちるをよめる　きの友のり

清

ひさかたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花の散らん

○日ノ光リノ。ノドカナ。ユルリトシタ春ノ日ヂヤニ。ドウ云フデ花ハ此ヤウニ。サワ〳〵ト心ゼワシウチルコヤラ。

東宮帶刀陣のたちはきのぢんにてさくらの花のちるをよめる　藤原のよしかせ

清

春風と花のあたりをよきてふけ心づからやうつろふと見

意といへるがまされるやうにおぼゆ

○帯刀の陣とは帯刀舎人と云て宿直をし種々の事に仕へまつる武士の集るところなりそれらが集るところを陣といふなり

たきぐち

禁中にて瀧口といひ春宮にては帯刀といひ院にては北面と云みな同じ武士なり

ん

○春風ハ花ノ咲テアルアタリヲヨケテフケ。モシ風ハフカイデモ。花ハジブンノ心カラヒトリデニモ。チルモノカナ。タメシテミヤツニ。

さくらのちるをよめる　凡河内みつね

雪とのみふるだにあるを櫻花いかにちれとか風のふくらん

○サクラ花ハ。ヒトリデニモ。ヒタスラ。雪ノヤウニフルモノヲ。ソレサヘ禁中ニテ瀧口トいひ春宮ニテハ帯刀トいひ院ニテハ北面と云みな同じ武士なり

ひとりにのみ　るを

アルニ。マダコノ上ヘドノヤウニチレト云フデ。風ハフクヿヤラ。

ひねにのぼりてかへりまうできてよめる　つらゆき

山高み見つゝわがこし櫻花風と心にまかすべらなり

○アノ櫻ノアル所ヘ行テ見テ。折リタカツタケレドモ。山ガ高サニエノボライデ。殘念ナガラオレハヨソニ見イ〳〵來タニ。風ハアノ櫻ヲ心マカセニスルデアラウト思ハル。

餘材。山高みの説わろし。

題しらず　一本　大友くろぬし

春雨のふるゝ涙か櫻花ちるをゝしまぬ人しなければ

○櫻ノチルヲ。惜マヌ人ハナケレバ。此ノヤウニ此ノセツ春雨ノフルノハ世間ノ人ノ櫻ヲチシンデ。泣クナミダカイ。

亭子院歌合のうた　つらゆき

櫻花ちりぬる風のなごりには水なき空に涙ぞ立ける

○櫻ノチルヲニ風ガ吹タテ、。其ノ花ガシバラク。中デサワグケシキハ。テウド涙ノタツケシキヂヤ。ソシテ海ベニナゴリト云フガアル其ナゴリハ涙ガタツヂヤカ。花ヲチラシタ此ノ風ノアトノナゴリニハ。水ノアリセヌ空ニサ。涙ガタツタワイ。

ならのみかどの御歌

ふるさとゝなりにしならの都にも色はかはらず花は咲けり

なでりは涙

○なでりは涙ノ邊ニイヽカニシテ涙ノイヽカニシテ何ニモ失ヒタル物ノナハノヿトリテアルヿトニヘリ

○桓武天皇ノ延暦中ニ山城ノ長岡ニ都ヲ遷サレシカバ奈良ハヤガテ

故郷となりにしによりて物みなかはりぬるに花のみ昔のいろにはへりとなり

○詞さはやかに心おかしきいてのぬしの歌なりわかき時より口かろく興ある人なり

○フルイ昔シノ都ニナツテシマウタ。此ノ奈良ノ京ニモヤツパリ色ハ昔シニカハラズ。都デアツタ時ノトホリニ。花ハサイタワイ。

春のうたとてよめる　よしみねのむねさだ

花の色ゝ霞にこめて見せずともかをだにぬすめ春の山風

○花ノ色ヲバ霞ノ中ニコメテオイテ見セズ所。セメテソノ香ヲナリトモ。霞ノ中カラヌスミダシテキテ。コヽヘモニホハセイ。春ノアノ山ノ風ヨコレヤ。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた　素性法師

花の木もいまはは春うゑじ春立ばうつろふ色に人ならひけり

○花ノ咲タ木モ。モウ今カラハ。ホツテ來テウエマイ。春ニナレバ。花ガサイテ早ウ。ウツロウ色ヲ見ナラウテ。人ノ心モウツロヒヤスウナルワ

○花にいたく心をそみたるわまりに云がおもしろし

題しらず　よみ人しらず

春の色の至りいたらぬ里ゝあらじさける咲ざる花のみゆらん

○春ノ色ハドコモカモ。ヒラ一マイナレバ。イキワタツタ里トイキワタラヌ里トノ。ワケヘダテハ。アルマイニ。ドウ云フデ花ハ咲タ所ト。サカヌ所トガアルヿヤラ。

春の歌とてよめる　つらゆき

三輪山をしかもかくすか春霞人にしられぬ花や咲らん

○サテ〳〵三輪山ハキツウ霞ンダヿカナ。コノヤウニマアカスミノ隠スノハ此ノ山ニハ人ニシラサヌ。ナイショウノ花ガアルカシラヌ。

うりんゐんのみこのもとに花見に北山のほとりにまかれりける時によめる　そせい

○萬葉に三輪山をしかもかくすか雲だにも心あらなんかくさふべしやとい歌の一二の句はそのまゝに用ひて雲と霞をとりかへてよめるなり

○上下の間にいかでと云詞こもりて下にらんとうたがふなり

○うりんねんに皇子の住せたまへばよもすがらに御もの奉がたりしらんのてゝろをこめてよめるなり

いざけふは春の山べにまじりなんくれなばなげの花の陰濁かも

○ドレヤケフハ日ノクレルマデモ。此ノ春ノ山ベヲ。カケアルイテアソバウソ。日ガクレタトテモ。花ノ陰ガナサウナカイ。イクラモ花ノカゲガアレバ。モシ暮タナラ。サイハヒヂヤ。花ノカゲニトマラウワサ。なげは。なは。無にて。けい。何げとおはくいふ詞なり。打聞なげの試わろし。くれなばといふにかなはず。

春のうたとてよめる

いつまでか野べに心のあくがれむ花しちらずと千世もへぬべし清

○花ガチラズハ。イツマデコノ野邊ニ心ガウカレテ居ルデアラウ。モシ花ガチラズニアツタラバ。千年デモ此ノ野デタテウヤウニ思ハレル。

題しらず

よみ人しらず

○ありなめハあらめを延べたる詞なり

○過してしは過したりしを約めていへるなり

○素性集六帖又は類聚昭注に一本を一枝と見えたり

春ごとに花のさかりとありなめど逢見んとは命なりけり濁

○花ハノ今年チツテモ。又來年カラ後モ。春ゴトニ盛ハアラウケレド。ソノ盛リニ逢テ見ルヿハ。コチノ命次第ヂヤワイ。ナンボ花ザリガ。毎年アツテモ。命ガナケレヤ。又ト見ルヿハナラヌ。サウ思ヘバアト殘リオホイ花ヂヤ。

花のごと世ガのつねならば過してし昔は又もかへりきなましし濁

○花ハチツテシマウテモ。又春ニナレバ。年々相替ラズ。定マツテ咲ク物ヂヤガ。世ノ中ガ花ノトホリニ定マツテ。カハラヌ物ナラバ。過シテキタ昔シモ。又フタヽビカヘツテクルデアラウニサ。世ノ中ハ過タ昔シガフタヽビカヘルト云ヿハナイ。清

吹風にあつらへつくるものならば此一本とよきよといとまし清

○一本に枝を折てけるなどもありいづれにても聞ゆ

○あだながら花ハしたはしきものにいへり諸木の花なるによりてちぐさと云

○吹テクル風ニタノンデ。イヒツケラルヽ物ナラ。此ノ花一本ハ。ヨケテ吹テクイレトイハウニ。サウイフヿハナラヌモノナレヤ。ドウモ散テモセウヿガナイ。

待人もこぬものもるに鶯のなきつる花をゝりてけるぞ

清

○此花ヲ馳走ニ折テ生テオテ。來タナラバ見セウト思ウテ。待ツ人モ來モセヌニ。アヽ鶯ノオモシロウ鳴テ居タ。アツタラ花ノ枝ヲオレハ折タワイサテモチシイヿチシタコトカナ。待ツ人ガ來ヌクラ居ナラ。折ラ子バヨカツタニ。

こぬものゆゑにハ。來もせざる意なり。

咲花は千種ながらにあだなれど誰かは春を恨てぬる

○ヨニ春サク花ハイロ〳〵アルガ何ンノ花デモ皆アダナ物ナレド。ソレデモ誰レガ春ノ花ハアダナト云テ。トント見カギツタ者ガアルゾ。アダナモノヂヤ〳〵トハ誰モイヒツヽ咲ケバ又ヤツハリ賞翫スルヂヤ。餘材。後の説はわろし。

○たなびく山はかみの霞よりへだてゝつゞくなり

○漸撰萬葉にこの左りに花々數種一時に開芽複從風遠近來とあるをあはせて意あきらかなり

○花に心の入たるよしなりそれをうつろふといふ

春霞色の千種に見えつるはたなびく山の花のかげかも

○霞ノ色ガイロ〳〵ニ見エルノハ。ソノ霞ノタナビイテアル山ノ中ヲ花ノイロガ霞ヘウツヽタノカイノ。

在原元方

かすみ立春の山べは遠けれど吹來る風は花の香ぞする

○霞ノ立ツテアル春ノコロノ山ハ遠ウミエルケレモ。カクベツ遠ウモナイカシテ。吹テクル風ハ花ノニホヒガサスル。

この歌の意。諸説ともにくはしからず。

うつろへる花を見てよめる　みつね

花見れば心にさへぞうつりける色にぞいでじ人もこそしれ

○ウツロウタ花ヲ見レバ。アヽチシヤト思ウ心ガ花ニシミコンデ。コチノ心マデガサ花ノ色ニウツヽタワイ。此ノヤウニ花ノ色ニウツツタ心ヲ。トウゾ顔イロニハダスマイ。人ガ知ラウモシレヌホドニ人ガ知テハ。ア

マリアハウラシイ「ヂヤ。打聞よろし餘材わろし。

題しらず　よみ人しらず

うぐひすの鳴野邊ごとに來て見れば移ふ花に風ぞ吹ける

○鶯ノナク野ヘ來テ見レバドコノ野モ〳〵ウツロウタ花ヲ風ガ吹テチラスワイ。鶯ガ惜シガツテナクハダウリヂヤ。

（千秋云二の句の。でとにといふ詞は下の句へかけて心得べし。來て見ればへはかゝらざるなり）

吹風をなきてうらみよ鶯とわれやは花に手だにふれたる

○鶯ガオレガチカクヘ來テ恨メシサウニ鳴クガ。ソチハ花ノチルガ惜ウテウラミルナラアノ吹テクル風ヲ恨ンデナケサ。オレガアノ花ニチヨツトナリ左手ドモフレタナラコソ。オレヲ恨ミヤウケレ。オレハ手モフレハセヌゾヨ。スレヤコチガ知タ「デハナイワサテ。

典侍洽子朝臣

○うぐひすを吹風の上におきかへて心得べし

散はなの泣にしとゞまる物ならばわれ鶯におとらましやと　清

○散テユク花ガ。惜ンデ泣ノデ。チラズニトマルモノナラ。コチモ鶯ニオトロウカイ。鶯ニオトラヌホド泣ウケレド。ナンボ泣テモ花ハドウモトマラヌワイノ。

仁和の中將のみやすん所の家に歌合せむと「て」しける

藤原後蔭

花のちるとやわびしき春霞たつたの山のうぐひすの聲

○霞ノタツテアルアノ立田山ニ鶯ノナク聲ガスルガ。花ノチルコトガツラウ思ハレテ。アノヤウニ鳴クカイ。

うぐひすのなくをよめる　そせい

こづたへばおのが羽風に散る花をたれにおほせてこゝら鳴らん

○鶯ガアノヤウニ花ノ枝ヲアチラヘコチテヘ。コヅタヘバ。自分ノ羽ノアチチノ風デ花ハチルモノヂ。ソレヲ誰レガ咎ニシテ。アノヤウニ恨メシ

るを歌と相むかへて鶯の鳴をよめるとかきて歌にはちる花をよめる此集の心づかひなりたやすく見過すべからず

○しるしなきはかいなきの意なりならなくにはならぬを延たる言にてにはそへたるのみ

○さて雪とのみてそといへるけしき本末の句ともにすこしの巧なくあるがまゝによみて何となくおもしろき

サウニ。シキリニ鳴クコトヤラ。外ノ物ガチラスカナンジノヤウニマア

（千秋云。こゝらは物の數の多きとなればシキリニといふ譯はわたらざるがとゝくなれども。俗語にていふときハ必ずしきりになくといふ勢なるところなり。すべてこの類多し。なずらへてしるべし）

鶯の花の木にてなくをよめる

みつね

しるしなき音をも鳴かな鶯のとしのみちる花おらなくに

○鶯ノナンノセンモナイ鳴ゴトカナ。今年バカリチル花デハナイイツノ年トテモツヒニ鶯ノナクノデ花ガチラズニアツタト云フハナイニ。

題しらず

よみ人しらず

こまなへていざ見に行んふるさとは雪とのみこそ花と散らめ

○タレカレサソヒアハセテ。馬ヲノリナラベテ。打ツレテ。ドレヤ見ニユカウゾ。此ノセツフル京ハサゾヤ。雪ノフルヤウニサ。ヒタ〳〵ト花ハ

歌也奈良の京の末の人なるべし

○ながめとハ春の長雨せしまに花のうつろひぬと云てそれを思ひわりて長目するにかけたり

○この歌小町のよめる中にてはすぐれたるにわらず百人一首にいで

チルデアラウワイ。

ちる花をなにか恨みん世の中に我身もともにあらむ物とは

○花ノチツテユクヲ。何ンノ恨メシウ。コチカ身トテモ。イツマデモ。此ノ世ニカウシテアラウモノカイ。花ト同ジヤウニオツヽケ死ンデユクモノヂヤ。花バカリヲ早ウチルトテ。恨ミヤウヤウハナイ。

花の色はうつりにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに

一度て　小野小町

○エヱヽ。花ノ色ハアレモウ。ウツロウテ。シマウタワイナウ。一度モ見スニサ。ワシハツレンフテ。居ル男ニツイテ。心苦ナヿガアツテ。何ンノトンチヤクモナカツタ。アヒダニ長雨ガフツタリナドシテ。ツイ花ハアノヤウニマア。

世にふるとは男女のかたらひするをいふ。男女の中らいのことを世とも

たるゆゑにしきりにさ思へるは古歌の心をしらで人のしりに立ていへるなり

世の中といへる多し。此集戀の歌にもこれかれあり。いせ物語に。世でゝろつける。源氏物語に。まだ世をしらぬ。などあるたぐひもこれなり。

仁和の中將のみすやんどころの家に歌合せんとしけるによめる　そせい

をしと思ふ心はいとによられぬん散花ごとにぬきてとゝめん

○散テユク花ヲ。ヲシイト思フ心ハ。ドウゾ糸ニヨラル、物ナラヨイニソシタラ。ソノチル花ヲ一ツ〳〵。ソノ糸デヌイデ。ヲラヌヤウニトメテオカウニ。

しがの山こえに女のおほくあへりけるによみてつかはしける　つらゆき

あづさ弓はるの山べをこえくれば道もさりあへず花ぞ散ける

○(一)春ノコロ山ヲ越テクレバ。ドウモ道モヨケラレヌホド。花ガチツテ

○しがの山越は今の京の東なる北しら河のの瀧の方よりのぼりて如意がたけをこえ近江の志賀へいづる道をいへり

○梓弓はるといはん冠辭

なり已にいへり

○落花に道まどふといふおもしろき懷なり。わかなつまんといふを正月七日の事のみとおもふは後のかたくなし也すべて年の内の雜菜をわかなと云ふなりてのちるてろにはよめるにても心得べし

○端に山寺とかきて歌には寺をいはず花多き山寺にやとりたるけしきなれば後の歌なら猶山寺をもよみ

クルワイ。アノ女等ガサ。

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

春の野に若菜つまんとこし物を散かふはなに道とまどひぬ

○此春ノ野デ若菜ヲツマウト思フテ。來タモノヲ。アチラヘコチラヘチリマガウ花デ。ワカナヲツム所ヘユク道ハマギレテ。フミマヨウテ。ソデモナイ所ヘキタワイヨレヤ。

山寺に詣でたりけるによめる

ある人のいはく。此の詞書なる下のにはよを寫し誤れなるなるべし。

やどりして春の山べにねたる夜と夢のうちにも花ぞちりける

○春花ノチル時分ニ山ニトマツテ。寐タ夜ハソノ花ヲ惜イ〳〵ト思フユエカ。夢ノウチニモサ。花ノチルヲバツカリナミルワイ。

寛平ノ御時きさいの宮の歌合の歌

入る故に色多くてこまやかにいやしくなれるなり

○遍昭花山寺に住れし時なり

○六帖に下句をハひまつはれよとかんまをだにとあるが此僧正の口ぶりなり

吹風と谷の水としなかりせばみ山がくれの花を見ましや　清

○フキチラス風ト。流レテユク谷川ノ水トガ。ナイモノナラバ。ミ山ノオクニカクレテ咲テアル花ヲバ見ヤウモノガイ。見ラレハスマイニスレヤ風ヤ川ノ水モ。花ノタメニメツタニワルイコバカリデモナイモノヂヤ

志賀よりかへりける女どもの花山にいりて藤の花の下に立よりてかへりけるによみておくりける　僧正遍昭

よそに見てかへらん人にふぢの花むひまつとれよ枝はをるとも

○チヨツト立ヨツタバカリデ足モ留メズニ。ヨソニ見テイヌル人ニハヒマツウテイナス藤ノ花ヨ。タトヒ枝ハ折レルトモ。ドウゾハヒマツウテトメヨ。

家に藤の花さけりけるを人の立とまりて見けるを　みつね

よめる

○ふぢなみとは花のなびくをいふそれを涙にとりなすは歌の常なりなびくをなみといふはしのをおし靡(なみ)のるなり

○たちばなの小島が崎は大和のあすかのたちばなの島と云ところなり萬葉にあまたみえたり

○萬葉に山吹はわさつほにはにへる花を見るでとにとよめり山吹はいろにのみにはひて愛るは

我やどに咲るふぢなみ立かへり過がてにのみ人のみるらん

○コチノ庭ニ咲テアル藤ノ花ヲ。アノヤウニ人ガヒツカヘシ〳〵シテドウモ見ステヽイナレヌヤウニ。ヒタスラ見ルガ。ドウ云コヤラ。エイ庭デモナイニ。

題しらず　よみ人しらず

いまもかも咲にほふらむたちばなの小島のさきの山吹の花

○タチバナノ小島ノ崎ノ山吹ノ花ハ。ケフコノゴロカナ。見事ニサイタデアラウ。

初句もは二つともにやすめ辭にて。今かなり。今もといふにはあらず。

春雨にはへる色もわかなくに香さへなつかし山吹のな

○此五山吹ノ花ワイ。春雨ニヌレテ一入マサツタ色モ。ドウモイヘヌニ。色

とのかはあらねど女郎花にも香をよめるでとくこの頃はかくしひたることもはやく出こしなりむかしいしかり質なきことはよまざりしなり

○あやなくさきそは文無勿咲てふ詞なり

バカリデナシニ。香マデガ。雨ニヌレテ別シテ。シホラシウニホウ。

春雨。香の方へもかゝれり。物のにはひハ。しめれば増る物なり。

山吹とあやなく咲そ花見んとうゑけん君がこよひこなくに

○山吹ハワケノタヽヌ物ヂヤ。コンナコトナラサカヌガヨイ。花ガサイタラ見ニ來ウト。思フテ植テオカシヤツタデアラウニ。其御方ガ。コヨヒミエモセヌニ。咲テモ何ンノセンモナイコトヂヤ。咲ククラ非ナラ。其御方ガ見ニミエルヤウニシテ。クレレヤ。ソレデハ。咲タカヒガアツテ。ワケノタツト云モノヂヤニ。

戀の歌なり。

よしの川のほとりに山吹の咲りけるをよめる　つらゆき

吉野川きしの山吹ふく風に庭のかげさへうつろひにけり

○吉野川ノ岸ナ山吹ヲ見レバ。風ガ吹テチルガ。ソノ風デ川ノ水ガ。ウゴ

○萬葉に橘のうた君がいへの花たちばなはなりにけりはなのさかりにわはましものを

○(一)コノ歌ヲ山吹にとりかへしのみされば古歌なれば

しらべはうるはしくゆはしめの二句かなくハづなくの神なびの川のほとりのそのとろの物を冠らせて歌のにはひとせるいにしへの風流なり

クニヨツテ。底ヘウツヽタ影マデガチツタワイ。

題しらず　よみ人しらず　清

蛙なく井手の山吹ちりにけり花の盛にあはまし物を

○(一)コノ井手ノ山吹ガハヤモウ散テシマウタワイ。アヽ殘念ナ「チシタマツト早ウ。花ノサカリノ時分ニ逢フヤウニ來テ見ヤウデ。アツタモノ。

この歌はある人のいはくたちばなのきよとものが歌なり。

春のうたとてよめる　そせい

思ふどち春の山べに打むれてそこともいはぬ旅ねしてしが

○ソンデアソコヘイクト云テ定マツタ旅デハ。ヨソニトマルノハ。ウイ物ヂヤガ。サウイフ定マツタ旅デハナシニ。心ノアフタドウシ。春ノ山ヘツレダツテイテ。一日日ノクレルマデアソンデ。イキガヽリニトマウテミタイモノヂヤ。ソレデハオモシロイ旅樣デアラウ。

打聞。下句の意くいしからず。

春のとく過るをよめる　　みつね

梓弓(あづさゆみ)とる立しより年月のいるがとくもおもほゆるかな

○月の入るとを弓を射るとをかねてはやき心をふくめてよめるがこの集のころもはらの巧みなり

○古歌ニ梓弓春トツヾケテヨンデアルガ。マコトニ月日ガ早ウタツテ。矢ナイルヤウニ思ハルヽ。春ニナツテカラマダナンノマモナイニ。サテモ早ウタツタ(な)カナ。

とし月とよめるは。まことは年の暮の歌なればなるべし。春の暮の歌にては。此詞いかゞにきこゆ。

やよひに鶯のこゑ久しう聞えざりけるをよめる　　つらゆき

鳴とむる花しあければ鶯もはては物うくなりぬべらあり

○物うくは何(なに)となく心憂をもいへど是は物にうみ果たるをいふなり

○ナンボ惜ンデ鳴テモ〳〵。花ハミナ散テシマウテ。鳴タデトマル花ハナケレバ。コレデハセンノナイ(な)ヂヤト思フテ。鶯モシマヒニハ鳴トモナウナツタデ。アラウサウアリソナ(な)ニ思ハレル。ソレデ久シウナカヌヂヤマデ。

餘材わろし。

やよひのつごもりかたに山をこえけるに山川よりこしに花のおちかゝりけるをよめる　　ふかやぶ

濁

此の人は。こゝに始めて出たれば。姓をあぐべき例なるに。姓なきはいかゞ。又打聞に。此名のぶを。みなぼとせるはひがごとなり。

花ちれる水のまに〳〵とめくれば山には春もあくなりにけり

○花ノ散テ流レル川スヂニソウテ。段々ミナカミノ方ヘ尋子テキテミレバ山ニハモウ花ハミナチツテシマウテ。ハヤ春モナイヤウニナツタワイ。

春を〳〵しみてよめる　　もとかた

をしめどもとゞまらなくに春霞かへる道にしたちぬと思へば

○春ヲ惜ムケレドモ。モウショセンドマリハセヌ。春ハモウタツテイヌル

○まに〳〵はまゝをかさねを云てそのものにしたがふなり

道へ旅ダチシタレバ。トマラヌハズヂヤ。

霞は。たつ縁にいへるなり。結句はたゞたちぬればといふ意にて。思ふには意なし。すべて思又いふ詞を。そへていへる例つねに多し。思へばを。春の思ふと見たる説いわろし。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた　　おき風

聲たえず啼(ケイ)や鶯ひと〳〵せにふた〳〵びとだにくべきはるかは

○春ハ一年ノ内ニ。イク度モ來レバ。重疊ノヿヂヤガ。サウハナラズ左。

セメテ二度(タニ)トナリ左來レバヨケレドモ二度トモクル春カイ。タツタ一度ナラヂハ。ナイ春ヂヤニ。クレテユクハサテ〳〵ノコリ多イヿヂヤ。鶯ハメ非アン絶ズ鳴テ恨ミヨヤイ。イカニモ鳴キドコロヂヤ。

やよひのつもごりの日花つみよりかへりける女ともを見てよめる　　みつね

○六帖に歌たてゝなけやうぐひすとわり

○花つみとハ二三月のころ野山にゆきて花をつみて先祖の墓をまつることなり今の京の人ハ四月の山にのぼりて花つみとて草花などをつみもてかへるなり

○端に雨のふりけるなと云て歌にぬれつゝとよみ藤の花をとはしにかけて歌に折つるとのみよめるこの此ふたつを歌のかたに大にぶきたりにはこの集はしら書と歌と相てらしてやうに心得よくしてかきたりはしの詞短くとゝむべき物とゝなしにとかなくもちる花ごとにたぐふ心か

○アノ花ガアマリ惜サニ一本〳〵チッテユク花ゴトニ。コチノ心ガツイテイクワ。アノ女ニ。サテモマア。アホラシイヿカナ。ツイテイタトテ。トメラレウモノデハナイニ。

打聞みなわろし。

やよひのつごもりの日雨のふりけるにふぢの花ををりて人につかはしける　　なりひらの朝臣

ぬれつゝぞしひて折つる年の内に春とゝいくかもあらじと思へば

○此藤ノ花ハ。ドウゾンコモトヘ。御目ニカケウト存ジテ。今日ノコノ雨ニヌレ〳〵。ムリニ折リマシタ。春ハマダイクカモアルデハアルマイ。モウ當年ノ内ニハ。タツタケフ一日ナラデハ春ハナイト存ズユエニサ。

諸説。下句の意を得ず。

てよく味ひをなせり

○後撰六帖にこの歌をおもひてよめる歌多し

○やゝ卯月の來て時鳥のいつかなくとおもへる歌のすがたの高く心ひろきなり

亭子院歌合に春のとての歌　みつね

けふのみと春を思はぬときだにもたつとやすき花のかげかは

○春ヲ。モウ今日バカリデヤトハ思ハヌ時デサヘ。花ノ下ハ。立ツテイヌルノカ何ントモナイガサア。ソレデサヘ花ノ下ハ。立チサリトモナイニ。マシテクヲギリノ春デヤモノ。

○夏　歌

題しらず　よみ人しらず

我やどの池の藤なみ咲にけり山時鳥いつかきなかむ

○コチノ庭ノ池ノ邊ナ藤ノ花カ咲タワイ。郭公ハイツ來テナクデアラウ。

此歌ある人のいはくかきのもとの人まろがなり。

うづきにさける櫻を見てよめる　紀とし貞

あはれてふことをあまたにやらじとや春におくれてひとり咲らん

○今月ニナツテ。櫻花ノアルハメヅラシイワデヤ。コレハナンデモ見ル人カアヽハレ見ゴトナ。アヽハレ見事ナト云フ其調ヲ。方々ノ櫻ヘ分テヤルマイ。己ヒトリガサウイハレウト思フテ。ワザト春ヨリ後ニオソウヒトリ。咲タアラウカ。

（千秋云結句にさくらをかくしてよみたるなり）

題しらず　よみ人しらず

さ月まつ山時鳥うちむぶき今も鳴なむこぞのふるこゑ

○郭公ハ五月ヲ待テ鳴クデヤカ。マダ五月ニハナラヌ子ドモ。去年ノ殘リノフル聲ヲ出シテ。ドウソ今モナケカシ。

（千秋云。うちはぶきは。萬葉に打羽振と書て。羽をふるを云。この譯なきはなきがよろしきなるべし）

○こゝのわはれはめづるにいへり

○時鳥いもはら五月になればさ月まつと云てこれは卯月によめるなり

伊勢

五月こば鳴もふりなん郭公まだしきほどのこゑをきかばや

○時鳥ハ五月ニナツタナラバ。モウ澤山ニナツテ。メヅラシウナイデモアラウ。ドウゾマダソノ時節ニナラヌウチノ聲ヲ聞タイモノヂヤ。

よみ人しらず

さつき待花橘の香をかげば昔の人の袖のかぞする

○五月ニサク橘ノ花ノニホヒヲカゲバ。マヘカタノナジミノ人ノ袖ノ香ガサスル。

いつのまに五月きぬらん足引の山ほとゝぎす今ぞ鳴なる

○イツノマニ五月ニナツタヤラ。ヒゴロマチニ待ツタ時鳥ガ。今始メテサナクワアレ。

けさきなきいまだ旅なる時鳥花たちばなに宿とからなん

○ケサ始メテ來テ。マダエ住ツカズニ旅ガケテ居テ鳴ク時鳥ヨ。定メテ宿

たちばなも五月に咲もの なれば さ月待つといへりはたが袖ふれてはしやとの梅ぞなつかしき

○たちばなも五月ニ咲モノナレバ。サ月待ツトイヘリ。ハタガ袖ノフレテハシヤトノ梅ゾナツカシキ。ソノ香ヲカグトヨメルノハ。ソノ人ノ袖ノ香ヲ思ヒイデテ。ソノ人ノ面影ヲ思ヒヤルノヲ。ソノ人ノ面影ヲ思ヒヤルノヲ。

み田道間守が故事漢の事まで引いでいへるはみな古歌をしらぬ人の心なり

○素性集に鳴こゑきけばとあれば右のはし詞にわはせてはつこゑなることを聞せたるものなるべし此集はしも歌の意を扶くる例なり

チトルデアラウガ。ロチノ庭ノ橘ニ宿ナバカレカシ。ソシタラ存分ニ聞ウニ。

おとは山をこゆける時にほとゝぎすのなくを聞て

紀友則

よめる

音羽山けさこえくれば時鳥梢はるかに今ぞなくなる

○音羽山ヲケサ越テクレバ。時鳥ガアノハルカナ梢デ。アレ今始メテサナクワ。

音羽山といへるにはとゝぎすの聲の意はなし。

ほとゝぎすのこじめて鳴けるをよめる

そせい

時鳥はつ聲きけばあぢきなくぬし定まらぬ戀せらるはた

○時鳥ノ始メテ鳴聲ヲキケバ。オモシロウハアレドモ又サ何トナウカンジヤウガオコツテ無益ナ。其人ト定マツタ一モナイ。戀コヽチガスル。

すべてはたは又なり。此の歌なるは。三の句の頭にうつして聞べし。お

もしろけれども又の意なり。

ならのいそのかみ寺にて郭公のなくをよめる

いそのかみふるき都の時鳥こゑばかりこそむかしなりけれ

○此ノ石ノ上ノアタリハ昔ノ奈良ノ都ヂヤガ。今ハモウ何モカモ昔シトハ變ツテシマウタニ。郭公ノ聲バカリガサ。カハラズニ昔ノトホリヂヤワイ。

詞書なる石の上寺は。山邊の郡石上にあるを。奈良といへる事は。今の京にては。石上のあたり迄をもひろく奈良といひならへるなり。たとへば今の世に。丹波の國なる愛宕山をも。他國にては。京の愛宕といふ類なり。打聞の説ひがとなり。

題しらず　よみ人しらず

夏山に鳴ほとゝぎす心あらば物思ふわれに聲なきかせそ

○アノ山デナク時鳥ヨ心ガアルナラ。此ノヤウニ物思ヒヲシテ居ルワシニ

キカシテクレナイ。

ほとゝぎす啼聲きけば別にし故郷さへぞ戀しかりける

○ホトトギスノナク聲ヲキケバ。感情ガオコツテ。ハナレテキタマヘカタノ在所ノコマデガサナツカシウ思ハレルワイ。

時鳥ながなく里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから

○ホトトギスヨ。ソチハナク里ガアソコニモコヽニモアマタアツテ。コノバカリデ鳴カヌニヨツテ。貴殿ニ思ヒハスレドモ。ソレデモウトヽシウ思ハレル。

思ひいづるときはの山の時鳥からくれなゐのふり出てぞ啼

○戀シイ人ヲ思ヒダシタ時ニハ（の山の）（三）（四）聲ヲアゲテサ。ワシヤナクワイ。

四の句は。たゞふり出の序のみにて。戀二に。紅のふり出つゝなくとある

○荊楚歳時記に杜鵑初鳴先聞者主別離といひて客中に多くよめり

○なかなくは汝が鳴なり、なはいにしへは未てふ意なる詞なり後のいよ〳〵に用ひたるはいにしへにかつてなし

○人のなく時はなみだのいづるをもてうぐひすなどにもなみだといひ又泪はみえずともいへり

○何事になくかくよめるは

は。異なれり。さてこの歌は。もはら戀の歌なるを。こゝに入れるはいかにぞや。

聲はして涙も見えぬ時鳥わが衣手のひづをからなむ　濁

○時鳥ハナク聲ハシテ。涙ハ見エヌガ。涙ガナクハ。オレガ袖ガヒツタリトヌレテアルカ。借シテヤラウホドニ。コレランチガ泣涙ニカツタガヨイ。清

あし引の山ほとゝぎすをりむへて誰かまさるとねをのみぞなく

○オレハイツシユク泣テバツリ居ルガ。アノ時鳥モオンナジヤウニ。間タモナシニ鳴テオレド。誰レガ。勝ゾサアナキクラベチセウトテ。ヒタスラナクワイ。

をりはへは。時延にて。時長くつゞくをいふ詞なり。をりはへて鳴クハ。時長く。わひだもなしになくをなり。

今さらに山へかへるな時鳥こゑのかぎりはわが宿になけ

一すぢにその物に思入たる心なり古歌はこの意を思ひて見るべし

○これを死出の山へ言づてせんといふ說はうたのおもてにて見えぬわだし言なり

○さみだれてふことばを乱ふこゝに思ひよるせたりとみゆ六帖にさみだれにしわだれなれバとよめるがあれとよてゝの歌はしからず

○山カラ出テ來テ。モウ里ナレタコトデヤニ。今サラ山ヘカヘルナヨ時鳥。聲ノアリタケハ。シマイマデ。コチノ庭デナケ。

やよやまて山時鳥とづてんわれ世の中にすみわびぬとよみくにのまち

○山ヘカヘル時鳥。ヤイノウ。チヨツト待テタモ。コトヅテナセウワシハモウ世ノ中ニ住ミアグンダワイノ。ソレデ退付ワシモ山ヘコモラウト思フホドニ。サウ云フテタモ。

寛平ノ御時きさいの宮の歌合のうた　紀ノ友則

さみだれに物思ひをればほとゝぎす夜ふかく鳴ていづち行らん

○五月雨ガフリツヾイテ。イヨ〳〵夜モ。モヤクヤト物思ヒヲシ居レバ。時鳥ガ鳴ティクガ。夜モフケタニ。ドチラヘイクヤラ。オレモ此ノヤウデハ。ドチヘナリトモイキタイ。

○たち花を時鳥の宿とよめるは萬葉より見ゆ梅を鶯の宿といひ萩を鹿の妻といふ類にて時の物もていひなすのみ

夜やくらき道やまどへる時鳥。我やどをしも過がてになく

○夜ルデクライニヨツテ。ドチヘモイカヌノカ。又ハ道ニマヨウタノカホトトギスガ。所モ多イニ。コチノ庭デバツカリ。ドウモ過テイナレヌヤウニデツト鳴テ井ル。

大江ノ千里

やどりせし花橘もかれなくになどはとゝぎすこゑたえぬらん

○宿カツテ居タ橘モマダカレモセヌニ。時鳥ハナゼニヨソヘインデ聲モセヌヤウニナツタヤラ。

きのつらゆき

夏の夜はふすかとすればほとゝぎす鳴一こゑにあくるしの〳〵め

○子ルカト思ヘバ。時鳥ノナク聲デ。ハヤモウ明方ニナツタ。サテ〳〵短

もさゝやかなるも過ていひなすは古歌のあやなり

○あかすにあかずをかねたり源氏さかきの卷にかんの君曉かたの歌に心かからかたゝ袖をぬらすかなあくるとをしふるゝ聲とつけてもこの意にも外にもさるる意なる歌多し

○新撰萬葉にこの歌の右に一夏山中鶯ニ耳根ニ郭公高

イ夜カナ。(下句又ハ)ホトトギスノナイタ一聲デ目ガサメタガハヤモウ夜ガアケル。

しの〳〵めを打聞の如く。朝の目とする時ハ後の辭なり。

餘材しの〳〵めの説わろし。

(千秋云初句のもしはがの意にて結句のわくるへつゞく詞なり)

みぶのたゞみね

くる〳〵かと見れば明ぬる夏の夜をあかずとやなく山時鳥

○日ガタレルカト思ヘバ。ハヤアケタ此夏ノ夜ヲ。アマリ短サニノコリ多ウ思フテ。郭公ハアノヤウニナクカヤ。

紀ノ秋峯

夏山に戀しき人や入にけんこゑふり立てなくほとゝぎす

○コノ山ヘ時鳥ノ戀シウ思フ人ガコモツタカシラヌ。ソヂヤヤラ。聲ヲアゲテナク。

餘材わろし。打聞よろし。

響入二禪門一とあり

○とゞろハ今もゞろ〳〵と鳴といふに同しくそれを清みていふは古言なり

○夜たゞは夜たゞ直にて夜をひたすらといふなりよもすがらといふに同し心なり

題しらず　よみ人しらず

こゞの夏鳴ふるしてし時鳥それかあらぬか聲のかはらぬ

○去年ノ夏タクサンニタエズナイテ。ヨウ聞知テ居ル時鳥ガ。今又ナクアレハ去年ナイタソノ時鳥歟。サウデハナイカ。聲ガオナジコヂヤガ。

時鳥のおくを聞てよめる　つらゆき

五月雨の空もとゞろに時鳥なにをうしとかよたゞ鳴らん

○時鳥ガ五月雨ノ空モドンドン。ヨヒトヨヒタスラ鳴クガ。何事ヲウイト思フテアノヤウニナクコヤラ。

さふらひにてをのこ共のさけたうべけるにめして時鳥まつ歌よめとありければよめる　みつね

時鳥こゑも聞えず山びことはかに鳴音をこたへやはせぬ

○時鳥ガナクカ〳〵トマデモ聲モ聞エヌガ。ヨソデ鳴ク聲アリ左コヽヘヒヾイテ。聞エレバヨイニ。山彦ハナセニコヽヘヒヾカサヌゾイ。

○人まつ山を名所と云はわろしたゞ松の生る山に人まつと云ひかけたるなり

○むかしへは力といふ意にていにしへ行へなとに同し且此へは濁りていひがたきにと所は元のでとくとなふるなり

山にはとゝぎすの鳴けるをきゝてよめる　つらゆき

時鳥人まつ山になくなれば我うちつけに戀まさりけり

○人ガ來モセウカト待テ居ル此ノ松山ニ。アノヤウニ時鳥ガナケバ。今マデサホドニモ思ハナンダカ。ニハカニコヽモ人ヲ待ツ心ガマサツタワイ

はやくすみけるところにてほとゝぎすのなきけるを聞てよめる　たゞみね

むかしへや今も戀しき時鳥ふるさとにしも鳴てきつらん

○時鳥ヨ。ソチモオレト同ジヤウニ。昔カ今デモ戀シイカ。所モ多イニ此本ト在所ヘ鳴テ來タノハ昔カ戀シイヤラ。

（千秋云。今もは。なれもとあらまほしくおぼゆ）

時鳥の鳴けるをきゝてよめる　みつね

ほとゝぎす我とはなしに卯の花のうきよの中に鳴渡るら

にをわれもとはなしにと云はわろしわれならでといふとゝ心得べし

○うの花はうき世といはんか冠辞に時のものを用て歌のにはひとするなり

○法花經の涌出品の文に不染二世間法一如二蓮水在一レ水てれをもてよめり

○白氏文集に荷露難レ圓豈是珠

ん

○世ノ中チウイ物ニ思フテ泣テクラスモノハオレデヤガ。時鳥ハ其オレデハナシニ。ドウイフ「デ。世ノ中ガウイト云テ。卯ノ花ノアタリヘキテ。アノヤウニオレト同ジヤウニ。鳴テクラス「ヤラ。

蓮の露を見てよめる　僧正遍昭

もちす葉の濁りにしまぬ心もてなにかゝ露を玉とあざむく

○蓮ハ世ノ中ノ濁リニソマヌ。譬ヘニ御經ニトイテアルガ。サウ云フ清淨ナ心デ。ナゼニアノヤウニ葉ノ露ヲ玉ト見セテ。人ヲバダマスコトゾイ

月のおもしろかりけるよあかつきがたによめる　ふかやぶ

夏の夜はまだ宵ながら明ぬるを雲のいづこに月やどるらん

○アトヨイ月デアツタニ。夏ノ夜ノ短イ「ハ。マダヨヒノマトデ。フケル間モナシニハヤ明タモノ。コノ夜ノ短サデハ。月ハ西ノ方ノ山マデイキツク間ハアルマイガ。アノ曉ノ雲ノ。ドコラニトマツタ「ヤラ。

隣より床夏の花をこひおこせたりければ惜て此歌をよみつかはしける　みつね

塵をだにすゑじとぞ思ふ咲しより妹とわがぬる床なつの花

○手前ノトコナツハ。カトワシガ二人寝マス床夏デ大事ノデゴサル花ガサイテカラ。塵サヘカケマイトサ。存ズルホド大事ノデゴサル折テハエシンジマスマイ。

（千秋云。此の歌上句。三二と句を次第して見るべし）

みな月のつごもりの日よめる

夏と秋と行かふ空の通ひぢとかたへ涼しき風やふくらん

○今晩グレテ。ユク夏ト來ル秋ト。イキナガウ空ノ通リ道ハソノ夏ノ通ツテユク片一方ハマダ暑ウテ。秋ノトホツテクル片一方ハ。スヤシイ風ガ

○床はは（ら）はねばちりはつもるを友寐するにはいさゝかのちりをもおかじの心をいへりおくてといふなり

○行かふはゆきかへりなり萬葉に往反とかけり

フクデアラウカイ。

○歌の意詞よくとゝのひてあきらかなりかくてとひろく打しづまりてよむこゝろのかたきなり

○さやかは日本紀に亮の字をよみて見るものにもきくものにも清くわざやかなるをいへり

○秋歌の上

秋たつ日よめる　　藤原敏行朝臣

あき〳〵ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

○秋ガキタトイフテ。ソレトハツキリト目ニ見エヌケレド。ケフハ風ノ音カ。ニハカニカハツタデサコレハ秋ガキタワトビックリシタ。

秋立日うへのをのこどもかもの川原に川せうえうしけるともにまかりてよめる　　つらゆき

河風のすゞしくもあるか打よする涙とともにや秋と立らん

○こはめづらしき秋のはつ風といふにて上は序によめるなり

○さなへはわさなへの上略といふ説もあれどわさだを蒔葉に早田とかけりさわらびなども和名抄に出たる同類なり

○川風ガサテモマア。涼イコトカナ。涙モ立ツト云フナリ秋ノ來ルノモ立ツトイヘバ。此ノ岸ヘウチヨセル涙トイツショニ。秋ガタツタカシラヌ。

題しらず　　よみ人しらず

わがせこが衣のすそを吹かへしうらめづらしき秋の初風

○(上)コレハ〳〵メヅラシイ秋風ヂヤ。サテモ涼シイ。コヽロヨイ。

餘材に。わがせこは。女をさせりといへるは。いみじきひがことなり。これは女の歌なるべし。又歌林良材集に引れたるたるには。わぎもこがとあり。新古今集有家卿「さらでだに恨みんと思ふわぎもこが衣のすそに秋風ぞふく。これらによれば。清わぎもことある本も有しなるべし。

きのふまでさなへとりしかいつのまに稲葉そよぎて秋風の吹

○マダ昨日コソハ田ヲウエタレ。ソレニマア。イツノマニ此ノヤウニ稲ノ葉ガソヨ〳〵トシテ。秋風ノ吹クヤウニハナツタコソ。

秋風の吹にし日より久かたの天の川原にたゝぬ日はなし

○いにしへは織女の心になりてよむなり後世は思ひやりてよむ故心おとれり

○いにしへのかぢと云ハ今櫓のことなりそのかぢといふものはなかりしとみゆ

○たなはたづめは萬葉に織女の二字をよみてたなはたハ機の事なりつは助字

○ワシハ秋風ノ吹キソメタ日カラ。毎日〳〵此ノヤウニ。コノ天ノ川ノ川原ヘ出テ立テ。君ヲマタヌ日ハ一日モナイ。

（千秋云。この歌なども。たなばたつめになりてよめるなり七夕の歌此類多し）

久かたの天の川原の渡し守君わたりなばかぢかくしてよ

○天ノ川ノ渡シ守リヨ。君ガコチラヘ御渡リナサツタナラ。ヂキニソノ船ノ梓ヲシレヌさウニ。カクシテオイテクレイ。ソシテ川ヲ渡ツテ御カヘリナサルヿガナルマイニヨツテ。イツデモコチニ御逗留デアラウニ。清

天の川もみぢを橋に渡せばやたなばたつめの秋をしも待

○天ノ川ノ橋ニ紅葉ヲ渡スユエカシテ。時節モ多イニ。棚機サマガ。秋ヲ御待ナサル。

こひ〳〵て逢夜はこよひ天の川霧たちわたり明ずもあらなん

○一年ノアヒダ長ノ月日ヲ戀々テ。タツタ一度彦星ト棚機ト御逢ナサル夜ハコヨヒデヤ。ドウゾ天ノ川ヘ霧ガ一チメンニ立ツテ開ウナツテ。イツマデモ。夜ガアケテモヨイ。

寛平の御時なぬかのようへにさふらふをのこどもに歌奉れと仰せられける時人にかはりてよめる　とものり

わたまの川淺瀬しら浪たどりつゝ渡りもてゆけば明ぞしにける

○此天ノ川ノ淺瀬ノ所ヲシラヌ故ニオボツカナウテ。水ノナカヲアチヤコチヤトシテヒマドツテマタ渡ツテシマイモセヌウチニサ。ハヤ夜ガアケタワイ。

（千秋云。四の句。ねばは。ぬにの意なり）

同御時ささいの宮の歌合の歌　ふぢはらのおきかせ

契りけん心ぞつらき柵機の年にひとたびあふはあふかは

○あさ瀬しらなみは淺瀬をしらずとかけたり果ねば渡りは後世にはわたりはてぬにと云に似たりこゝはわたりはてさればともわたりはてぬにとも心得べし

○今夜手向るものをかすといふハいつよりのことにかこの萬葉に人に衣をかしたる事もかりたるをそれらの多きをよりうつしいふにやふにの荊楚歳時記に見えたり織女祭の時唐詩にも家々此夜持ニ針線一

○一年ニタツタ一度ヅヽト。約束シテオイタ棚機ノ心ガキコユヌ一年ニタツタ一度グラヰアウ、アウノガアウノカソレヤ逢ト云フモノデハナイ。

七日の日の夜よめる　凡河内躬恒

年ごとにあふとしすれど棚機のぬる夜の數ぞすくなかりける

○棚機ハ毎年逢ツシヤリハスレドモ。一年ニタツタ一度ヅヽナレバ。逢ツシヤル夜ノ數ハスクナイコトデヤワイ。

棚機にかしつる糸の打しへて年のを長くこひやわたらん

○タナバタ祭リニコヨヒ手向テオ借シ申シタ糸ノヤウニ長ウ引ノビテコレカラモ年久ウ此ノヤウニ戀シウ思フテ月日ヲタテヽルコトデアラウカ。

是は七夕によめるおのが戀の歌なり。

題しらず　そせい

こよひこむ人にはあはじたなばたの久しき程に待もこそすれ

○今夜クル人ニハアウマイ。今夜ハ七夕デヤニヨツテ。棚機ノ久シイ一年ノ間タヲ待ツノニアヤカツテ。コチモ久シウ待ツヤウナ中ニナルコトモアラウホドニ。

七日の夜の曉によめる　源むねゆきの朝臣

今こそとてわかるゝ時は天の川渡らぬさきにそでぞひちぬる

○サアモウト云テ別レルトキニハ。マダ天ノ川ヲ渡リモセヌサキニ此ノヤウニ袖ガヒツタリト涙デサヌレタ。

やうかの日よめる　みぶのたゞみね

けふよりと今こんとしの昨日をぞいつしかとのみ待渡るべき

○タナバタ樣ハサゾ。今日カラシテハ。又今カラ來年ノ七月七日ノ昨日ヲサイツカ〳〵トヒタスラ待テ。月日ヲタテサツシヤルデアラウト。思ハレル。

題しらず　よみ人しらず

○大かたい凡すべてなどに云に同しくひろく云詞なるをこそと云物一つをとり出てせばき詞に合せたるにてこの歌の意をあらむべし

○詩に秋風を朝來入二庭樹一孤客最先聞

このまよりもりくる月の影見れば心づくしの秋は來にけり

○木ノ枝ノ間カラモツテクル月ノ影ヲミレバ。廣ウ見ルトハチガウテ。スコシヅヽホカ見エテ。サテ〳〵シンキナ物ヂヤ。是ヲミレバ。今カラ總體モノゴトシンキナ秋ガキタワイ。

大かたの秋くるからにわが身こそかなしきものと思ひしりぬれ

○世間一同ノ秋ガキタカラシテ。人ハコノヤウニハナイサリナニガレヒトリガヤ秋ハカナシイ物ヂヤト思ヒシワタ。秋ハオレ獨ノ秋デハナイ世間一同ノ秋ヂヤニ。

我ためにくる秋にしもあらなくに虫の音さけばまづぞかなしき

○オレニ悲シウ思ハサウタメニ來ル秋デモナイニ。虫ノ聲ヲキケバ人ヨリサキヘ。マヅ一番ガケニサ。オレハカナシイ。

○よひとは初更をもいひ又一夜の間のことをも云なの歌もひろく秋來る夜と心得べし

○このの歌宗于の集に入たりおゝはゐのおちたるにや

物ごとに秋ぞかなしきもみちつゝうつろひゆくを限りとおもへば

○草木ノダン〳〵。カハツテ散テイクノハ草木ノシマイニナルノヂヤガオツヽケサウ物ノシマイニナル時節ノバシメヂヤト思ヘバ。總體ノ物ナニツケテモ秋ハサ悲シイ。打聞よろし。餘材わろし。

ひとりぬるとこゝ草葉にあらねども秋くるよひゝ露けかりけり

○草ノ葉コソ秋ハ露デヌレルモノナレ。ワシガヒトリ子ル床ハクサノ葉デハナケレドモ。秋ニナレバ夜ルハ此ヤウニ涙デ露ノヤウニヌレルワイ。

これさだのみこの家の歌合のうた

いつとても時はわかねど秋のよぞ物思ふことのかぎりなりける

○イツハ物思ハヌトキヂヤト云フ時節ノ差別ハナシニイツデモ物思ヒハアル

○かむなりのつぼは宮中五舎の中弘芳舎と云有それを神鳴の壺といふ

○をしと思ふは惜むとのみにはあらで愛ゆるをもいにしへをしといへり卽萬葉集に愛の字をもをしとよめりさゝの意も夜のあけ行によめるとも書ねず惜の字に心得てはかなはぬなり

○題昭本に影さへみゆるとあり新撰萬葉にも影さへとあり左の詩に秋矢飛翔雁影見とあり

○白氏文集に飛子樓中霜月夜秋來唯爲一人長とあるを千里は儒士なれはおもはぬなり

ルケレドソノウチニテ秋ノ夜ガサ。イツチ物思ヒスル項上デヤワイ。

かむなりのつぼに人々あつまりて秋の夜をしむ歌

よみけるついでによめる　みつね

つぼは。御坪の内にて。梅壺藤壺などいふハ。その御坪の内にある木草をもてそこの舍の異名にしたる物なり。かむなりのつぼも雷の落ちたるとゐりしより。異名になれるなり。壺の字ハ宮中ノ衛詔ニ之壺ニとあるれなり。器の壺とハ別なり。まがふことなかれ。

かくばかりをしと思ふ夜をいたづらにねてあかすらん人さへぞうき

○コレホドニ面白イ。アツタラ秋ノ月夜ヲ。嫌テシマウテ。ムザムザト明ス人モアラウカ。サウシタ人マデガサ。キコエヌヿデヤト思ハレル。

除材いたづらの說わろし。いたづらにねては。ねていたづらにと心得べし、

題しらず　よみ人しらず

白雲にはね打かはしとぶ雁の數さへ見もる秋のよの月

○サテモサヤカナ月カナ。雲ヘトヾクホド高イソラヲツレダツテ。トンデユク雁ノ數マデガヨウ見エル。

（千秋云。はねうちかはしは。いくつもつらなりて。雁と雁と羽をならべかはして飛わたるをいへり。しら雲とうちかはすにはあらず）

さよ中と夜はふけぬらじ雁がねの聞もる空に月わたるみゆ

○夜ハイカウフケタ。モウトンド夜半ニナツタサウナ。見レバ雁ノ鳴聲ノキコユルズツトソラノ方ヘ。モウ月ガマハツタ。

是貞みこの家の歌合によめる　大江ノ千里

月見ればちゞに物こそ悲しけれ我身ひとつの秋にはあらねど

○月ヲ見レバオレハイロ〳〵ト物ガサ。悲シイワイ。オレヒトリノ秋デハ

ひよりてよめ
とにや

○今の本に秋はなはとあれど古本又忠岑集に秋くれば とあるを用うといかにとなれば ばいにしへ猶詞にはなしまだ用ゐて云意にのみ其なをに歌はなしの猶詞の後の詞つかひなり

ナケレド。

清

たゝみね

人かたの月のかつらも秋はあは紅葉すればや照まさるらん

○月ノ中ナ桂ハコノ國土ノ木ノヤウニ秋ヂヤト云テモ。紅葉スルナド云フハアリソモナイモノヂヤニ。ソレモヤツハリ。秋ハモミヂスルカシテ。イツモヨリハ光リガテリマサッタ。紅葉シタニヨッテ此ヤウニ照リマサルデアラウ。

打聞わろし。

月をよめる

在原ノ元方

濁

秋の夜の月の光りしわかければくらぶの山も越ぬべらなり

○此ヤウニ月ノ光リノアカイ秋ノ夜ハ。ナンボ闇イクラノ山デモ。越ラレウト思ハレル。

○この歌の意はおうろぎなりおのころはやくきりぎりすとひとつものにわやまりてよめり

○おのきりぎりすもおうろぎなり

人のもとにまかりける夜きりぐすのなきけるをよめる　ふぢはらのたゝふさ

きりぐすいたくな鳴そ秋のよの長き思ひと我ぞまされる

○コレ御亭主貴様ハ。心苦ガオホウテ。イロ〳〵ノコトヲ思フテ夜ノ長イヲ明シカネルトイハシヤルガ。御亭主アノキリギリスト同ジヨウニアマリ泣カシヤルナイ。心苦ガ多ウテ秋ノ夜ノ長イノガメイワクナコトハ。貴様ヨリ。拙者ハサナホノコトヂヤワイ。

餘材打聞ともにわろし。

是貞みこの家の歌合のうた

としゆきの朝臣

秋のよのあくるもしらず鳴虫はわがごと物やかなしかるらん

○此長イ秋ノ夜ノアケルモシラズニアノヤウニナク虫ハ。オレガヤウニア

レモ物ガ悲シイカシラヌ。

題しらず　よみ人しらず

秋萩も色つきぬればきりぐすわれぬとやよるとかなしき

○萩ノ葉モ色ヅイテンロ〳〵枯カケテクル時節ニナツタレバ物ガナシウテ夜ルモ子ラレヌニ。アノ蓋モ同ジヤウニ夜ルナクハ。ソチモオレガヤリニ物ガカナシイカ。

秋のよは露こそとに寒からし草むらとに虫のわぶれば

○クサムラゴトニアノヤウニ虫ガ離儀ガッテナクノチキケバ。秋ノ夜ハ露ガサカクベッニ寒イサウナ。

君しのぶ卿にやつるゝふるさとはまつ虫の音ぞかなしかりける

○人ガ見ステヽヨリツカイデドコモカモキツウアレテ。軒ナドヘハシノブガハエテ見苦シウナッテ。其ノ人ヲ戀シタフテ居家テハ庭デナク松虫ノ

わぶるは心ぶるとも云に同じく物おもひにうみわたるこなり

しのぶはしたふの古言なり

聲ガサ。人ヲ待ト云名ユエカ。一入ガナシウ聞エルワイ。

秋の野に道もまどひぬまつ虫の聲する方にやどやからまし

○此秋ノ野デ。モウ日モクレニ及ブ道モフミマヨウタホドニ。アノ人ヲ待ット云名ノ松虫ノ聲ノスル方ヘイテ。宿ヲカッタモノデアラウカイ。

わきの野に人まつ虫のこゑすなり我かと行ていざとふらはん

○此ノ秋ノ野ニアレ人ヲマット云名ノ松虫ノコエガスルワ。ソチヤオレヲマッノカト云テ。ドレヤ行テオミマヒ申サウ。

もみぢ葉の散て積れる我宿ゝ誰をまつ虫こゝら鳴らん

○モミヂガ散テツモッテ。誰モフミ分テ來タ人モナイ「チノ庭デ。タレヲ待ットテアノヤウニ松虫ハシキリニ鳴コトヤラ。タレモ來ル人ハアルマイニ。打聞よろし餘材わろし。

訪らはんはとはんなり

○日ぐらしは秋のはじめより鳴小蟬なり日をさふる木暗になく故に日ぐらしとは名つけつらん

○から國に蘇武といへる人胡國に年久しくとらはれて雁に文をつけて京へおせしことよりあまたに雁を遠つ人のつかひといへり

○これも右の古事によりて雁か玉ずさをといへり

○稲負鳥はいたく知がたきことにてさまざまと論せしを見るに或鷸なり田夫なりなどいふは此歌をよくも心得ずなべてふ詞をもしらぬひがごとにて皆云に足ず庭たゝきのごゝ云ひあたれり

ひぐらしの鳴つるあべに日はくれぬと思ふは山の陰にぞ有ける　　觸

○ヒグラシガ鳴イタニツレテ日ハクレタト思フタハ。サウデハナカツタ山ノカゲデサ。闇イノデアツタワイ。

（千秋云なべには並にてあれとかれとならふときにいふ言なりつねに云々並に云々といふもあれにちかし）

日ぐらしの鳴山里の夕ぐれは風より外にとふ人もなし

○ヒグラシノナク此山里ハタグレニハ風ヨリ外ニハ一向ニ尋テクル人モナイプヽサビシイコトヂヤ。

はつかりをよめる　　在原ノ元方

まつ人にあらぬ物からはつ雁のけさ鳴聲のめづらしきかな

○待人ガキタカナンゾノヤウニ。ケサ始メテ雁ノ鳴ク聲ガサテモメヅラシウ思ヘレルコトカナコチガ待テ居ル人デハナイヂヤケレド。

是貞のみこの家の歌合のうた　　ともより

秋風にはつ雁がねぞ聞ゆなる誰玉づさをかけてきつらん

○秋風ノ吹ク空ニアレ始メテ雁ノ聲ガサスル。雁ハ遠方カラノ狀ヲクビヘ掛テ來ルト云フヂヤガアノ鳴雁ハドコカラタガ狀ヲカケテ井タフヂヤヤラ。

題しらず　　よみ人しらず

わがかどに稲負鳥の鳴なべにけさ吹風に雁はきにけり

○コチノカドデ稲負鳥ガナクニツレテ。ケサノ風ニ雁ガキタワイ。

いとはやも鳴ぬる雁かしら露の色ぞる木々ももみぢあへなくに

○キツウ早ウマア雁ハナイタフカナ。露ノ色ドル木ドモモマダロクニモミヂモセヌウチニ。

春霞かすみていにしかりがねは今ぞ鳴なる秋霧のうへに

○歌の意は夜寒に雁の鳴くとのみなり

○古往に柿本の人まろのなりと云は例のとらず

○雁のわたるを舟と見なすをとくゆゑ聞ゆでと文粋に雁榜來とも云れは聲を櫓をおす音と聞なして聲を帆に揚てくる舟はといへるなり

○寒霞ノ中ヘカスミニ見エテインダ雁カ。ソノ時ノ霞ト同ジヤウニ秋ノ霧ノウヘノカデ。アレ今又ナクワ。

夜を寒み衣雁かねなくなべに萩の下葉もうつろひにけり

○夜ガ寒サニ衣ヲカルト云名ノ雁ノ鳴クニツレテ。萩ノ下葉モツロウタワイ。

此歌はある人のいはくかきのもとの人まろがなりと

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　藤原菅根朝臣

秋風に聲をほにあげてくる船もわまのと渡る雁にぞ有ける

○アレ〳〵アノ青イ海ノヤウナソラヲ。秋風ニ聲ヲ高ウ帆ノヤウニアゲテ船ノヤウニ見エテ來ルモノハ。鳴テワタル雁デヤワイ。

かりの鳴けるを聞てよめる　みつね

うきことを思つらねて雁がねのなきこそ渡れ秋のよなよな

○萬葉に山ちかく家やをるべきさを鹿の妻をきゝつゝいねがてぬかも

○雁ノイクツモツラナツテ鳴テワタルヤウニオレハ秋ノ夜ノウイフノ數々ヲオモヒツヾケテ。毎夜〳〵泣テサアカスワイ。

是貞ノみこの家の歌合のうた　忠岑

山里は秋こそとにわびしけれしかの鳴音に目をさましつゝ

○山里ハイツデモト云フウチニ。秋ガサ。別シテツラウナンギニ思ハレルワイ。ヨル〳〵鹿ノナク聲デ目ヲサマシツ〳〵。夜ハ長シ何ヤラカヤラトヒ儀ナコトヲ思ヒツヾケラレテサ。

おく山にもみじふみわけ鳴鹿の聲聞時ぞ秋はかなしき　よみ人しらず

○秋ハ總體カナシイ時節デヤカ。其秋ノ内デハ又ドウイフ時ガイツチ悲シイゾトイヘバ。紅葉モモウ散テシマウタ奥山デ。ソノチツタモミヂヲ。鹿ガフミワケテアルイテ鳴ク聲ヲキク時分カサ。秋ノウチデハイツチ悲

○奥義抄に普通の本には秋風にとはべるといへりさあらば意あきらかなり

シイ時節ヂヤ。

ふみわけは。鹿のふみ分るなり。

題しらず

秋萩にうらびれをれば足引の山したゞよみ鹿の鳴らん

○萩ノ葉モ段々枯テイクヲ見テ。時節ノ物カナシサニ。此ヤウニ。ウナシチナゲテ居ルノニ。ドウ云フデアノヤウニ山ノ下マデヒヾクホド鹿ガ鳴コトヤラアノ鹿ノ聲ヲキケバイヨ〳〵悲シウテドウモタヘラレヌニ。をればゝ。をるにの意なり。

秋萩をしからみふせてなく鹿のめには見えずて音のさやけさ

○野ノ萩ノ中ヲフミアラシテオシフセテシガラミニシテ鳴テアルク鹿ノ目ニハ見エイデ。アノマア聲ノサヤカニヨウ聞ユルフワイ。

（千秋云。古へは鹿などの鳴ふるをもおとゝもいへり。萬葉に鶯のおとなどもよめり）

是貞ノみこの家の歌合によめる

○しがらみは河をせき岸のくづるゝをとゞむるとて柴竹などを枕にからみ付るを云ふ。ハ萩原に入て鹿のふみからみなどするをそのしがらみによせていふなり

ふぢはらのとしゆきの朝臣

あさはぎの花咲にけり高砂のをのへの鹿は今やなくらん

○アレ萩ノ花ガサイタワイ。山ノ鹿ガモウナクデアラウガ。

むかしあひしりて侍ける人の秋の野にてあひて物がたりしけるついでによめる

みつね

秋萩のふるえおもさる花見れバもとの心はわすれざりけり

○萩ノ去年ノ古枝ヘアレアノトホリ又花ノサイタチ見レバ草木デモマヘカタノ事ヲバ忘レハシマセヌワイ。スレヤンコモトモ。中絶ハ致シタケレド。先年御コンイニ致シタ事ハオ忘レハナサルマイ。

題しらず

よみ人しらず

秋ぎの下葉色づく今よりやひとりある人のいねかてにする

○萩を鹿の妻ともたはふれにいへばその心もあるべし

○冬は莖もみな枯て春あらたに生るあり又莖立がれずしてそのくきより春は枝をさすありそれを未萩といふなり

○ひとりある人とは夫をうしなひ妻に別などしてひと

のみあるなりさらずとも云べけれども上にもとの心はわすれずと云に次で下には物おもふやとの云あいたるにてしらるゝなり

○萩ノ下葉ガソロ〳〵枯カケテキタ。アヽ段々ト夜ハ長ウナラウシモウコレカラ又。オレガヤウナ。獨ズミノ者ハ。子ラレヌデ。アラウカイ。

（千秋云。此歌。二の句にてきれたり）

鳴渡るかりの涙や落つらん物思ふ宿の萩のうへの露

○アレハテヽ悲シイコチノ庭ノアノ萩ノウヘヽ。露ガキツウシゲウオイタガ。ソラヲワタル雁モ。オレガヤウニカナシイコトガアルカシテ。泣テイタ。スレヤアノ雁ノナク涙ガオチタノカシラヌ。アノ萩ノ露ハ。

萩の露玉にぬかんとたればけぬよし見ん人も枝ながら見よ

○萩ノ露ガキラ〳〵トシテアマリ見ゴトサニ玉ニシテツナガウト思テトツタレバヂキニ消タ。エイリ。ソンナラ見ヤウト思フ人ハトラズニヤハリ枝ニアルマヽデ見ヨサ。

ある人のいはく此歌はならのみかどの御うたなりと

をりて見ばおちぞしぬべき秋萩の枝もたわゝにおける白

めるなりとを云も同言なり

○露霜は所によりて露と霜とに二つなるもあれどもあゝのさまにいへるは秋更て露なるから霜をかねていふ也萬葉にみゆそのときはつゆしもと霜をにごりてよむ例也

○成案に熟字を一義に用ふるもにそのれいと和と多し左傳に賜諸侯使臣妾之唯命とあるは臣と妾とふ

露

○萩ノ花ノエダモヒツ〳〵トタワムホドオイタアノ露カキツウ見事ナガ。アレテ。折テ見ヤウトシタナラ。サダメテ落テシマウデサアラウ。

萩が花ちるらん小野の露霜にぬれてを行んさよはふくとも

○今夜妹ガトコロヘイカウト思フ野道ハ。　萩ガ散テ。サゾ露モフカイデアラウガ。ヨイワヌレテイカウゾ。夜ガフケテ。露ハシゲクトモ。露霜といふはたゞ露のことなり。萬葉に多し皆しかり。

（千秋云。ぬれてをのを。は助辭ながら。其事をつよくいへる詞なり）

是貞のみこの家の歌合によめる　　文屋のあさやす

秋の野におくしら露は玉なれや貫きかくるくもの糸すぢ

○秋ノ野ノ露ハ玉ヂヤカシテ。蜘ノ糸スヂヘツナイデカケタ。

題しらず　　僧正遍昭

たつにあらず源氏物がたりの雨夜の品定めの條になつかしきつまあと頼んといへるも姿のあとにて子の義にあらずまた合義解簡因隋筆にも説わり猶委しくは金杉日記にいへり今は概略を云ふのみ

○あゝにうしなはねためるあまりに変しとなりいせ物がたりにきの立ふけふ雲のなかくさはひかくさの林をうしとなるべ

名にめでゝれるばかりぞ女郎花われおちにきと人にかたるな

○女郎花ト云。名ガヨサニ。チヨツト馬カラオリテ見タバカリ。ヂヤゾカナラズ。オレガ。女ニオチタト人ニ云デハナイゾヨ。

（千秋云。そのかみ然るべきほどの法師ハつねに馬にのりてありきしなり。ものに多くみえたり）

おれるとい。馬よりおりたるをいふ。をみなへしを折れるにはあらず。

打聞わろし。

僧正遍昭がもとにならへまかりける時にをとこ山にてをみなへしを見てよめる　ふるのいまみち

をみなへしうしと見つゝぞ行過る男山にしたてりとおもへば

○アノ女郎花ヲバアヽイタヅラナ女ヂヤト思フテオレハヨソニ見テサ。通り過ディク。コヽハ男山ナレバ男ノ中ニマジツテ居ル女ヂヤト。思フニヨツテサ。

是貞ノみこの家の歌合のうた　とものさの朝臣

秋の野に宿りはすべし女郎花名をむつましみ旅ならなくに

○トマルナラ秋ノ野ニトマルガヨイ。女郎花ガアツテ女ト云名ガムツマシサニヨツテ。寐ルヤツデハナイワサテ。

二の句のばもし。心をつくべし。餘材可聞ともにときえずわろし。

（千秋云。心遣き所にはあらでも。常の家をはなれて。他所にて寐るを旅寐と云ふと常なり）

題しらず　をのゝよしき

女郎花多かる野べにやどりせばあやなくあだの名をや立なん

○万葉に赤人の野をなつかしみひと夜ねにけりといふたぐひなり

しと云に同じ

○上の歌と贈答のやうに次でたり

○女郎花ノ多クヾル野ニトマツタナラ。ワケノナイコニアダナ名ガタヽウカシラヌ。女郎ト云ハ名バカリデコンアレホンノ女デモナイニ。

朱雀院のをみなへし合によみて奉りける　左のおほいまうちぎみ

をみなへし秋の野風に打なびき心ひとつをたれによすらん

○チミナメシガ。秋ノ野ノ風ニナビケガ。タレニ心ヲヨセテ。アノヤウニナビクヤラ。

心ひとつといふハたゞ心といふことなり。

秋ぎりで逢とかたき女郎花あまの川原におひぬものゆゑ　藤原定方朝臣

○天ノ川コンタナバタノ秋デナウテハアハヌ所ナレ。アノ女郎花ハアマノ川ノカハラニハエテアルデモナイニ。秋デナウテハアフコガナリガタイ女ヂヤ。

○六帖ニ古ノゆゑトいふ詞ハなガらと云ニ同シ一本ニ天ノ河原ニたゝぬ物からとわるをもてもものなガらなるをしるべし

○歌ニ秋ニあらぬものかからとわり物かからハ物なガらのゑとハ誰ゆゑハもさらもしれりさらハ物ゆゑハもおなガらとおなし言とすべきなりまだきハいまだきてふ言の略なりその時よりまへのことを云

誰秋にあらぬ物ゆゑ女郎花なぞ色に出てまだきうつろふ　つらゆき

○誰ガ飽タトイフ秋デモナイニ。女郎花ハドウシタコトゾ。アノヤウニ色ニデテ恨ンデ。マダ早イニウツロウノハ。

妻こふる鹿ぞ鳴なるをみなへしおのがすむ野の花としらずや　みつね

○アレ妻チコヒシタウ鹿ガサアレナクリ。鈍ナヤツヂヤ。女郎花ヲ己ガカヨウ野ノ花ヂヤトハ知ラヌカイ。女郎花トイヘバ女ヂヤニ。ナゼアハヌゾイ。

女郎花吹過てくる秋風はめには見へねど香こそしるけれ

○女郎花ヲ吹テトホツテクル風ハ目ニハソレト見エヌケレド。テウド女ニ逢テキタ男ノ。ツツリガノスルヤウデ。女郎花ヲ吹テキタト云コガ。香デサヨウシレルゾイ。

○六帖には霧のまがきにと有此歌もきりのまがきとあり しをふとせばく詞もうるはしからねば ふの集には秋霧にのみとなはされしならん

○ながむるはものの思ふ時のさびしくてあるさまなりたゞ見るふとにあらず

人の見るとやくるしきをみなへし秋霧にのみ立かくるらむ　たゝみね

○女郎花ハ。女ノ人ヲハヅカシガツテ。ホクレルヤウニ霧ニカクレテバツカリアルガドウ云フテアノヤウニ霧ニカクレルヤラ。アレモ人ノ見ルノガメイワクナカイ。

ひとりのみながむるよりは女郎花わが住宿にうゑて見ましを

○女郎花ヨ。此ノ野原ニコノヤウニ露ニシホレテ。獨リシホ〳〵トシテバツカリ居ヤウヨリハオレガ宿ヘウツシテ植テ見ハヤシテヤラウモノヲ。餘材にしたかふべし。打聞わろし。

（千秋云ひとりとは一もとにてあるよしにはあらず女の男にそはずしてひとりあるよしにいへるなり）

ものへまかりけるに人の家にをみなへしうゑたりけるを見てよめる　兼覽王

女郎花うしろめたくも見ゆる哉あれたる宿にひとりたてれば

○うしろめたくはわがうしろの見たけれど見えぬ物なれるもておぼつかなきがもとにて何ごとにても心もとなきふとにいへり

○アノ女郎花ハ。此アレタヤドニ。見レバ人モツカズニ。タツタ一人居レバサテモマアキツカイナ物カナ。

寛平御時藏人所のをのこどもさが野に花見むとてまかりたりける時かへるとてみなうたよみける つ清

いでによめる　平さだふむ

花にあかで何かへるらんをみなへしおほかる野べにねなまし物を

○見ヲナ色々ノ花ヲハライツパイエ見ズニナゼニ此ヤウニカヘルヲヤラ。女郎花ノ多クアル野デ。コヨヒハ子ヤウデアツタモノヲ。女ト云フ名ナレバヨイトマリ所ヂヤニ。

○例によりて歌合の歌とすべし

○袴てふ言により野に脱かけおきしと意得べしあゝのにはは香なり且つあの花は女郎花の似て淺紫なり賞に香はいたりて深きものなり

是貞みこの家の歌合によめる　よしゆきの朝臣

なに人がきてぬぎかけし藤ばかまくる秋ごとに野べをにほはす

○此フヂバカマハマヘカタ何人ノ著テヌギカケテオイタ袴ゾ。毎年〳〵秋ニナレバ此野ヘンチニホハス。今ニ此ヤウニニホウハ。ナンデモコレハナミタイテイノ人ノ袴デハアルマイ。ヨク〳〵レキ〳〵ノ人ノ袴デ香ガヨウシメテアルユエデアラウ。

藤袴をよみて人につかはしける　つらゆき

やどりせし人のかたみか藤袴わすられがたき香にぞほひつゝ

○此ノ藤袴ハイツゾヤ此ノ方デオトマリナサレタ貴様ノ形見ニオイテ御歸リナサツタ袴デコサルカ。今ニワスレガタイ香ガニホフデサ貴様ノフチ

○歌にてやどりせし人の事はしらるれバ右の端にかけるがとくかけるが此集の例なるうか

○いかなるよしのありてかくはよみけんすべて題しらずとあるにハかやうに事わりげなるがあるうか

オナツカシウ存ズル。

ふぢばかまをよめる　そせい 潤

ぬししらぬかこそ匂へれ秋の野に誰ぬぎかけし藤袴ぞも

○此フヂバカマハ。此秋ノ野ヘタレガヌイデ掛テオイタ袴ゾマア主ノシレヌ香ガサ。ニホテアル。

題しらず　平ノ貞文

今よりはうゑてだに見ぢ花すゝきほに出る秋をわびしかりけり

○スヽキハドコニモタクサンニアル物ヂヤガ。ソレヤドウモセウフガナイヂヤガ。今ガラセメテハコチノ庭ニナリトモ植テハ見ヌヤウニセウゾ。アノヤウニ澤ノ穂ガデヽ。秋ノケシキガ見エレバキツウ物ガナシウテナンギナワイ。

だにはなりともの意なり。　餘材だにの意。なほとき得ず。

寛平ノ御時きさいの宮の歌合の歌

○これは袖と秋をもてあやなせし歌なり。さて袖は衣手にてたもとはその袖の本にて臂の方をいふ

○やまとなでしこは野にある紅梅色の花なり是はこの國にいにしよりさいふ生れば立る色々の花咲は唐なでしこなりそれにむかへてやまとゝ云これも古言に

秋の野の草のたもとか花すゝきほにでゝまねく袖と見ゆらん　在原むねやな

○スヽキノホノ風デナビクノハ。デウド人ガ色ニデヽ。戀シイ人ヲマ子クシ袖ノヤウニ見エルガ。スヽキノ穂ハ。秋ノ野ノ總體ノ草ノ袖カシラヌ。

○此ノ歌ニテ秋と袖とはたゞ詞をかへたるのみにて同じ意なり

（千秋云かやうに留りたるらんの格。この譯にて心得べし）

われのみやあれと思はんきりぎすなでしこ　素性法師

○キリ〳〵スガ鳴デオモシロイユフカゲニ見事ニ咲テアルアノ撫子ト云見チ。母親ヤ乳母ナドモ打ソロウテトモ〳〵ニテウアイスルヤウニ誰ニモカレニモ見セテ賞翫サセタイモノヂヤニタツタ一人ノ手デソダテル兒ノヤウニ。オレバツカリガ。アヽヨイ兒ヤト云テ。獨リ見ハヤサウナカヤ。

はあらず

○このたはれんはなまめきたはふるいとゝいみゆしかれども日本紀に結婚の二字をたへぐとも　よみしに合てこのたはれの歌にてゝ花のひもとくを女の下ひもとく方にいゝなせばやとも　おぼゆ

アツタラ此ノ花ヲ。

餘材後の說ちかし。打聞わろし。

題しらず　よみ人しらず

みどりなるひとつ草とぞ春は見し秋乙色々の花にぞありける

○春見タ時ニハ。タヾ皆同ジ青イ一ツノ草ヂヤトバカリ思フタガサウデハナイ。秋ニナツテ今見レバ。コレ此ノヤウニイロ〳〵ノサ見ゴトナ花ヂヤワイ。

もゝくさの花ひもとく秋の野に思ひたはれん人なとがめそ

○ソウタイ花ノ開クヲ紐トクト云ヂヤガ。此ノヤウニイロ〳〵サマ〳〵ノ草ノ花ノ帶紐（をびひも）トイテミダレテアル面白イ秋ノ野デ。ドレヤコチモアノ花ヲ賞翫シテトモ〳〵ニミダレテ。アハウチツクサウ。人ガ見タナラ。アレハマア何事ヂヤトフシンニ思フテアラウガ。ユルセユルセ。

月草にころもはすらん朝露にぬれてのゝちはうつろひぬ
ども

○月くさは今露草といふものにて古は衣にすりたるなり

○キルモノヲバ月草ノ花デスラウ。エイ色ナ物ヂヤ。シタガ外ヘ色ノウツリヤスイ物ヂヤニヨツテ。朝ノツユニヌレタラ。色ガ外ノモノヘウツテシマハウモシレヌガ。エイワサ。後ニハ。ウツヽタト云テモ。

仁和のみかどみこにれはしましける時ふるのたきの御覽せんとておはしましける道に遍昭が母の家にやどり給へりける時に庭を秋のゝにつくりておはせん物がたりのついでによみて奉りける

僧正遍昭

里ことあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らになる

○ふるの瀧は大和の石上のふるといふ所の瀧なり

○野らのらはそへたるのみにてあらのらともよみ今もなかの人は野をのらといへり

○此ノヤドノ義ハ。里ハアレマシタ里ナリ。住デヰリマスル者ハ老人ナリ。致シマスレバ諸事不都合ナ宿ニエカ致シマシテ。庭モ籬モ御覽下サレマストホリ。トントハヤ秋ノ野原デゴザリマス。

上句の二ツのはもし。心をかくべし。

○秋歌の下

是貞ノみこの家の歌合の歌

文屋ノ康秀

吹からに秋の草木のしをるればうべ山風をあらしといふらむ

○フクトソノマヽ。秋ノ草ヤ木ガアノヤウニシナレトバ。尤ナコトヂヤ。ソレデ山風ヲアラシトハ云デアラフ。

(千秋云。あらしといふ名は此歌のごとく物をあらす意にて。令荒(シアラ)ぬ。又あらき風と。ふきとが。風をしといふなり)

清清

草も木も色かゝれどもわたつ海の涙の花にぞ秋なかりけ

○古今六帖にはあさやすとあり

○うべは諾應の字にて、しかるとうけがへる言なり

○涙を花と見たるにうたい

しへよりわくなるしわたづみをしわたつみとよむべからずとにまたわだつみとよむべきなりとあるにおなじくおなじ朝康なりの歌も六帖にあるのみならで常磐山城にあるべしとあるとおなじ常磐山のみたてるべしの

○此の體によめるが萬葉にいと多し

○霧の立ばそのしめりにて木葉の色かはる

○草デモ木デモ。此ノ秋ト云フ時節ガアツテ。ミナ色ガカハツテ枯テシマウケレドモ。アノ海ノ涙ノ花バツカリガ。イツデモ同ジヤウニ咲テ秋ト云フコトガナイワイ。

秋の歌合しける時によめる　きのよしもち

もみぢせぬときはの山はふく風のおとにや秋をきくわたるらむ

○秋デモ木ノ葉ノ色ノカハルト云フコトモナウテ常住同ジヤウデヤト云フ常磐山デハ。時節ガイツデヤカシレマイガ。秋デヤト云フハ。風ノ吹ク音バカリデヨソニ聞テタテルデアラウカ。

題しらず　よみ人しらず

霧たちて雁ぞ鳴なるかた岡のあしたの原はもみぢしぬらん

○霧ガ立テ。アレ雁ガサ。ナクワ。コレデハモウ。片岡ノ朝ノ原ハ。紅

るゆゑ霧立てといへり

○今も二上山のひがしの方にいと長き岡のありてそれをかたをかといへりわしたの原もその邊なるべしとぞ今は島にひらけてわかちなし

○戀歌にてはあらぬか

○貞觀の御時は清和天皇なり此殿におはしまし三代實錄にみゆ

葉シタデアラウ。

神無月しぐれもいまだふらなくにかねてうつろふ神なびのもり

○木葉ヲンメル十月ノ時雨モマダフラヌニ。神ナビノ杜ハ。ハヤカ子テチヤント色ガ染マツタ。濁ミ

ちとやぶる神なび山のもみぢ葉と思ひはかけじうつろふ物を

○心ノカハリヤスイ人ニ思ヒナカケルハアハウナコトデヤガ。此ノ神ナミ山ノ紅葉モンシナモノデヤ。思ヒハカケマイゾ。ホドナウチツテシマウモノヂ。

貞觀の御時綾綺殿のまへに梅の木ありけりにしの方にさせりける枝のもみぢは玄めたりけるをうへにさふらふをのこどものよみけるついでによめる

○大和物がたりにも同じ枝をわきて霜をく秋なればとよめり

同じえをわきてこのはのうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ　藤原ノかちかむ

同ジ一本ノ木ノ枝ヂヤニ。西ノ方ヘサシタ枝ガトリ分テアノヤウニ色ノカハツタヲ見レバ。ナルホド西ガサ。秋ノハジメヂヤワイ。

いし山にまうでけるときおとゝ山の紅葉を見てよめる　つらゆき

秋風の吹にし日よりおとは山みねのこずゑも色づきにけり

○後撰にまつ出の初ちるさそふ秋風は音羽山より吹そめにけりといふも音羽の音にもの音に云なしたり

○秋ノタチソメタ日カラシテ風ノ音モカハツテキタガ。今日見レバ此ノ山ノ木ドモヽソロ〳〵色ガツイテキタワイ。

（千秋云。この譯にて。上句を心得べし猶もといへるにて。風の音もかはりたる意を思はせたるものなり）

是貞ノみこの家の歌合のよめる

しら露の色とひとつをいかにして秋のこのはをちぐにそむらん　としゆきの朝臣

○露ノ色ハミナ同ジ一ツノ白イ色ヂヤニ。ドウシテ秋ノ木ノ葉ヲアノヤウニイロ〳〵ノ色ニソメルコヤラ。

（千秋云。ひとつをのをは。ものをの意にて。ひとつなるものをいへるなり）

秋の夜の露をばつゆとおきながら雁の涙や野べをそむらん　壬生忠岑

○秋ノ夜ノ露ヲバ。白イ露デソノマヽデオイテ。別ニ雁ノナク涙デアノ野ノ草木ヲバ。ソメルカシラヌ。

題しらず　清　よみ人しらず

秋のつゆいろ〳〵とにおけばこそ山のこのはの千種なる

らめ

○秋ノ露ハタヾ白イ物デヤトバカリ思フテ居ルガサウデハナイサウデ。色々チガウテオクサウナ。ソレデコソ。染ッタ山ノ木ノ葉ガアノヤウニサマ〳〵ノ色デアラウ。

もる山のはとりにてよめる　つらゆき

しら露もしぐれもいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり

○露モ時雨モキツウモルコノ守ル山ノ木ドモハ下葉マデノコラズ色ヅイタワイ。

秋のうたとてよめる　ありむらのもとかた

雨ふれど露もゝらじをかさとりの山はいかでか紅葉そめけん

○カサトリ山ハ傘チモット云フ名ナレバ。雨ガフツテモ。露ホドモモリハ。スマイニドウシテアノヤウニ。紅葉シソメタコトヤラ。

○あへずは堪はてぬなり歌にはよりてあはせずと云をあへずといふもありあゝはしからす

○雨ふればといはい笠取とはいはんとておけるのみ

神のやしろのあたりをまかりける時にいがきのうちの紅葉を見てよめる　つらゆき

ちはやぶる神のいがきにはふ葛も秋にはあへずうつろひにけり

○コレハマア神社ノイガキニハウテアル葛ナレバ神ノ御守リデ。色ハカハリソモナイモノナレド。ソレデモ。秋ニハエコタヘズニ色ガカハッタワイ。

是貞みこの家の歌合によめる　たゝみね

雨ふればかさ取山のもみぢ葉は行かふ人のそでさへぞてる

○(一)笠取山ノ紅葉ハコトノ外ヨウ染テ往來ノ人ノ袖マデサ色ガカヾヤイテヰリマス。

寛平ノ御時きさいの宮の歌合の歌

○かぎりの色とはちしはに染つくしたるなり

○さは山は春日山の西北にあり

○立かくすのたつを錦を截ちとによせていへりと云は過たらんか只さるよせの詞なくてみよいと高しかし

ちらねどもかねてぞをしきもみぢ葉と今とかぎりの色と　よみ人しらず

見つれば

○此ノ紅葉ヲ見レバ。マダチリハセ子ドモ。チラヌサキカラサ。惜イモリ十分ニソメタレバ。オツトケチルデアラウト思ヘバサ。

やまとの國にまかりける時さは山に霧のたてりけるを見てよめる　きのとものり

誰ための錦なればか秋霧のさほの山べを立かくすらん

○此ノサホ山ノ紅葉ハ。タガタメニドノヤウニ大切ニスル錦デ。アノヤウニ霧ガカクシテ。人ニモ見セヌ〜ヤラ。セツカク紅葉ヲ見ヤウト思フテキタニ。

是貞ノみこの家の歌合の歌　よみ人しらず

秋霧はけさとな立そ佐保山のえ〜その紅葉よそにてもみん

○うすきといふにふかきをむかへてよめるのみかなとるのみにて秋を惜む心みゆ此のかなは歎くとばなり

○前栽は草木うゑるところを云歌の端詞に字音もて云ふはこのところよりのならはしなり

霧ハドウゾケサハ立テクレルナイ。アノサホ山ノ柞ノ紅葉ヲヨソカラナリト思見ヤウニ。

秋の歌とてよめる　坂上ノこれのり

さは山のはゝその色は薄けれど秋は深くもありにけるかな

○ソウタイ柞ノ木ト云モノハ。ナンボ染テモ色ノアマリ濃クハナラヌ物ナレバ今マ此サホ山ノ柞モ色ハウスウテ。深ウハナイケレドモ。アノケシキヲ見レバ。サテ〜マア秋ハイカウ深ウナツタ〜カナ。

人のせんざいに菊にむすびつけてうゑける歌　ありはらのなりひらの朝臣

うゑしうゑば秋なき時や咲さらん花こそ散め根さへ枯めや

濁

○カウシテウエテサヘオイタナラバ。コレカラ後秋ト云時ガナイコトガアツタラバコソサカヌ〜モアラウカシラヌガ。秋ト云時節サヘアラバ咲ヌ

ド云フハアルマイ。此今年ノ花コソチツテシマハウケレ根マデガ枯レウカ根ハカレハセ子ガ。イツマデモ毎年秋ハ咲クデアラウハサテ。

寛平ノ御時きくの花をよませ給うける　　とし行ノ朝臣

久かたの雲の上にて見る菊は天つ星とぞあやまたれける

○カヤウニ禁中デ見マスル菊ノ花ハ。雲ノ上デゴザリマスニヨツテ天ノ星ヂヤトサ。トリチガヘラレマスルワイ。

この歌はまだ殿上ゆるされざりける時にめしあげられてつかうまつるとなん

是貞ノみこの家の歌合のうた　　紀ノ友則

露ながらをりてかざしつん菊の花老せぬ秋の久しかるべく

○菊ノ露ハ壽命ヲ長ウスルモノヂヤ。キケバ。イツマデモ年ノヨラズ秋ヲ久シウ重ヲテ長生スルヤウニ。此菊ノ花ヲ露モソノマヽデ折テ頭ヘサヽ

○是れはから國に慈童といふ人菊を愛しして命長かりし事又菊の水をのみて百歳あまりながらへたる人多しといへるなどを本として折てかざしてもしかし老せざるべしといへる菊はかの國のなれば國の事をもてよむもよろし

○この詩は例の後人のしわざなり

ウ。

寛平ノ御時きさいの宮の歌合の歌　　大江ノ千里

うゑし時花待どほにありし菊うつろふ秋にあはんとや見し

○春ウエタ時ニハ。早ウ花ノサク秋ニシタイト。マチドホニ思フタ菊ガマア。盛リガ過テモウ色ノカハツテシマウ時節ニナツテコノヤウニナツタノヲ見ヤウトハ。思フタカイ。

(千秋云。結句やもしは。やはの意にて。うつろふ秋にあはんとハ思はざりしものをといへるなり)

おなじ御時せられける菊合にすはまをつくりて菊の花うゑたりける歌ふきあげの濱のかたに菊植たりけるをよめる　　すがはらの朝臣

○秋風の吹上といふより波のよするはいたり

秋風の吹上にたてるしらぎくは花かあらぬか涙のよするか

○秋風ノフク吹キ上ノ濱ニアルアノ白イ菊ノ花ハ。花カサウデハナイカ涙ノヨセルノカ。風ガフクナレバ涙ノヨセルヤウニモ見エルガ。

仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる　素性法師

ぬれてはす山路のきくの露のまにいつか千年を我はへにけん

○在所ヘカヘツテ見タレバモハヤ千年モ過タヤウスデヤガオレハ仙人ノスミカヘイクトテ。山道ノ菊ノ花ノ中ヲ分テイテ其ノ菊ノ露ニキル物ノヌレタヲ千ス間タホドノチツトノマデアツタニイツノマニマア千年モタツタヿヤラ。

きくの花のもとにて人の人まてるかたをよめる　とものり

○から國に王質と云ふ人山に入て人の碁を打つを見る間に斧の柄の朽たるをおとろきけんことを思ひてよめるなるべし

○から國に酒明と云人九月九日にまがきの菊をめづるに酒なかりけるに大守王弘酒をもたせて其使おほせしは白衣を着たりしかば詩に白衣來ると作れりその意にて白たへの袖とよめり

花見つゝ人まつ時しろたへの袖かとのみぞあやまたれける

○庭ノ菊ノ花ヲ見イ〳〵クル人ヲ待テ居ルトキニハソノ白イ花ガソノタルヲイ。人ノ白イ衣ノ袖ノヤウニ見エテ。ヒタモノゾヤカトトリチガヘラル、

大澤の池のかたに菊うゑたるをよめる

一もとゝ思ひしきくをおほさゝの池の底にもたれかうゑけん

○タツタ一本ヂヤト思フタ菊ノ花ヂヤニ。アレ此ノ池ノ底ニモアルワアレハ誰ガ池ノ底ヘモウエタコトヤラ。イヤ〳〵ヨウ見レバ影ノウツツタノヂヤ。

（千秋云。されまで四首の題はみなかのすはまのかたなり）

世の中のしかなきとを思ひけるをりにきくの花を見てよめる　つらもき

○きくのさかりに秋の霜ふかきわしたのさまをよめり
○心わてい躍きたる物をやみの夜に行てとるがごとし

秋のきくにはふかぎりしかざしてん花よりさきとしらぬわが身を

○菊ノ花ヲカウ咲テアルウチハ散ルマデハカザシテアソバウゾ。アノ花ヨリサキヘ死ナウモシレヌ我身ヂヤモノヲ。アソバイデハ。

白菊の花をよめる　凡河内ノみつね

心あてにをらばやをらん初霜のおきまどわせるしら菊の花

○アノヤウニ初霜ガオイテ。花ヤラ霜ヤラシレヌヤウニマガウテ見エル。白イ菊ノ花ハタイガイスイリヤウデ。チラバ。折モセウガナカ〳〵見分ラルヽコデハナイ。

是貞ノみこの家の歌合のうた　よみ人しらず

いろかはる秋のきくをば一とせにふたゝびにほふ花とこそ見れ

○仁和寺は光孝天皇の仁和四年に京の西山に作られしより仁和寺といふ

○ハジメノホドヽハトント格別ニ色ノカハツタアノ菊ノ花ハ。同ジ本ノ花トハ見エヌ一年ニ二度サイタ花ヂヤトサ思ハルヽ。餘材下句意違り。打聞よろし。

仁和寺にきくの花めしける時に歌そへて奉れとれはせられければよみて奉りける　平ノさだふん

秋をおきて時こそありけれきくの花うつろふからに色のまされば

○キクノ花ハ。ウツロイマシテカラ。又カヤウニ始メヨリハ色ガマサリマスレバ。秋ノ一トサカリバカリデハゴザリマセヌ。秋ガスギテカラ又マイチド。盛リノ時節ガサゴザリマス。恐レナガラ。陛下ノ御義モコノ菊ノ花ノトホリト存ジ奉リマス。

人の家なりけるきくの花をうつしうゑたりけるを　つらゆき

よめる

○うつろふと云ふに家をうつろふもとをかふるなれば同言もてあやとするか

○べみはべくしてなり六帖にちりぬべきとあるよろし

○關雄は才學ありて能書なり閑居をこのめる人にて山里にもれるもて東山進士

咲そめし宿しかはればきくの花色さへにこそうつろひにけれ

○此ノ菊ノ花ハ始メニ咲ダヤドヽ。ヤドガ替ッテウツヽタレバ。所ノウツッタバカリカ花ノ色マデガサ。アノヤウニウツヽテカハッタワイ。

よみ人しらず

題しらず

佐保山のはゝそのもみぢ散ぬべみ夜さへ見よと照す月かげ

○アノサホ山ノ柞ノ木。モミヂガ。オツヽケ散ラウヤウニ見エテヨッテ。甚バカリデナシニ。夜ルモ人ニ見ヨト云テ。アノヤウニ月ガアカイ。

藤原ノ關雄

みやづかへ久しうつかうまつらで山里にこもり侍りけるによめる

おく山のいとかきもみぢ散ぬべしてる日の光り見る時なくて

と名づけられたるもと國史に見えたりもの歌はそもにてよまれしなるべし

○ながるめりはながれりをのべ延ていふもとばなり

○もの注は例のとらず

○木の葉の風にちるはもとよりのもとにて雨に散とよめるも古歌に多し

○此ヤウニ高イ岩ノ築地ノヤウニ立テアル陰ニアル奥山ノ紅葉ハ日ノ光ヲ見ル時モナシニ散テシマウデアラウト思ハレルガ。アヽクチチシイオレガ身ノウヘモテウド此ノ紅葉ト同ジヿヂヤ。

よみ人しらず

題しらず

立田川もみぢみだれてながるめりわたらば錦中やたえなん

○立田川ハ紅葉ガチリミダレテ今最中流レルヤウスニ思ハレル。ソレデハ今渡ッタナラバ。アッタラ錦ガマン中カラキレルデアラウカイ。

此歌ハわる人ならのみかどの御歌なりとなん申す

たつた川もみぢ葉ながる神なびのみむろの山に時雨ふるらし

○此川ニ紅葉ガナガレル。神ナビノ御室ノ山ニ時雨ガシテ風ガフクサウナ時雨といふに風のふくことを。もたせたるなるべし。

またはわすか川もみぢ葉流る

〔此歌不注人丸歌〕

○しのばんハしたはんなり万葉にもはらふとを云てしのぶと云てかくすてとにいハずとの集にはとにいひすてとの歌のふ意とくしたなくに云はすくな

清

戀しくは見てもしのばん紅葉ばをふきな散しそ山おろしの風

○紅葉ハモウ散テシマウタガ。今カラモ散タ紅葉ノ戀シイ時ニハ。此落葉ヲナリ見テ愛セウニソノヤウニヨソヘフキチラシテヤルナイ。コレ山オロシノ風ヨ。

（千秋云。古のもみぢ葉は。ちりしにきたる落葉をいへるなり。見てもといふにて怨聞えたり。せめては落葉を見てもなり。ももじわはれなり）

秋風にあへずちりぬるもみぢ葉のゆくへさだめぬ我ぞかなしき

○秋風ニエコタヘズニ散ルアノ紅葉ノ。アチヤコチヤ散テイテ。ドコ迄ナク方ノ定マラヌヤウニ。オレガ身モ行末ノドウナルヿヤラシレヌガサカナシイ。

秋ときぬ紅葉はやどにふりしきぬ道ふみわけてとふ人もなし

○物ガナシイ時セツニハナツタナリ。紅葉ハ庭ヘチツテシマウ。ソノ散リシイタ落葉ヲフミ分テタレモ尋ヲテクル人ハナシ。サテモ〳〵何モカモソロウテサビシイコトカナ。

三のはもしに。心をつくべし。餘材に初句を。秋の暮れは來ぬといへるはしひでとなり。秋とは物かなしき時節といふ意にいへる例多し。

ふみわけてさらにやとはんもみぢ葉のふりかくしてし道と見ながら

○アノ家ヘハイル道ハ。アノヤウニ紅葉ガチリシイテ。タレモ人ノミシラヌヤウニ。フミ分テコヌヤウニト。隱シテアル道ヂヤニ。サウト見ナガラ。ソレヲフミ分テ。今サラ見舞ツベキヿカ。サウト見ナガラフミ分テ見舞ハウヤウハナイ。

秋の月山べさやかにてらせるとおつるもみぢの數を見よとか

の説あれどわろし秋のはじめて來ぬとふにあらずいつにてもといふなり

○色のちぐさ貫之筆の本にはちぐさの色とあり

○白楽天の詩に纎レ霜織レ露三秋錦とあるなどをとれるなるべし

○月ノアノヤウニ山チサヤカニテラスノハオチル紅葉ノ數ハイクツヂヤト云コトチトクト見ヨトテノヿカヤ。

吹風の色のちぐさに見えつるも秋のこのはのちればなりけり

○風ニハ色ハナイモノヂヤニ。アノヤウニ風ノ吹ク色ガ。イロ〳〵ニ見エルハドウシタコトカト思ヘバ。紅葉ノチルユヱヂヤワイ。

せきを

霜のたて露のぬきこそよわからし山の錦のおれバかつちる

○山ノ紅葉ハ露ヤ霜ニ染マツテ。ソシテ錦ノヤウニナルヂヤ。スリヤ。霜ト露トガ錦ノハタチ織ル竪ト横トノ糸ノヤウナ物ヂヤガ。ソノ露ト霜トノタテヨコノ糸ガサ弱イサウナ。ソレユヱカシテアノ紅葉ノ錦ガ織ルカト思ヘバ。ハヤ片方カラ破レルヤウニチリマス。

うりんゐんの木のかげにたゝずみてよみける

○たゝずみては立やすらひてある㕝を云

○諺に云ふたのむ木の下に雨もりてと云ふ如く世によろづわびたる人の立よる木の下ハ紅葉もたのむかげなくちるとなり

○何にても心にかなハぬ人をわび人と云り

僧正遍昭

わび人のわきて立よるこの本は頼むかげなく紅葉散けり

○ナンジフナ身ハ。ナニカラナニマデナンジフナモノカナ。コレハ頼モシイヨイ陰ヂヤト思フテ見ワケテ立ヨルコノ木ハ。ヨニモ早ウ紅葉ガチツテシマウテ。トリワケテ早リ。

二條ノ后の春宮のみやす所と申しける時に御屛風にたつた川に紅葉ながれたるをかけりけるを題にてよめる

そせい

もみぢ葉のながれてとまるみなとには紅ふかき浪や立らん

○此ノ立田川ノ紅葉ガ。ツヽト下ヘ流レテイテ。トマル湊ノアタリニハマツカイナ色ノヨイ浪ガタツデアラツカ。

なりひらの朝臣

ち（濁）はやぶる神代も聞ず立田川からくれなゐに水く（清）ゝると

○六帖にこのはみなからくれなゐにくゝるとて霜のわるにもおきまさる哉なとよめるも校染なあれはこそ霜のあやにもといへかつこの歌くゝるにあらぬ證は水と云詞も見ねとふ詞くゝり染よくふとをよめるとおもひ定むべし

○塵に散をもかけたりくらきふ山にくらきをよせたり

○古本には道もしられずとわり

○飛鳥の神並なり

は

○此ノ立田川ヘ。シケリ紅葉ノ流レルトコロヲ見レバ。トント紅塵子紅シボリ。ト見エルワイ。サテ〳〵奇妙ナ一カナ。神代ニハサマ〳〵ノキメウナ事ドモガアツタヂヤガ。此ノヤウニ川ノ水ヲ。紅ノクヽゾリメニシタト云フ一ハ。神代ニモイツカウキカヌ一ヂヤ。

（千秋云。くゝりぞめは。令式などにも見えて。絞纈といへるなれなり）

是貞ノのみこの家の歌合の歌

我來つるかたもしられずくらぶ山木々のこのゝの塵とまがふに　としゆきの朝臣

○此クラブ山ノ木ドモノコノハノ最中ヲリマガウノデ。今トホツテ來タ方モ。ドチカラキタヤラシレヌ。

神なびのみむろの山を秋ゆけば錦たちきる心ちこそすれ　たゝみね

○から國朱買臣といふ人の言に富貴にして故郷に歸らざるは綉衣を着て夜行が如しとのたまへりそれよりかの國にてはくいへるもて夜の錦とたとへなせり

○今秋ノコロ此ノ神ナヒノミムロノ山ヲ通レバ。紅花ガチリカヽルデ錦ヲ着ルコヽロモチガサスルワイ。

（千秋云。たちの譯なきい。俗語にはこの詞なきがよろしきなるべし）

北山にもみぢをらむとてまかれける時によめる　貫之

見る人もなくてちりぬるおく山の紅葉ぞよるの錦なりけり

○ナンデモセンノナイフチバ夜ルノ錦ト云ヂヤガ。見ル人モナシニ此ヤウニムダニ散テシマウタ奥山ノ紅葉ハ。ナンボ見事デ錦ノヤウデモ。マコトニ夜ノ錦ヂヤワイ。

秋のうた　かねみの王

立田姫たむくる神のあればこそ秋のこのはのぬさとちらめ

○立田姫ハ神樣ヂヤガソレデモ又御手向ナサル神樣ガアルヤラコソ。御自

○小野は京の北にある山里なり

○今の本に過てとあるはわろし古本にはまえてとあり

○立田川のかみに神奈山のあるがごとく思ひわやまりてよめる歌をさるあとゝそ

身ノ御染ナサツタ。紅葉ガ。アレトント手向ノ廂ヲチラスヤウニチリマス。

小野といふところにすみ侍ける時もみぢを見てよめる　つらゆき

秋の山もみぢをぬさと手向ればすむわれさへぞ旅ごゝちする

○秋ノ山デハアレアノトホリニ。紅葉ノナルヤウスガテウド旅ノ人ノ道クダリ神々ヘ廂ヲチラシテ手向テユクヤウニ見エルニヨツテ住デ居ルコチマデガサドリヤラ旅ノコヽチガスル。

神なひ山を過てたつた川を渡りける時にもみぢの濁　きよもらのふかやぶ

ながれけるをよめる

神なひの山を過行秋なればたつた川にぞぬさやたむくる

○コチモ今マ神ナビ山ヲ過デキテ立田川ヲ渡ルガ。暮テ行ク秋モソノトホリデ。神ノゴザル神ナビ山ノ。紅葉ハモウ散テ。ソコニハスギテ西ヘユ

らにおぼえてよめれば又それに從て撰者はしの詞を作りてかけるものなるべし

○あの頃の人名所などはよく問はで例の歌になづみてよめるゆゑにかくひがごとのいでくるなり

○新撰萬葉に三の句うかべるは末の句舟にさりける六帖に舟かとぞ思ふとあり

○伊勢が涙のはなおきかからさきにちりくづれも聞ゆめり水の春とは風やなすらんとよめるも

ケバ。アレアノヤウニ。紅葉ノヌサチバ立田川ヘサタムケマス。

神なび山は山城國乙訓郡立田川はその西にて津國島上郡なりともに山崎のあたりなりこの事別に考へあり。

（千秋云。師のこの考へ。玉勝間の初若菜卷に。くはしく見えたり）

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　藤原ノおきな風

白なみに秋のこのはのうかべるをあきの流せる船かとぞみる

○涙ノ上ヘ木ノ葉ノチツテウイテアルノハ。獵師ノ流シタ船デハナイカトサ見エル。

立田川のほとりにてよめる　坂上ノ是則

もみぢ葉のながれざりせば立田川水の秋をば誰かしらまし

○木葉ノ青イノハ色ノカハルデ秋ガシレルガ。水ノ青イノハ色ノカハラヌ

てれなり

○あへぬこゝにては絶ぬにて常の言にはながれもばてぬといふがごとし

○濁れば影の見えぬ故に水きよみといひ

モノナレバ。秋ガシレヌニ。今マ立田川ノ水ヲ見レバ。紅葉ガ流レルデ秋ヂヤト云フガシレタ。モシ此ノヤウニ紅葉ノナガレルフガナイナラバ水ノ秋ヲバドウシテ誰レカシラウゾ。シルモノハアルマイ。

しがの山ごしにてよめる　はるみちのつらき

山河に風のかけたるしがらみとながれもあへぬ紅葉なりけり

○山川ヘアレ風ガモテキテシガラミヲカケタト見エルノハ。エナガレモセズニトマツテアル。紅葉ヂヤワイ。アレハ風ガフクデアマリシゲウモミヂガチツテセキカケ〳〵流レテクルニヨツテ。サラ〳〵ト下ヘ。エ流レテハイカズニアノトホリニシガラミノヤウニヨドムヂヤ。

池のほとりにて紅葉のちるをよめる　みつね

風ふけば落るもみぢ葉水清みちらぬ影さへ底に見えつゝ

○風ガフケバ。チトヅヽソロ〳〵紅葉ガチリカケタガ。此ノ池ノ水ガキヨ

て池のさまをそへたり

○見てをのをはにと云におなし

○かうはとハはぶきて云なりはとは音便にてをのごとくとなふ万葉に借庭とかけ

サニ。マダチラズニ枝ニアル紅葉ノ影マデガ底ヘヨウウツヽテ。ハヤ大分チツタヤウニ見エル。

亭子院の御屏風の繪に川わたらんとする人のもみぢのちる木の下に馬をひかへてたてるをよませたまひければつかうまつりける　たちとまり見てを渡らんもみぢばゝ雨とふるとも水はまさらじ

○シバラク立トマツテ。アノ紅葉ヲ見テカラ此ノ川ハ渡ラウ。雨ガフレバ水ガマシテ川ガ渡ラレヌヂヤガ。紅葉ハ雨ノヤウニナンボフツタトテモ水ハマシハスマイボドニ。

是貞のみこの家の歌合の歌　たゝみね

山田もる秋のかりほにおく露はいなをほせ鳥の涙なりけり

○秋ノコロ山ノ田ノ番ヲスル此ノ小屋ヘコノヤウニ露ノナイタハ。稲負セ

りあれは田所の遠き里は秋にのなりてその田所によりてかりそめの庵をつくりて仕なれは稲を刈て後里へかへるなりそのかりの庵をかりはと云ふしゝ鳥なとを追とていとちひさくつくりてをおくを云ふにおらず

○ひつぢハ一度刈たる稲莖くきより又葉の生長るをいふ

鳥カ此ゴロハ來テシケウ鳴ケバ。ソノナミダヂヤワイコレハ。

題しらず　よみ人しらず

はにも出ぬ山田をもるとふぢ衣いなばの露にぬれぬ日はなし

○マダ穂モデヌ山ノ田ヲトウカラ雷ヲスルトテ。毎日〳〵稲ノ葉ノ露デキルモノヽヌレヌ日ト云ハナイ。百姓ト云モノハアヽナンギナモノヂヤ。

此ヤウナヤウスヲ。上ニハ御存知アルマイカ。

藤衣は。いやしきものゝきものなり。

（千秋云。こは君たる人はことにふかく心をとめて味ひ給ふべき歌なり。下として貴き人の御心ばへをも知り奉り。また貴き人の下が下のありさまをもよくしろしめすべきは歌なり）

かれる田におふるひつちのはに出ぬと世を今さらにあきてぬとか

○苅テシマウタ田ヘ。又アトヘハエタヒツチノ穂ノデヌノハ。時節モモウ秋ガハテタナリ。世ノ中ヲモウアキハテタレバ今サラ。穂ヲダサウヤウハナイト思ウテノヿカイ。

（千秋云。今さらにといふ詞は。三の句の上へうつして心得べし）

○僧正遍昭と云ふ詞ハ後に加へし物歟

北山に僧正遍昭とたけがりにまかれりけるによめる　そせい法師

もみぢ葉と袖にこきいれてもて出なん秋は限りと見ん人のため

○此ノ紅葉ヲバ袖ヘコキオロシテ入レテ持テ此ノ山ヲ出テ。インデミヤゲニセウ。人ハ定テ。秋ハモウハヤ。シマイヂヤト思ツテ居ルデアラウカサ思フテ居ル人ノタメニサ。

寛平御時ふるき歌たてまつれとおほせられけれバ

立田川もみぢ葉ながるといふ歌をかきてそのおもじ心をよめりける　おきかせ

みやまより落くる水の色見えて秋とかきりと思ひしりぬ

○今の本に立田川に思ひやりてとあるはわろし古本立田川をと云をとるべし

○夕づき夜はをくらきといはん冠辭也晦日に夕月夜は

る

○モシヤ深山ナドニハマダ秋ガ殘ツテアルデモアラウカト思フタガ。此ヤサニ深山カラ。散タ紅葉ノ流レテクル水ノ色ヲ見レバササテハモウイヨ〳〵秋ハシマヒニナツタト思ヒシツタ。

秋のはつるこゝろを立田川に思ひやりてよめる　つらもと

年ごとにもみぢ葉ながす立田川みなとや秋のとまりなるらん

○毎年〳〵秋ノ紅葉ヲ。筏ヤ船ノヤウニ流シテヤル。立田川ハ川下ノ湊ガ。秋ノトマル所デアラウカイ。ソレナラ湊ヘ尋子テイテ秋ニアヒタイモノヂヤ。クレテ行ノハノコリ多イ秋ヂヤノニ。

おがづきのつごもりの日大井にてよめる　みつね

夕月夜をぐらの山に鳴鹿のこゑのうちにや秋はくるらん

○(一)ケフハ九月晦日デモウ日モクレ方ニナツタガ。アレアノ小倉山デ鹿

あるましくかつ歌の意にあらぬことしるべし

○末にたひけをいへば上みの道は秋くれて行く旅路のよしなり

○これは上の霜の經露の緯とよめるとは異なり相似て思ひまどへる

ノナク長イ聲ノキレヌウチニ。ハヤ秋ハクレテシマウデ。アラウカ。

同じつごもりの日よめる　みつね

道しらば尋ねもゆかんもみぢ葉をぬさと手向て秋はいにけり

○秋ハモウ紅葉ノチルノヲ道ノ神ヘノ麻ニシテ手向テ。旅立シテ。インデシマウタワイサテモ〳〵ノコリ多イ一カナ。道ヲシツタナラ跡カラ尋子テナリトモユカウ。

○冬　歌

題しらず　よみ人しらず

立田川錦おりかくかみな月しぐれの雨をたてぬきにして

○立田川ヘ紅葉ノ散テ流レルトコロヲ見レバ。時雨ノ糸ノヤウナ雨ヲ。竪横ノ糸ニシテ機ヘカケテ錦ヲ織ルト見エル。

説あり

○人目のめは見るものなにに云人めが字ばいとは萬葉なの離の字疎のとをよみてうこく遠ざかるれとによめり

○今の本には清ければとあり清けれはめぐらしいは聞ゆれと古本新撰萬葉則詠とも葉にはさむけれはとしるる方にしへの意なり

冬の歌とてよめる　源ノ宗于ノ朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば

○山里ハイツデモサビシイガ。冬ハサベツシテサビシサガマシタワイ。人ノコヌ「ヲ」人目ガカレルト云ヂヤガ。今マデハタマ〳〵見エタ。人目モカレル。草モ枯レタニヨッテサ。

かれぬと思へばといふに同じ思ふに意なし此の例多し

題しらず　よみ人しらず

大空の月のひかりし清ければ影見し水ぞまづ氷ける

○昨夜ノソラノ月ガキツウサエタニヨッテ。ソノ影ノ見エタ水ガサケサハアレアノヤウニマヅ一パンニコホッタワイ。

（千秋云）三の句。菅家萬葉則詠などに寒ければとあるその方まさりて聞ゆ）

夕されば衣手寒しみよし野のよしの山にみ雪ふるらし

○夕されば夕にしわれば夕ふ詞なり春されば春之在者とかきうこと御言にしわれむと云べき美こと許等爾作例波ともよめるを見るに志阿の約佐なれば春されば御言に云ふてての夕されば云ふばも名にわればと云ふなるを知るべし

○後世雪げといひ沫雪といふは春のことなりと定むるはかたくなし冬も雪の消るは雪げとよみ

○此コロハユフカタニナレバ。イカウ寒イマ一ツ若ニヤナラヌ。コレハモウ吉野山ハ雪ガフッタサウナ。

今よりはつぎてふらなん我やどの薄おしなみふれる白雪

○コレカラハツヾイテ段々ノレカシ。コチノ庭ノスヽキヲオシナビカシテツモッタアノ雪ゲシキキツウオモシロイ。清

ふる雪はかつぞけぬらし足ひきの山の瀧つせ音まさるなり

○山ハ雪ガフルヤウスヂヤガ。フルウチニ。ハヤ片一方カラサキエルサウナソノ雪トケト見エテ。アノ山カラ流レオチル。川水ガマシテ音ガアレ高ウナッタワ。

この川にもみぢ葉なゞるおく山の雪げの水ぞ今まさるらし

○此ノ川ヘ紅葉ガ流レル。コレマデハ流レテハコナンダカ。今アノヤウニ流レテキタノハ。川上ノ奥山ノ雪ドケデ水ガマシタサウナ。ソレデ川上